
売店員と国の結界

岡屋いまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

売店員と国の結界

【Nコード】

N6074W

【作者名】

岡屋いまき

【あらすじ】

神霊山の麓の街、カミツシユ地方神殿の売店員であるラツ。ラツを慕っている巫女姫イリーサから、神霊山の結界修復の同行者選ばれる。それがラツの運命の転換期だった。

始まり

それはまだラツが学生の頃、神官として正式な資格をもらう前の事。

カミツシユ地方神殿付属神官学校の屋根の上から、ラツはサンフオにこう言われた。

「なあ、ラツ。どうしてエイラジャーは全ての魔物を追い払わないと思う？」

「サンフオ、とりあえずさ……」

「それは人間には敵が必要だからさ。しかも敵が強力であればあるほど、それに力を合わせて対応しようと必死になる。つまり魔物がいるおかげで、人間同士は大きな戦争をしないで済んでる。だからこの世界に魔物は必要って事だ。そう思わないか？」

サンフオの片手には酒瓶。

でも、酔ってなんかいないに違いない。

サンフオがうわばみなのは、同期生全員が知っている事実。

うっかり一番に見つけてしまった以上、見て見ぬ振りも出来ず、かといってサンフオの言葉に素直に頷けないラツは、自分でも綺麗な事だと思っ理想論を答える。

「魔物なんていなくても、とことん話し合いさえすれば戦わなくて、人は分かり合えるはずだ」

「なら、どうしてだ？」

「ん〜ん〜？　？　？　はあ〜。頼むから、いきなりそんな場所から難しい質問をして来るなよ、サンフオ。僕に考える時間をくれない」

「……」

その時サンフオは誰かに見咎められる事で、堂々と放校処分になる気だったのだ。

退魔術において、サンフオは同期生の中でも一番の期待の星。

例え素直に辞めたいと言っても、これほどの人材を失うのは惜しいって思惑で、考え直せと流されるに決まっているから。

それは無理でも……せめて、精神的に中央神殿へ行くのは無理があるという事で、カミツシュに残りたいが為に屋根へと出た。

ところがラツに見つかって気分が殺がれたのか、サンフォは放校願望を思い止まり、屋根から室内へと入った。

けれど卒業し、決められた着任地に赴いて一ヶ月も経たないうちに、ラツは中央神殿へ行ったサンフォが職場を無断欠勤し、更には失踪してしまった事を、他の同期生から手紙で知らされたのだった……。

神霊山と魔物

カミツシュはエイラル王国の王都から見て、東北に位置する山の麓の街である。

村でも町でもないのは、この山が古くから神の住まいである神霊山だとされており、それゆえ巡礼者を含めて人が絶えないからだ。

王国が信仰する神の名はエイラジャール。

王国の名前も、この神の名前を取っていた。

エイラジャールはエイラルを始めとする、この世界と死後の世界との境界を創った神。

そして魔物から人々を守り、王国を守護してくれていると言いつたえられている。

エイラジャールが今も神霊山にいるのかは、未だに誰も証明出来ない。

しかし神霊山から離れれば離れるほど、魔物の出現率が増え、しかも退魔術の効力まで弱くなる。

つまり神霊山が、王国を守護している力の源には間違いないようだ。

エイラル王国のみならず、その隣国、そしてなんと漂流し、たまに辿り着いた者の話では大海の向こうでも、エイラジャールを神、もしくはそれに準ずる聖人として崇め、世界の何処かに聖なる山ありとの伝説があるらしい。

けれど聖なる山と呼ばれているのとは裏腹に、実は神霊山の山頂が魔物の出現場所でもあると古くから伝えられていた。

そこで山頂に結界を張って、修復に補強を重ね、実際に魔物が現れないようにしているのだ。

神霊山があるにも関わらず、カミツシュがただの地方都市である理由もそこにある。

万が一、その結界が解けてしまった場合、これまで目撃・退治さ

れたものよりも、強大な魔物がわんさとやって来るとされている。
だから王宮はカミツシュから離れているし、中央神殿も王都内に
建っていた。

カミツシュへ参拝する事は出来ても、神霊山へは結界を張る神官
以外、当然入山禁止となっている。

魔物……人間を食らう事から、そう呼ばれるようになったモノ達
の総称。

人から見れば充分脅威なのだが、力がさほど強くない魔物ならば
文字通り食うだけでも、強力な魔物ともなれば天変地異を引き起
す。

世界のあちこちにある削られた山や大きく窪んだ不自然な地は、
強力な魔物が天変地異を起こした後だとも言われている。

エイラジャールと聖なる山のような伝説とは違い、陸海空、そし
て人の心の中から魔物はポコポコと実際に出現した。

神殿には魔物を退ける事の出来る、退魔術を扱える人々が集まっ
ており、カミツシュは中央よりも神官の結界術能力が高いと言われ
ている。

そして土地柄なのだろうか……程度はピンからキリまでだが、何
らかの力を持った人の割合がカミツシュは高かった。

学生時代

退魔術で魔物をバツバツ倒していつて、尊敬されてキヤーキヤー言われるのって、男の夢じゃん。

憧れじゃん。

浪漫じゃん。

そう思って、入学した神官学校だったが、始めの数ヶ月でラツには退魔術の潜在能力だけでなく、魔術の適性までないと、ちっとも嬉しくない太鼓判を押されてしまった。

退魔術の方はどうしようもないのだが、武術は日々の鍛錬を怠らなければ、多少は上達するはず……。

しかしラツは自分の体を使うにせよ、武器を使用するにせよ、交戦して相手を倒すというのが、どうにも性に合わなかった。

魔物の幻を見せられたりして、生死を掛けた実戦だと思えと言われても。

それがただの幻ではなくて、実際に痣や瘤を作り、流血すればするほど、ラツは武術ってサイコーツとは思えなかったのである。

更に筆記テストの成績も、努力しているわりに、メチャメチャ優秀だって風にはならなかった。

特出しているものも何もない。

授業だって寝ないで真面目に受けていたし、試験前には先生に要点を聞き、それを書き出してまとめては、ブツブツと必死に覚えていた。

……にも関わらず、そのまとめを写した同期生の方が、ラツよりも好成绩を取る事はしょっちゅうだった。

退魔術や武術、神と魔物、医薬を始めとした知識の探求・発展……同期生の多くが色々な能力を開花させ、神官としての自分の役割を見定めていく。

そんな中、ラツはこれだけは自信があると言い切れるものや、こ

れを専門にしようと思えるものがなかった。

人と自分を比べても仕方ない……そうはいうけれど、ラツはついつい比較し、そうして自嘲するしかなかった……僕って、ホント駄目駄目じゃんって。

もちろん同期生の全員が天職を見つけたわけではない。

けれどラツは特に自分だけが駄目人間のような気がしていた。

何も見つける事が出来ずに、もがいているのは自分一人のような気がしていた。

「自分って、ここにいる必要があるのかって考えた事ないか？」

同期生は男女合わせて十九人。

とつくに気心も知れたある日、ポロッとラツの口から零れ落ちた言葉がコレだ。

ウザイだ甘えだ極論に走り過ぎだと散々言われ……。

その直後からラツは能力を開花させたか否かに関わらず、同期生から頭をわしゃわしゃされたり、手を握られたり、時にはぎゅうされたり、過剰なスキンシップをされるようになり。

そしてお悩み相談を受ける回数がグッと増えた。

特にラツと同じ立場だった同期生達からで、自然お悩み相談は愚痴大会と慰め合いになった。

虚しい無い物ねだりだと、大概聞き役に回ったラツ自身を含めて誰もが自覚していた事だが、表に出さずにはいられなかった。

つい思ってしまうのだ。

力があれば、こんな風に悩む事もなかったって。

叶わないと知りながらも、願ってしまうのだ。

どんな種類でもいい、ほんの力ケラの力さえあればいいのに、力さえあれば……と。

そんな学生時代、頼られているといえは聞こえはいいが、ラツは自分って雑用係っぱいなあと思っていた。

神官学校はどんなに家が近くにあるうとも全寮制である。

一日の始めは皆を起こして、体調確認をする。

そこで誰かが病気なら、それを寮父や寮母である神官先生に知らせ、食事を部屋まで運ぶ。

必要な時は授業の準備、更に先生からお達しがあれば参考資料を探し集め、レジューメ作りをする。

更に更に、もちろん寮全体で行う時間もあるのだが……物の移動を手伝い、色々な個所を掃除し、草抜きや花壇の植え替え、水撒きもする。

街に出れば、自分の分だけでなく、皆の雑務や買い物を済ませる。時々交じる飲み会のセッティングに、恋の仲立ち。

愚痴の聞き役も雑用の一環だったのかも知れない……。

常日頃、何で僕がこんな事をしなきゃいけないんだと思いつつも、ラツは頼まれると断れない性格をしていた。

しかも一度引き受けてしまうと、次からは何も言われなくても自主的にやってしまう傾向まである。

「……たたく、僕ってホントはもつと感謝されてもいいはずだよなあ」

こんな風にぼやいて見せるのも、いつもの事だった。

ラツだって男だ。

いつまでも人畜無害な奴ではいたくないし、そのうちデッカイ事をやってやるッ！ と思っている。

幸いカミッシュの街は栄えているから、探せば神殿以外にもすぐ就職先が見つかったはずだ。

どこかの商家に勤めるなら、早いに越した事はないはずで。

大商人になれさえすれば、ラツがデッカイ事を出来る確率も少しは高くなる。

このまま力のない神官として神殿に残っても、雑用係のままで終わりそうだから。

それに世界中を見て回ってやるッて、大志を抱くのだって悪くなかった。

でも決意が付かず。

もしかしたら、僕にだって何か……という希望も捨て切れず。
ズルズルと焦り続け、苛立ちながらもラツは自主退学出来ずにい
た。

でも負けん気から、ずっと暗澹とした顔でいるのもシャクで。
カラ元気で誤魔化して、用事を受けに走った。

能力がないと分かっているのに。

特別優秀だったり、これをもっと知りたいって思えるような学科
もないのに。

卒業と同時に資格をもらったとしても、これで自分は神官なのだ
と胸を張って言えやしないのに。

そのままラツは卒業と同時に、カミッシュ地方神殿の伝承部営業
課に配属された。

転換の日

カミツシユでは巡礼者が泊まる宿屋を始めとした色々な商店が並び、週に一度は市場が催されている。

始めは巡礼者対象に設定された市場だったが、次第に商品の売り買い目当てでも人が集まるようになり、今街は賑わう一方だ。

もちろんカミツシユを訪れる人々の大半が神殿へと詣でる。

そして神殿内にある売店の一つに、営業課のラツは勤めていた。

売り物は御神くじや簡単な護符に願掛け札など。

そして直接神官に、占いや退魔を願い出たい場合の受け付けも営業課の役割だ。

一応は神官であるラツだが、ただの神殿住み込みの売店員という感じが強い。

「少々高めでもよろしければ、魔除けにはウティ産の物がお勧めですよ」

決して商人ではないので、率先してアレコレ口出しするような真似はしない。

こんな風に言うのは尋ねられたり、問いたげな目と視線がぶつかった時だけだ。

だいたいラツには、これらにどれだけの効力が備わっているかを感ずる事が出来ない。

だから、

「どうしてなの？」

と尋ねられても、ラツにはこうだと教わった知識を引っ張り出して答えるしか出来ないけれど、裏市場ではあるまいし、信頼第一の神殿がエセ物を並べるはずもない。

それに時々空いた時間や休日にフラツとやって来る、力を持つ同期生達。

それから何がお気に召したのか、ラツに懐いてしまった巫女姫イ

リーサの見立てによれば、これらは全て本物だった。

「ウティは魔物の出現がエイラルよりも多くて……、護符に込める願いもそれだけ強いんですよ」

守りの力を必要とするならばカミツシュの物、旅の道中などで遭遇した魔物を跳ね除けたいならば他所の物を。

でもエイラジャーのお膝元であるカミツシュだけは別だと、巡礼者達と同じくラツも思っていた。

ここカミツシュにいる限りは神官だなんて職業に就いてはいるが、魔物との接点はないに違いない。

部や課の人事異動はあるかも知れないが、自分だけは地味で安定した人生を過ごせるものと、ラツは信じ切っていた。

けれど今現在、ラツは呼び出しを受け、神殿のご大層な場所に立っていた。

しかも神殿長を筆頭にそれぞれの部や課の長達といった、普段ならラツなどがお目に掛かる事のないお偉方の面々が勢揃いで側にいるという、地味からは掛け離れた状況下にある。

藤色にほんのちよつと青が混ざった瞳、そして黄金色に輝く稲穂のような、豊かで美しい髪。

愛らしい唇に血色の良い卵型の輪郭。

よつぽど変わった好みをしていなければ、カミツシュ切つての美少女だと呼ばれるに相応しい顔立ちの巫女姫イリーサがその原因だ。数日後、イリーサは神霊山に登り、結界の修復を担当する事になっている。

それについてのイリーサの占いで、ラツと一緒に連れて行けば、結界の精度が上がるという結果が出たらしい。

ラツと毎日毎日、一緒にいたいですわ……それがイリーサの口癖で。

たぶん今回の占い結果というのも、その為の方便に違いないとラツはその口調から、すぐにピンツと来た。

そもそも、力のないラツが結界の出来に関係するわけがない。

しかしお偉方もどうやら、占い結果が嘘かも知れない事を、重々承知しているような感じだ。

本当なら退魔術部の誰かか、もしくは武術部や医薬部。

せめてラツと同じ伝承部でも、神魔や結界術の専門知識を持つ、司書とか見聞の課に属する者が、イリーサに同行するのが一番のはずなのだ。

けれど王国が出来て数百年、ずっと張り続けられてきた結界……

緊急事態が起こると思えない。

だからイリーサの同行者は誰であっても構わないのだと、そうお偉方は判断したらしい。

「ラツ、一緒に行って下さいますわよねツ？」

ちなみにイリーサの年齢は、九才。

下からジツツと懇願するように見上げられてしまえば、ラツが首を横に振れるはずない。

神殿長から差し出された指令書を、ラツは大人しく受け取る事にした。

巫女姫

風に揺れる葉っぱの陰が、山道にそよそよと映る。
遠くから鳥の鳴き声、近くでは小動物が枝を走る。

緑の季節、天気も気温も湿度も申し分ない。

心構えとして潔斎を済ませ、神霊山の入り口でお偉方に見送られて……登山は始まった。

一般人は立ち入り禁止になっているが、神霊山には一応道が作られている。

だが綺麗に石畳舗装で山頂まで一直線なんてはずもなく、途中には、もちろん木々の根は張り出しているし、倒木や大きな石が転がっている。

まず登るのに半日。

そして頂上に着けば、結界の状態の調査と術の行使で丸一日。

どうせ仕事には協力出来ないので、ラツは嵩張らない程度に掃除道具なんかを持って来ている。

イリーサが忙しそうにしているのに、自分だけがボツとしているというのが、どうも性に合わないのだ。

ともあれ、えらく仰々しい名前と裏腹に、神霊山はそれほど高く険しい山ではない。

山頂にはまだ雪が残っているとか、切り立った崖をロッククライミングしなくてはいけないなんて事も全くなかった。

たまに開ける風景や、緑を楽しみながらのハイキングである。

「こりゃー、日頃の運動不足も一気に解消だなあ」

神殿の行事や何かで忙しい時もあるにはあるが、日中ラツは売店に黙々と座りっぱなしだったなんて日もある。

仕事で席を立つといえれば商品の補充をしたり、周囲を軽く掃いたりする程度なのだ。

「一緒に来て良かったでしょう、ラツ？」

「ありがとう、イリーサ」

ラツがそう答えると、イリーサは本当に嬉しそうに笑った……もちろん可愛い。

けれどイリーサはラツに会うまで、こんな風に神殿で笑ったりしなかった。

生後数ヶ月にして魔物を弾き飛ばし、神官としての能力がずば抜けているからと、イリーサは物心付くと同時に家族と離れて神殿に入った。

カミツシュ以外の土地では万年神官不足で、今回のように危険のない仕事が、たびたびイリーサに回って来る。

そして無事に成し遂げるたびに、イリーサは巫女姫だと崇められるようになっていた。

しかもまだまだ発達段階にあるらしく、ちょっと力のある神官だと、イリーサの凄さを感じ取ってしまう。

周囲から一步引かれた態度をされ、イリーサは孤独だった。

自室でコツソリでも、泣けば目が赤く腫れる。

きつと気付かれてしまう。

知らず自分は巫女姫なのだから……という自負が出来上がっていて、イリーサはそんな弱音を誰にも見せたくなかった。

面会に来てくれた両親の前でもそうだった。

キツカケは何だったのだろうか？

イリーサ自身もう思い出せないが、あの日ふいに視界が滲んだ。たぶん心の中は寂しさで一杯一杯だったのだ。

慌ててイリーサは背の高い植え込みの中に紛れたものの、そう思ったら涙が次々と溢れて頬を伝い落ち、終いにはしゃくり上げていた。

それをラツは聞き付けたのである。

ラツにはイリーサの凄さなんて全く感じ取れないので、始め彼女を迷子かと思った。

実はその時ラツ自身、入寮して少しも経っておらず、探検に出た方がいいが、神殿内があまりに広く迷ってしまっていたのである。

片想いをしているイリーサにとって、今ではこれこそが厄介なのだが……。

ただの子供扱いで頭を撫でられ、久しぶりだったから、馴れ馴れしいぐらいまでに感じてしまうラツの態度が嬉しくて仕方なかった。「ラツはワタクシを別格視せずに、孤独から救ってくれました。だからワタクシはラツが好きなのです」

「あのさ、イリーサ。何度も言うけど、隠れて泣いてる小さな子を見て見ぬ振りするってのは、人として問題だろ？」

「ではワタクシも同じ言葉を返しますわ。あの時あの場にいたのは、他でもないラツだったのです。ワタクシの運命の恋人はラツ以外ありえせんッ！」

お湿りの後のような変哲ない砂色の瞳、樹皮のような濃い茶の髪。頼りなくて優柔不断で時に頑なでも、イリーサはそんな素朴感溢れるラツが大好きだった。

恋をするのに、年齢や年の差なんて関係ない。

これからも押して押して押し捲り続ければ、ラツだって絶対に振り向いて下さるに違いないッ！

イリーサは頭からそう信じ込んでいた。

誰からであれ、好かれるのは嬉しいし、嫌われるのは辛くて寂しいものだ。

そりゃ、誰かといるのは決断していい事ばかりじゃない。

悪い事もあって、しかもそーゆーのは結構記憶に残ったりする。たまにラツでさえ、あゝ一人になりたいと思うくらいだ。

でも、それはずっとの話じゃない。

ラツがイリーサくらの頃、一人ぼちは半日も経たないうちに却下だった。

もちろんイリーサの周囲に誰もいなかったわけではないだろうが、精神的にはそうだったに違いない。

怒りも悲しみも自分の中で回し続けるしかなくて。

楽しさや嬉しさを一緒に感じたり、伝えたりも出来ない。

精神的に寂しさを覚えるだけで、なぜだか心身は参ってしまう。

偶然出会ったあの日、イリーサはそんな状態だったのだ。

だから孤独から救ってくれたと勘違いしている以上、イリーサのラツに対する懐き具合は強い。

けれど、九才の少女に手を出す事は犯罪だ。

例え今から捕まえておけば、後々儲けもんになるとしても、犯罪者になるのはごめんだとラツは思うし、ロリコンにはなりたくないかった。

それに……いつかイリーサは誰かを見つけて、きちんと選ぶはず。自分は身近な異性ではあるが、決して恋愛対象にはならない、お兄さんのようなものだとなラツは思っていた。

再会

イリーサもいるから、のんびり休み休み。
お昼頃には作ってもらったお弁当を食べ、またぼちぼち歩き始めて。

転んだり滑ったりといったハプニングもなく、登山はそこそこ順調だった。

……けれど、ラツの前を歩いていたイリーサが不意に立ち止まって、ぐるりと周囲を見回し始める。

そんな様子に、嫌いな予感を覚えたラツは恐る恐る彼女の名前を呼んだ。

「……イリーサ？」

「何か、妙ですわ」

「え……」

もちろんラツには何も感じ取れない。

「ワタクシ達に対する敵意を感じます。しかもそれがどんどん増えていっているのです……ああ、またですわ」

イリーサが普段ラツに見せている少女の顔ではなく、巫女姫としての神々しい雰囲気身を纏った。

敵意？

ラツはゴクツと唾を飲み込む。

「……まさか、魔物？」

「ええ、たぶん」

「結果はどうなってるんだ？ 僕に退魔能力がないのは知ってるだろ、イリーサ。大人しく引き返して、応援を要請した方がいいんじゃない……？」

しかしイリーサが頷くより早く、一斉に魔物が現れた……しかも逃すまいと取り囲むように。

魔物が自分達とは決して相容れない存在だというのは、直にすれ

ば肌で感じられる。

感じさせられると、神官学校でラツはそう習った。

こうして實際目にして……思わず震えを走らせ、一気に鳥肌を立たせる恐ろしい形相は元からこうなのかも知れないが、イリーサの言葉通り、目には間違いなく自分達に対する敵意の色。

頭部や手足を奇怪に蠢かし、ネチヨヌチヨと粘着っぽい。

それがまた気色悪さを増大させる。

そんな魔物の群がイリーサとラツに狙いを定め、ズイツと近付いて来ようとした瞬間、バチバチツとスパークした。

いつの間にやらイリーサが、周囲に守護の結界を張り巡らしていたらしい。

けれど、イリーサの表情に余裕はない。

こうして魔物を弾けるのも、長くは続けられないという事だ。

それなのに魔物は次から次へと現れている。

神霊山がこの調子だと、街は一体どうなっているか……最悪の状況がラツの脳裏を過ぎった。

「イリーサッ！ このままじゃ、共倒れだッツ。何とかして、自分だけでも助かる方法を……」

叩く、蹴る、頭突き、体当たり。

武術や魔術を使う魔物はいないらしいが、四方八方から攻撃を食らい、見る見るうちに守護の結界の範囲が狭まっていく。

「そんなの絶対に嫌ですわ……ああ、結界がッ！」

イリーサの悲痛な声と同時に、ラツは光のベールが霧散するのを見たような気がした。

守護の結界の効力が尽きたのだ。

しかし魔物の群は一斉に襲い掛かるような真似はせず、まるでこちらの恐怖心を煽るかのように、ジリジリとにじり寄って来る。

逃げられない、殺される……正直、ラツは死を覚悟した。

同じ事を考えたのだらう、気丈なイリーサがギュウッとラツにしがみ付き、必死な様子で頼み込んで来る。

「お願いですから、ラツ。どうか最期にワタクシを好きだと仰って下さい。結婚しようって……」

「……イリーサ」

こんな時に何を言ってるんだと、ラツは戸惑った。

だがイリーサにしてみれば、こんな時だからこそなのかも知れないと思い直す。

そしてイリーサの望み通りに口を開こうとした瞬間、魔物の群は忽然と姿を消し、変わりに男が一人立っていた。

「よう、ラツ。俺の事を忘れて、巫女姫イリーサと楽しくハイキングだなんていいねえ。……騙されんなよ、巫女姫とまで呼ばれてるガキが、こんなに弱つちいはずねえだろ？」

「……あ、あなたはツツ」

ちつとも痛んでいままんな黒髪と赤銅色の瞳をした自信たっぷりな、その容貌と声。

「サンフォ……」

「サンフォ神官ツツ。いいえ……神殿から出たと聞きましたもの、もう神官ではありませんわね。そのあなたが一体こんな所で、何をなさってますのツ？ 神官の力を乱用し、ワタクシ達の公務を妨害した罪で、拘束ものですわよツツ」

「そのドサクサに紛れて、ラツに結婚を迫つといてよく言う。そう何でもかんでもが自分の思い通りに進むと思うなよ、巫女姫イリーサ」

「あなたのおかげで、ちつとも進んでいませんわよッ！ とにかくあなたは邪魔なんですのツツ」

「そりゃー、良かった。かの巫女姫にそう思わせる事が出来たなんて、狂喜乱舞もんだ」

イリーサとサンフォの間で火花が散って散って散り捲る、激しい睨み合いが続く。

相性がよっぽど悪いのか、なぜかこの二人は神官学校時代から顔を合わせるたびに、ラツを間に挟んで喧々囂々になるのだ。

魔物の群が急に消え去り、更に学校を卒業して以来のサンフォの登場に、驚きのあまりラツは声を出せない。

言い争う二人を、ただ呆然と見ていた。

「全く信じられませんかッ！ さっきの魔物はあの人の術ですよッ」

「????」

「授業でさあ、魔物の幻を見せられたのを覚えてるか？ 数の差はあるけど、それと同じだって事。なかなかの出来だっただろ、ラツ？」

そこで一旦言葉を切って、サンフォは瞬時に鋭く目を光らせる。

「でも……さっきのが本物の魔物で、お前一人だったら、とつくに食われてたぜ？ 力が欲しいだろ、ラツ？」

「そりゃあ欲しいけど……????」

それは密かにあり続けているラツの望みだ。
「だけど……」

「なら早く山頂へ来い。いい物をやる」

「いい物……って、サンフォ？」

言うだけ言って、姿を消してしまったサンフォにラツは啞然となる。

しばらく彼が立っていた場所を凝視し、そしてようやくラツは口を開いた。

「……。まさか、さっきのサンフォも幻だったのか？」

「その通りですわッ！」

「いつからさっきの魔物の群が幻だって気付いてたんだ、イリーサ？」

確かにイリーサは一度も魔物だとは断言していない。

しかも術で創り出したのはサンフォだという。

怖がっていた自分が馬鹿みたいだと、ラツは腹が立って仕方なかった。

もう知るかッてな具合で、その場から立ち去らなかったのは、日

頃の忍耐の賜物。

そしてイリーサがラツを笑い者にする為に、お芝居をしていたわけじゃないと、信じていたからである。

案の定イリーサは怒ってますかしらあ怒ってますわよねえ……という感じで、ちよつと窺い気味にラツの表情を覗き込み、しゅんつと頂垂れて愁傷な態度を取る。

「ごめんなさい、ラツ。本当は幻が現れた時から、敵意だけで害意や殺意が向けられていない事に気が付いてはいたのです。けれど危険を乗り切った男女の間には、恋が芽生えると聞いて……。ですから、ワタクシ……つい」

「……」

も、誰だ。

イリーサに妙な事を吹き込んだのは？

ラツはヤレヤレ仕方ないなと、ため息を吐いた。

「頼むから、二度としないでくれよ？」

「お約束しますわッ」

途端に笑顔を取り戻したイリーサに、ラツは一抹の不安を覚えるが、それよりも今は……。

「それにしても、サンフォの奴……」

「ご心配なさらなくても大丈夫ですわよ、ラツ。神殿の敵に回るというなら、むしろ好都合ですわ。ワタクシが見事討ち果たしてご覧に入れますッ！ さあ、早く頂上へ参りましょうッ」

「コラコラ、そんな事は一言も言ってなかったぞ」

やけに嬉しそうなイリーサを窘め、ラツは学生だったあの日、屋根でのサンフォとの会話を思い返した。

サンフォの言っていた通り、魔物は人間に必要なのだろうか？

確かに魔物が現れた時、それを倒す事が出来る日まで、一人よりも二人、二人よりも三人……神殿という組織や国全体でそれに対応し、解決しようとする。

その時ばかりは、例えば日頃の悪い相手とだろうが手を結べる。

でも、何もそれは魔物相手に限った事ではないはずだ……とラツは思う。

困難にぶち当たった時は協力すればいいって事を、人間はちゃんと知っているのだから、敵対する存在なんて別にいなくても構わないに違いない。

結界の補強に來ただけだというのに、神靈山の山頂には一体何があるのだろうか？

そして中央神殿から行方知れずになった、サンフォがどうしてこんな所にいるのかをラツは考え始めてしまう。

余りに考え過ぎて、終いにはイリーサの相手をお座なりにしてしまい、スツカリむくれさせてしまったくらい、ラツは懸命に頭を捻り続けた。

そしてますますムキになったイリーサが、一気に歩く速度を速め、先へ先へと山道を登って行ってしまい、ラツは慌ててその後を追う羽目になった。

出会い

登り切った山頂は、意外なほどぽっかりと開けていた。

麓からでは分からなかったのだが、木が一本も……それどころか下草さえ生えていない。

それなのに、誰が見ても決してただの広場には見えないだろう。なぜなら結界の修復に使ったと思われる術具が、ちくしょうこれでもかッという具合に、散らばり重ねられているからである。

色とりどりの術具の形は様々で、石そのものだったり、石という材質に限らず彫り物を施してあったり、一見装飾品のようなものである。

中には風雨に晒されて、原形を保っていないものもあった。

ここが神霊山の頂上。

エイラルを守護している力の源。

何かを感じ取れるわけでもないのに、何となくラツは畏敬の念を覚えてしまった。

巫女姫であるイリーサなら、更に感じているだろうと見れば、躊躇することなく術具の上を進んでいる。

「え、いいのか……っ？」

ラツは戸惑い、声を掛けた。

「ここにある術具は見事なくらい力を使い果たしていますもの。また力を込め直さない限り、いきなり爆発するかもだなんて心配、なさなくても大丈夫ですわよ」

更に、本当に山頂で待っていたサンフォオまでが、ラツに声を張り上げる。

「早くここまで来いよ、ラツ！ 大声で話すのも何だからなッ！」

こんな風に言われてしまえば仕方ない。

ラツは意を決し、けれど恐る恐る術具の上を通って、サンフォオに近付いた。

「ようやく来たな。さーてと……おい、いつまでも術具の中に隠れて嫌がる気なら、強制的に従えてやってもいいんだぞッ」

「えッ？ うわ……ッ！」

サンフォが屈んで手を伸ばし、術具の一つを摘み上げようとした瞬間。

「触るなッ、オレに触んなよッ」

「……サンフォ、それ？」

「やっぱ力のないラツでも見えるんだな」

「また力を込めに来やがったんだなッ？ そのままオレに全部押し付けて、あいつらの相手をさせる気だろッ？ あいつらを追い払う為の術に利用されるのは、もうウンザリだッ！」

オレと言うからには、男なのだろう。

イリーサよりも幼い印象を受ける、拒絶の声が辺りに響いた。

金、銀、赤、橙、黄、群青、茶、黒。

それらの色がグジャグジャに混ざり合い、揺れ動くものが、音もなくぬるぬると浮かび上がり、サンフォに体当たりをかまし始めた。けれど触れられないらしい。

ラツの背丈の半分よりも低く、頭や手足らしきものはあるのだが、人間の姿はしていない。

そして足元には、卵型で艶のある、瑠璃色をした拳大の石が転がっていた。

とはいえ……サンフォは従えると言っていたが、別に魔物というわけでもなさそうだ。

驚きはしたものの、ラツの肌に鳥肌は立っていない。

側にいたイリーサまでが首を傾げる。

「何ですの、これは？」

「俺も始めて見るものだから断言は出来ないが、術具に宿った自我だろうな。神霊山の結界を解いて、出て来た魔物を従えるには、今よりもっと強い力が必要だ。そこでその力を得る為に、術具に蓄積されてた力を集めたら……こうなった」

「……」

イリーサが頂上に転がっている数々の術具から、綺麗サツパリ力を感じ取れなかったのは、サンフォのせいだったのである。

イリーサとラツは絶句して、サンフォを見た。

「あくまでも術具だから、この自我の意思に関係なく力は引つ張り出せつけど。こいつの扱いはお前に任せる。いつものように手懐けてくれよ」

サンフォはヒョイツと瑠璃色の石を拾い上げ、ラツに投げ渡した。投げ渡された石は、見た目よりもずっしりと重たかった。

「割れたらどうするんだ、馬鹿ッ！ だいたい無責任だぞッ！ つまりサンフォが生みの親って事だろうがッ……。そうじゃなくて、神霊山の結界を解くって、何でッ？」

サンフォは神殿の敵……登っている途中で、イリーサが出鱈目に言った言葉が本当になるのか？

ラツが問い掛けると、サンフォは状況を面白がるような表情を浮かべた。

「登って来たのが、その巫女姫だけなら遠慮なくやってたけど予定が狂った。……なあ、ラツ。前に俺が屋根の上で言った事、覚えているか？」

「覚えてるよ。今だって、それを考えながら来た」

「ふ〜ん。じゃあ巫女姫なんかにかまけてないで、もうちょっと考えてろ。じゃーな、ラツ」

「おい、コラ……って、また消えやがって、チクショ〜ッ！」

ラツはサンフォが先程まで立っていた場所に叫ぶ。

サンフォが既に居ないのは分かっていたが気分が収まらず、更にラツが叫び続けようとすると。

「オレは好きで結界を張ってたんじゃないッ！ 気付けばそうなってたんだッ。だからもう……あっち行け、こっち来んな〜ッ！」

サンフォから受け取った石の自我が、ラツに体当たりをかまして来た。

ラツを限定にしていけないのだろうか、言われているのは自分である。

ラツはサンフォオに対する文句をぐっと飲み込んだ。
更にイリーサがため息を突いて、ラツをじっと見上げて来る。

その表情はサンフォオに対して、好戦的な感じを残しており、そして眼差しは、一緒に石の自我を何とかしましようというものではなかった。

「実際結界の修復で、力を込めに来たワタクシが何を言っても逆効果でしょうし、ここはラツにお任せしますわ」

「いつ、イリーサまでッ！」

術具の自我の扱いなんて知らないぞ。

助けて欲しいと見つめ返したが、イリーサはさっさと神霊山の結界の張り直しに向かってしまい、ラツはスツカリ途方に暮れた。

自分はこうしてこうなんだろう？

こんな自分じゃなくて、もっと別の自分があったはずなのに……。しかしいつまでも、ばやいていたって仕方がない。

ラツはしゃがみ込んで、そうっと石を地面に戻し、生まれたばかりの自我と向き合った。

「えゝ、僕は退魔能力ゼロだし、強引に力を込めたりも出来ないから、そんなに警戒しなくてもいいので……。えゝと？」

言葉に迷いながら、かなり引き攣った笑みをラツは浮かべ、
「とりあえず……。始めまして、どうぞよろしく」

自我の何となく手らしき部分を握る。

握ったという感触は全くないのだが、それでもまずは形からだ。
そしてセオリー通りに自己紹介へと続く。

「僕はラツっていう。お前……。いや、えゝと君は？ 名前、あるんだろ？」

一応、頭に目鼻らしき個所もあるのだが、そこも絶えずゆらゆらと動いているので……。ちよつと怖い。

予想通りというか、それとも先程怒り過ぎて少々お疲れ気味なの

か、自我からはなかなか返事が返って来なかった。

「僕じゃ話にならないかな？ 術者相手の方が話しやすいとか？」

男みただし、やっぱり女の子に話し掛けられた方が嬉しいはず。手懐けるだなんて、とても出来そうにない役割から、罷免してくれるといいな」という願望を九割ぐらい内に込めつつ、ラツは尋ねた。

「話す気なんかないッ。言いたい事は全部言ったッ！」

「……う、うゝん」

確かにそうかも……それを聞いて、ラツは妙に納得してしまう。

だが、せっかく口を開いてくれたわけだからと、ラツはふと頭に浮かんだ疑問を自我に投げ掛けた。

「あのさ、君はサンフォが集めた力から生まれたんだろ？ その力が尽きた時、どうなるんだ？」

「力なんて早く尽きた方がいいッ。ずっと利用され続けるくらいなら、サツサと消えちゃえる方がいいッ！」

「……」

もしかしなくても自分の対応に、この自我の生き死にが掛かってる……？

これはえらい事だと、ラツは空気が肩へと一気にのし掛かって来るのを感じた。

あれ、でもちよつと待てよ？

その上ラツは、自分だったら絶対にお断りだっという考えに、辿り着いてしまった。

「つまり次に結界を修復する奴が来るまで、ずっと一人ぼっち？ 嫌でも結界を張り続けて……力が尽きるまで、その繰り返し？ それって良くないぞ。メチャメチャ悪いぞ」

気が強いはずのイリーサでさえ参ってしまった孤独。

しかも、ここ神霊山の頂上では誰の気配もしないのだ。

こんな所で一人ぼっちだなんて、一体どんな状態に陥ってしまうのか……考えるだけでも身震いものである。

「そんなの、こっちの勝手だろッ！ 放つとけよッ！」

「そうは言っけどなッ。あゝうゝ、……じゃあッ！ とにかくだ、麓まで遊びに来ればいい。日中なら、大抵神殿の売店に僕はいるし。ただの遊びだ遊び、……なッ？」

「……」

「遊びについて言葉が嫌なら、よくも扱き使ってくれた……じゃなく
て現在進行形だから、くれてるなッ！ て、今までと、これからの
文句をぶちまけに来るだけでもいいから。少しは気が晴れるぞ、…
…たぶん」

散々並べ立て、でも……さすがに絶対こうだッとは確約出来ない
ので、ラツは語尾を濁した。

「とにかく抗議だよ、抗議。それならいいだろ？」

「……。……だけど、オレがここから離れたら結界はどうなるんだ
？ 平気なのか？」

「……へ？」

「利用されるのはウンザリなんだぞッ、ウンザリなんだからなッ！
ただ、あいつらに近寄られるとゾワゾワするから、嫌なんだッ！
だから結界がなくなつて、あいつらに大量発生でもされたら……
それが嫌なだけッッ」

「……そ、そっか」

結局は責任感が強いんだな、こいつ。

生まれたばかりなのに、自分から貧乏くじを引いている。

それを聞いて、ラツは内心ニヤツとしてしまった。

自分達が言い争っている間にでも、この自我は神霊山から離れよ
うと思えば、とづくに可能だったのかも知れない。

ただ動こうにも動けなかったのだ。

いつの間にやら押し付けられた仕事に心配で、ただ一人きり留ま
る覚悟をしていたに違いない。

「よし、分かったッ！ お前、一回結界の仕事を全部どつかに投
げちまえ。本体っていうのか？ 術具ごと麓へ行こう。何たって、

イリーサがいる。結界も張り直せるし、平気だつて」

だが自我は逆に弱々しく、狼狽を隠せないように返して来る。

「オレ。結界の術具じゃなくなったら、他に何をすればいいんだ……」

……」

誰かに必要とされたい。

どこかに属していたい。

自由を望み求めるのとは裏腹に、社会の一員としての自分を欲する。

世のしがらみに縛られていないと、落ち着かない。

嫌々ながらであつても、そんな状況が全くなつてしまつたら、まるで地面を失つてしまつたような不安な気持ちになる。

自分は無用の存在なのか？

一回その考えに囚われて、ズンツと落ち込んだら、もうトコトン沈んでしまう。

あゝ、共感。

ラツはうんうんと頷いた。

「お前も何かやってないと、ソワソワするタイプか」。実は僕もなんだよなあ。だからその気持ちはよく分かる。でも僕は夜になれば、ぐぐすか寝れるし。

その点、お前はここにいと、これからずっと働き詰になつちやうわけだろ？ 自我がない時から、結界の一端になつてたんだろうし、一度くらい休憩してもいいんじゃないか？」

「……」

迷っているのか、それとも拒絶が勝っているのか、自我は何も答えない。

表情さえ変わらない。

一応聞いてはいるはず……無理強いするのも何だと思つのだが、

ラツは更に続けた。

「一度は投げ出してみればいいと僕は思う。何なら、仕事として魔物に関わるのは止めてもいいと思うし。それにだ。こんな事を気安

く僕が言うのは、本来駄目なんだろうけど……もし短命になるとしても、心の底から本望だと思うなら力を込められる誰かなんて、探さなくてもいいんじゃないかって気がする」

飲めば絶対に命が助かる薬をわざわざ拒否して、そのまま死を選ぶという事と同じ意味だけれど……。

「どうだ？　一緒に行かないか？」

もしこれで折れてくれなければ、今回の説得は諦めよう。

その代わり暇を見つけては、自分が許可をもらって神霊山まで登ってくればいいとラツは考えた。

だが、意を決したように自我は顔を向けて来る。

「オレ、ティズだ……。……名前、もう一回教えてくれ」

「じゃあ決まりな、ティズ！　僕はラツ。もしやっぱり結界張ってる方がいいやつて決めたら、絶対にまた山を登って、ティズの本体をここに戻すから。これだけは約束する」

ようやく自我に名前を教えてもらう事が出来、ラツはもう一度握手をしようとティズに手を伸ばした。

「エイラジャールの名に掛けて、オレの本体をラツに預ける」

「大袈裟だな……あれ、ティズ？」

柔らかい小さな手のぬくもり……。その瞬間に術具は消え、もやもやから人の姿へと変化したティズは、五・六才の少年の姿を取っていた。

もし明かさなければ、誰もティズの正体が術具だとは考えないに違いない。

しかも瞳こそ瑠璃色であるものの、髪の毛はラツと同じ濃い茶色。オマケにこの顔立ちは……。

ラツは自分の小さい頃の顔なんて全く覚えていないが、たぶんこんな感じだっただろう。

「ラツ！　オレの主人として、よろしくなッ！」

「何だつてえゝゝッ？」

「何ですってッツ？」

ラツの声に、駆け戻って来たイリーサの声が重なる。

「何か問題あんのかよ？」

「あるッ！ あるぞ、ティズッ！ 利用されるのは嫌だって言うたのに、よりによってどうして僕ッ？ 本当に何の力もないんだぞッ？ つまりは早死に決定なんだぞッ？」

「だって……オレ、ラツが気に入ったから」

「……気に入ったってな」

だから何でティズまでが、怒らないで怒らないでオーラを会得済みなんだ？

もちろんラツは、年下からの怒らないで攻撃に弱い。

まるでそれを知っているかのような、ティズの態度だ。

「冗談ではありませんわッ！ 早く契約を解消しなさいッッ」

「お前、ラツの何なんだよッ？ お前なんか、どうして口出しされなきゃならねーんだ？」

なぜかイリーサとティズの言い争いが始まって、サンフォはここにいないが、新たな火種が増えたのをラツは感じずにはいられなかった。

波風のない人生がラツの望み。

でも大なり小なり、事象は起こるもので……。

だいたいティズに対して、具体的に何をすればいいのかなんて見当も付かない。

でもまあ。

いつかはティズも何かを見つけて、選び直すだろう。

どうせ主人なんていうのも、形だけだ。

ティズが決断して、お役御免になるその日まで。

懐いてくれている間は、こちらから拒絶するような真似はしない方がいい。

「お偉方にどう説明すればいいんだかな？」

どちらにせよ性的に、ティズの事が気になって仕方ないに違いないのだから……そうラツは思い直して苦笑を浮かべた。

ともあれ、ティズとラツが無造作に置かれっ放しの術具を、何とか整頓しようと四苦八苦している間に、イリーサは結界の修復を無事に終えた。

そして三人でワイワイ神霊山を下って、神殿へと戻った。

イリーサの証言がなければ、到底信じてもらえなかっただろうティズの一件は、しばらく神殿内を騒がせた。

伝承部でもザツと調べてはみたが、複数の神官達が作った術具に残った力を、合わせて一つにするという前例は出て来ない。

前代未聞だという報告が上がってから余計にだった。

渦中、ティズは何人も力あるカミツシユの神官と引き合わされたが、結局誰の力も受け入れようとはせず、主人を選び直そうとしなかった。

ティズに何か吹き込んでいるのではと、ラツは疑われもした。

けれど多くの神官は、巫女姫であるイリーサでも駄目だったのだからと、自分を慰めたようだ。

なので直接話は来なかったが、ラツを営業部から退魔術部へ転部させてはどうかという話も実はあったのだが……流れた。

ティズがラツを守る為に魔物を倒すのはいいが、それで力を使い果たし、自我が消えてしまったら元も子もないという理由からだっ

た。そうしてラツは一見子連れ状態で、売店の仕事をこなす事になった。

ラツの同僚は神官としての力がほとんどか、全くない者達だったので、やがてティズをそこら辺の子供扱いし始めた。

それが全体に広がり、

「へー、アレが……」

と、ティズを指差す者はいつしかいなくなった。

周りの熱狂が落ち着き、始終べったり引っ付いていなくても、ラツと引き剥がされたりしないと感じ取ったティズは、少しずつ行動範囲を広げていき、聞きたがりな子供になっていった。

問い

売店の仕事を終え、夕食を食べたり、神殿内にも引かれている温泉に入ったり、就寝までの間、ティズから一日の出来話を聞くのを、ラツが新しい日課にするようになってから一ヶ月と少し。

今日の天気、様々な事柄に関する噂、神殿の某部署の誰々、神殿に訪れた人々……ティズの話は多岐にわたる。

ラツも楽しめたり、面白く感じたり、興味を持ってしまう話がいっつも続いた。

ティズはラツに外見だけでなく中身も似たのか、それとも術具としての性質なのか、初対面の人でも話しやすいらしい。

もしかすると相手は子供だからとか。

どうせ何も分からないに違いないと安心して。

つい口を滑らしてしまったのかも知れないが、子供にそんな話を話すなよなと、眉を顰めてしまうような内容まである。

例えば悪し様に誰かを、時には自分を罵ったり、夢も希望もない恨み辛み等々。

心の中のどこもかしこもが、キラキラ輝いてますなんて人はいないだろうけど、今日のティズは、どうやらよろしくない内容を耳に入れてしまったらしい。

いっつもならラツの方から尋ねなくても、色々と喋り出すティズが妙に押し黙っている。

「……ティズ、今日はどんな人に会ったんだ？」

本当はもっと上手い聞き出し方があるんだろうけど、と思いながらラツはティズに尋ねた。

もしかすると、ラツに対する悪口でも仕入れてしまったのだろうか？

ティズはラツから微妙に視線を逸らせる。

……が、やがてモゴモゴと、いつもの数割減の声が返って来た。

「ウティと……、あとミーシア」

「そういや、午前中にウティからの魔除けの納品があつたなあ。それにしても、ミーシアって？ あんまり聞かない地名だけど、カミツシュから近いのか？」

「こつから山脈沿いを西に行つた小さな村だつて……。……なあ、ラツ。ラツもホントは馬鹿男やムカツク女を妬んでんのか？」

ちなみに馬鹿男とはサンフォ。

ムカツク女とはイリーサの事である。

それにしても妬むだなんて、また随分と難しい言葉を覚えたもんだと、ラツは問い返した。

「ね、妬む……？」

「だって、二人には力がある。でもラツにはない。不公平でズルイつて。エイラジャールは差別してるつて。魔物を倒せる力さえなきや、神殿なんかどうでもいいに決まつてるのにつて……」

「あゝ、それはだな」

誰でもいいから、ティズの心に黒い染みを残さないように、この深刻な話題を終わりにしてくれないだろうか？

ラツは天を仰いで見るが、部屋には生憎と自分達二人しかいない。ここは保護者として、しっかり答えなければと腹をくくる。

「ティズ……正直に言つと、僕もそう思つた事がある。神官だからこそ、どうして僕には力がないんだらうつて悩んだ。でも退魔は下手したら命に関わるくらい大変な仕事だから、今はもう妬んではない。

それからこの世界は魔物が出るから、神は必要だよ。存在を証明しろつて言われても無理なんだけど。漠然としたモノだから、特にここぞつて時は神霊山や神殿へ行つた方が、よくし祈つたゝつて気にもなれるし。困つた時の神頼みつて、言つだろ」

「……」

一応ラツとしては神や神殿の必要性を懸命に話したつもりなのだが、ティズの表情は晴れなかった。

その日からティズは塞ぎ込むようになり、そうかと思えばじつとラツを窺って来る。

その視線を感じて、問い返してもティズは何も答えようとせず、その繰り返しが続いた。

数日後、ラツ自身がミーシアの事件を職場の同僚から聞かされた。しかも事態は悪化しているようだ。

同僚の話によると……。

ミーシアの村長の息子カサズは人望があり、神殿にも祈りを欠かす事はなかった人物だったのだそう。

ところがある日を境にピタツと足が遠退き、段々……そして一気に神殿へ村人が来なくなった。

神官の方から出向いても、村人には相手にされず、食料さえ売ってもらえない。

畑と少々のお金はあったが、それもいつ尽きるかわからない有様。不安に思っていたミーシアの神官に、村を出て行くようにと村人が通告をして来たという。

断ると、ミーシアの神殿が放火され、崩れ落ちる光景を見せられたらしい。

極論になるが、神殿は人々の神への信仰があるからやっていける。

魔物に対抗する為の神や神殿の信仰心と位置付けた場合。

ミーシアのように、一人一人に力を与えなかった神自体が間違っているという考えが国中に広がった場合、神殿は成り立たなくなるだろう。

ミーシアの神官は元々力も弱くて、突然の事で動揺もあったのでカサズを始め村人に魔物が入り込んでいるかどうかの判別が付かなかったらしい。

近いうちに魔物の関与を見極めに、誰かがミーシアへと行く事になる。

けれど魔物が今回のように……食うのではなく、人間を使うなんて話は聞いた事がない。

もし本当に魔物だとしたら、わざわざミーシアの神官を殺さずに逃がしたという事になる。

たぶん他の神殿へ訴えるに違いないと踏んで。

実際に村から追い出されたミーシアの神官は、近隣で一番大きなカミツシュへ泣き付きに来ている。

完璧、神殿全体に喧嘩を売っている行為だ。

そんな物騒な推測が、ミーシアの件を聞き付けた神官らの間で実しやかに囁かれている。

妙に神殿内の雰囲気緊張している事から察するに、この話を聞いた誰もが内心そう思っているに違いない。

「……………オレ、ミーシアに行きたい」

「ティズ……」

ラツは色々な場所から来た人々の話を聞いて、ティズが実際に行ってみたと思うているのを知っていた。

けれどラツには売店の仕事があるからミーシアに行くのも無理だと、あの晩以外ミーシアの話は口に出さず、話を黙って聞くだけだった事にも気付いていた。

そんな風に、ずっと我慢していたティズが切り出したのだ。

ただどラツは妙な具合になっているミーシアに、ティズを一人で行かせたくなかった。

「じゃあミーシアに行きたいと希望を出しに行こう」

「え？」

「ティズが希望しているんだ。きっとミーシア行きに同行させてくれるさ」

「うん！」

ミーシアに派遣する神官の選定で忙しくなっているに違いないお

偉方の所へ、ラツはティズと一緒に出向いたのだった。

ミーシア

ミーシアは日当たりの良い、南向きの斜面にこじんまりと出来た村……集落だった。

カミツシュに比べると、断然狭い土地だが居心地よさそうな家々が不規則にならんでいる。

牧草と家畜の匂い。

時間がのどかにゆったりと流れているようなイメージを持ってしまっ、土地だった。

「「こんにちは、おじさん」」

「おう、初めて見る顔だねえ。どこから来たんだい？」
まずイリーサとティズが話し掛け、ラツが話を続ける。

「こんにちは。はじめまして。僕は学者の卵でして、土地土地に伝わる昔話を集めて回っているんです」

「ほおう、そうかねえ」

「この子達は、旅の間中、ずっと預かってもらえる心当たりがないもので、一緒に連れて歩いてます」

「なるほどねえ」

「もし、お時間ありましたら、昔話をしてもらえないでしょうか？
僕に話し辛ければ、この子達に向かってする感じで」

「おう。いいよお。何から話そうかあ」

うん、いい感じた。

子供に対しての方が話しやすいだろうから、イリーサとティズと一緒に連れているという設定を信じてくれたみたいだった。

やっている事は見聞課と同じなのだが、神官だなんて絶対に言えない。

だけど、特に異常は感じないよなあ〜この人も。
しかも、話が上手い。

山で迷い、木の精霊に助けられた木こりの話。

願い続けて湧き出した水の話。

おつちよこちよいな鳥の話。

それから、昼と夜の神の話。

イリーサがそれは上手に笑顔でせがむので……もしかすると、その村人は即興で捻り出したのかも知れないが、様々な話を語ってくれた。

いきなり石を投げられる事もなければ、余所者に酷く警戒している様子もない。

ミーシアへ来るまでに会った、村人達の雰囲気と何も変わらな

い。

相手が魔物なら、条件反射で鳥肌が立つはずなのに……。

知らず知らずのうちに、ラツは本気でふんふんと相槌を打ち、話にのめり込んでしまっていた。

その時、ティズが立ち上がると、タタツとどこかへ向かった。

「あゝつ、と……す、済みませんッ」

「いやいや、聞き疲れたのだらうよ。お茶も冷めてしまったし。今入れ直すから、一時休憩としようじゃないか」

「ありがとうございます。とりあえず、連れ戻して来ます」

皆でティズを追い掛けるのも変なので、イリーサには残ってもらい、ラツだけがその場を離れた。

慌てて追い掛けたけれど、やっと捕まえられたのはティズが立ち止まってからだった。

目の前には神殿が焼け落ちた跡と思しき、黒く焦げた土が広がっている。

やっぱり神殿の事が気になるんだなあと、何かを堪えるように口をへの字に曲げているティズの表情に、ラツは改めて思った。

だが、ここにずっと立っていたら怪しまれてしまうだけだ。

話をしてくれているおじさんの元に戻ろうと、ラツがティズの手を取ろうとした時……。

「昔々。力ある者はない者を従えようとした。力ない者は武器を持

つて、何とかそれに抵抗しようとしたが敵わず、力ある者の奴隷にされていった。そして力ない者が虐げられる悲しみに打ちひしがれた時、救いの使者がやって来て力を与えてくれた」

「……ッ？」

いきなり始まった昔話に驚いたラツが振り向くと、一人の男性がこちらに近寄って来ている。

「その使者とは、今という魔物の事だ」

もう数歩大きく踏み出せば自分達に手の届く距離で立ち止まり、その男性は更に続けて来る。

「救いの使者達の協力で、力ない者は力ある者に勝利した。その戦いから何百何千年……力ない者の側に付いた力ある者との混血が進み、昔の戦いが忘れ去られ、いつの間にやら力ある者が神殿という名を借りて金品を強要し、再び自らの力を誇示している」

男性が語る昔話は、あまりに神殿における常識とかけ離れている。さすがにマズイとラツは反論する事にした。

「魔物は人を食べるんです。だから神官は……」

「それは神殿が流しているデマだ。そのせいで人々は救いの使者に恐怖や敵意を持ってしまったのだ。そんな感情を向けられては、悪い気分になるもの道理というもの。」

確かに我々人間の倫理からみれば行き過ぎだが……彼らにしてみれば、食べる事でそんな相手を完全に見えなくしているだけの事。かつて協力し合った仲間として好意を示せば、彼らとは仲良くやっていけるというのに」

男性は間違いを優しく正す教師のように、諭すような笑顔を浮かべた。

別にラツは優しくされればされるほど、裏があるんじゃないかと疑いたくなる性格ではない。

話の内容は突飛すぎるが、辻褄は合っていた。

それなのに……鳥肌は立たないが、なぜだかティズを連れて逃げ出したくて仕方ない。

「救いの使者は困った時には必ず手を差し伸べてくれるが、エイラジャールは違う。伝説通り本当にいたとしても、この陸海空が保たれていれば、それ以外の事はどうでもいいに違いない。……そうは思わないか、カミツシユの神官？」

「うわあ、ばれている……」

何を勘違いしているのか知りませんが、自分はただの学者の卵ですなんて嘘は通じそうにない。

もしかすると、ミーシアに入った時からバレていたのだろうか？

三人が別行動するのをずっと待っていた……？

でも……もし、男性の話が本当なら？

話を聞き、対応を変える事で、これから魔物の恐怖を味合わなくて済むのならば、目の前の男性の話を聞くべきだ。

ラツは逃げ出したいのを堪え、その場に踏ん張り続けた。

「僕はラツと言います。それとテイズです。お察しの通り、カミツシユ地方神殿の伝承部営業課の者で、神官とは名ばかりで力はありません。」

直接魔物……いえ、救いの使者と戦った事はないし、特別に恨みも持っていないのでこう言えるのでしょうか……正直エイラジャールに関しては、あなたの言う通りかも知れない。

どうせ何もしてくれないなら、どの神を信仰しようが自由だと思います。あなたは今、救いの使者と協力している状態なんですか？」

「そうだ。だが、異質感も何も感じまい？ 心というのは複雑だけれど表に出せるのはほんの一部。そして大抵その出した一部分しか、他者は感じ取る事が出来ないものだ。それと同じように上手く調節すれば、人と救いの使者は一つの体で共存する事も出来る」

「へえ」。……あ、済みません。ジロジロ見てしまっただけ」

「いや、構わない。どうやら少しは理解してもらえたようだな？」

私の名はカサズ、ミーシアの村長の息子だ」

ラツがたぶんそうだろうなあと思っていた名前を、男性は名乗った。

「……それより力がないというのは嘘だろう。私の中の救いの使者が、その子供共々何か妙だと盛んに訴えているぞ」

「え……？」

そうラツが尋ね返した瞬間、信じられない事が起きた。

こちらを指差していたカサズの手の甲から、新たに爪の長く鋭い骨のような指がもう一本、グジュツと突き出て来たのだ。

激痛のあまり、カサズは悲鳴を上げてのた打ち回っているのに、新たに突き出た指のある腕だけが、狙いを定めているかのごとく、ティズの方へと向けられている。

新たな指が出て来た途端にラツは、湧き上がった拭えない異質感と鳥肌を、呆然としつつも恐怖と共に感じた。

先程語っていた昔話は、ただの作り話だったという事だ。

しかも、魔物が食べずに人を使っている。

これは急いで神殿に知らせないと……。

「ティズ！ 逃げるぞ！」

「うん！ ラツ！」

とにもかくにも逃げるッ！

そう思っただけで走り出そうとしたが、ラツは断念せざるを得なかった。数こそ少ないが、サンフォが作った大量の幻のように、カサズと同様、体を魔物に乗っ取られたらしい村人達が、こちらを囲みながら近づいて来ていたからである。

そしてカサズの悲鳴が急にパツタリ途絶えた。

その一旦静まり返った中、苦悶に歪んだ表情と悲鳴と同じ音程で、カサズを乗っ取った魔物が刺々しくこう言ってくる。

「ああ、分かったぞあ……力だあ。凝縮された力あ。我々を死へ弾き飛ばす、力あッ」

「マジかよ、おい……」

外見は人間だが、でもゾワゾワとした警告が全身を走り抜けている。

後ろに庇ったティズが必死にラツの腕を掴んで来た。

「オレに結界を張れって言ってよ、ラツッ！ 結界だけじゃなくて、こいつらをぶっ潰せって願うだけでもいいからッッ」

使う側の思考、そしてそれを受ける側の捉え方で、善にも悪にもなる力。

今は善悪なんてどうでもいい……力を使えば、その分ティズの寿命が削られてしまう。

まずは時間稼ぎだと、ラツは頷かずに魔物へ尋ねる。

「どッ、どうして急にッ？ 話し合いの精神はッッ？」

「話し合いだとおッ？ ケケケッ、愚か愚かあッッ。力ある神官を我々の側に引き入れえ、神殿を分断させようとしていただけの事よ。力ある者の巢窟、カミツシュ神殿がそうなったと知れ渡ればあ、神殿全体が動揺する。神殿が揺ればあ、国も乱れる。そうすれば我々は溢れ出せるッッ！」

「……」

本当に全部が全部、嘘だったのだ……。

魔物と友好関係を結ぶなんて、ただの理想でしかない。

しかも、魔物を溢れ出させる？

冗談じゃない。

「どッだ、惚れ惚れするような作戦だろう？ 我ながら、イイ考えが浮かんだものだ」

「……。……僕が魔物だったら誉めてたか、行動に出た様子を見て、先を越されたって悔しがってたかも。でもティズに気を取られたせいで、最強の巫女姫を後にしたのが運の尽きだったんじゃないかと」

「何を馬鹿なあッ」

「そこまですわッ！ よくもワタクシのラツを傷物にしようとしてましたわねッッ」

傷物って言い回し、何か違うないか？

そうラツが思ったイリーサの第一声と、魔物の答えはほぼ同時だった。

駆け付けて来たイリーサは余裕綽々笑っている。

「小物ばかりを寄越されて、随分舐められたものですわ。いえ親玉が親玉だから、集まったのも雑魚ばかりって事かしら？」

「まあさか……？」

「そのまさかですわよッ！ ……そういうわけで、サッサとお離れなさいッッ」

イリーサが一喝した途端、全身の力を失ったかのように村人達が地面へと倒れ込む。

その有様に魔物が気を取られているうちに、ラツはティズと一緒に脇へと逃れた。

「全く。ほとんど憑いているのが精一杯の連中ですわ、てんでお粗末。グシャグシャのポイツッにしてしましよう」

村人達の体から弾き出され、イリーサが描いた光の輪の中へと追いついてられた魔物達は、ラツの目にまるで煙のようにしか映らなかった。

そして光の輪がパチンツと消え去ると同時に、その煙までがなかったように失せた。

イリーサの一喝には耐えた魔物達も、巫女姫との力の差を見せ付けられ、自ら村人達の体を抜け出し、我先にシュルリグニユリと風や地中へと引っ込んでいく。

元々カサズを乗っ取った魔物に対し、強い忠誠心を抱いているわけではなかったのだろう。

「待あてッッ」

焦って止めようとする、魔物の声が虚しく響いた。

「さあ、どうなさいます？ 逃げるか、留まるかの二つに一つですわよ。もっとも、後者の場合の結果はもう見えてますけど」

「……くっ」

魔物も命は惜しいようだ。

カサズの体がバタツと倒れるのを見て、その退魔の鮮やかさっぷりに、ラツはイリーサへ思わず賞賛の拍手を送った。

「イリーサ凄いッ！ さすがじゃんッッ」

「あれくらい余裕ですわよ。お怪我はありませんでしたか、ラツ？」
ラツから手放して褒められ、イリーサは大好きな人を守れた自分が誇らしくて、これまでの力を使う事に対する不安を忘れ、退魔の力があつて良かったと初めて心から思えた。

ミーシアの村人達はしばらくして目を覚ました。

イリーサによれば、ただ意識を失っていたただけだそうだ。

今回の主犯の魔物に乗っ取られたカサズも、多少手の引き攣れが残るかも知れないが大丈夫らしい。

けれど念の為、イリーサはミーシア全体を清めておいた。

少し距離を置いた場所から、その様子を見ていたラツの耳に、テイズの小さいけれどムツとした声が入ってくる。

「あれぐらい、オレにだって出来るのに」

「イリーサに任せとけばいいさ。何たって巫女姫なんだから、周りがキラキラ光って退魔の時よりもずっと綺麗で様になってる」

イリーサの能力は退魔術でも、魔物を滅するより、弾いたり押し返したりと、結界や浄化の力の方が本領なのかも知れない。

「でもッ。……やっぱ、いい」

どうも不満そうなのだが、テイズはずっとラツの側から離れようとはしなかった。

なので……。

「読心術が使えれば良かったんだけどな。そうすれば、なかなか口に出しにくいような、テイズの気持ちも分かっただろうし。分かりさえ出来たら、何かこう上手い事が言えたかも知れないのに。……ごめんな？」

「……ッ」

テイズはクイツと顔を背け、かと思うとラツに食って掛かって来た。

「何で、何でラツはそうなんだよッ！ つっけんどんにしてんのはオレの方なのに、何でラツが謝って来るんだよッ」

「ごめん……じゃなくて、え」と？」

「ミーシアの奴らが神殿をいらないうって思ったように、ラツは力なんていらないうって思ってるッ。オレなんか、いらないうって思ってるくせにッ！ 所詮は術具でしかないんだからって、扱い辛いオレなんか放つて置けばいいのにッッ」

「いらないうなんて思ってるやいよ、ティズ」

しゃがみ込み、視線の高さをティズと同じくしてラツはそう言った。

ちょっと分かり辛いけど、もしかするとティズが気にしていたのは神殿の事ではなく、ラツの反応だったのだろうか？

ミーシアの神殿のように、いつか自分も拒絶されてしまうかも知れないという、不安があつたのだろうかと。

けれどティズは首を横に大きく振る。

「今回だって……ラツと一緒に来てくれるって確信があつたから、オレはミーシアに行きたいって言ったんだ。オレがいなきゃ、ラツはミーシアに来る事もなかった。オレさえいなきゃ、魔物と話し合いで済んだかも知れない。オレがラツを厄介事に巻き込んだんだ」

「僕はティズとミーシアに来て良かったと思ってるよ。だって逆を言えば、ティズのお陰で神官の誰かが魔物に憑かれたり、洗脳されずに済んだって事だろ。」

火種は消えたから、神殿が混乱する事もなくなったじゃないか。なるべくなら僕も、カミツシュでよく分からないままオロオロする目には合いたくないしさ」

「だったら、オレを使つてよッ。例えば命が短くなっても、オレが本望ならいいって言つてたじゃないかッ！ オレだって、ラツの役に立ちたいんだ……ッッ」

本当にティズは貧乏くじを引いてしまうタイプだ、自分から苦勞を背負い込もうとしている。

生まれたばかりだというのに、役に立ちたい欲求だけではなく、自己批判まで覚えてしまった。

「ティズ、……ありがとう」

感情を高ぶらせたティズの目には涙がいつぱいに浮かんでいる。言い切ってくれた気持ちが嬉しくて、ラツは一度ぎゅうっとティズを抱き締め、でも……と続けた。

「ごめんな、ティズ。ティズから見れば、僕は嘘を突いたんだ。自分の為にティズの命が削られるなんて嫌なんだよ。わがまま言っただけに、ごめんな、ティズ」

再び謝ったラツに、ティズが下を向く。

「……どうしても、ラツはオレを使ってくれないのか？」

本当はここでキツパリと頷くべきだったのだ。

けれどあまりにも悲しそうで、もし頷いたら、それこそティズが消えてしまいそうで……ラツは首を横に振ってしまった。

「ティズは僕の御守りだよ。本当にいざという時に願いを叶えてくれる御守り。それがいつなのか分からないけど、その時はしっかり頼むな」

「オレ、ラツの御守りなのか……？」

「いくらなんでも、御守りは嫌か……そうだよなあ。もっと格好良く言っと、守護者ってトコか」

ティズがやけにキョトツとしているので、ラツは言い直した。

だが、ティズは大慌てで答えて来る。

「いいッ、御守りがいいッ！ それって、ずっと肌身離さないくらい、オレがラツの側にいてもいいっていう意味だろッッ」

「えっ、あゝと……ハハハ」

まさかそう取るとは……、これでまたティズが主人を選び直すのが遅くなってしまったような気がする。

ラツは失言だゝと後悔した。

でも選び直すとしたら、自分の力を役立てたいと思っているティズの事だ、新たな主人は退魔神官の可能性が高い。

そうなれば、ティズには魔物との戦いが待っているだけだ。

ずっと神霊山で働いていたのだから、もうちょっとくらい休んでいても、罰は当たらないだろう。

喜びを声と表情に溢れさせているティズを見て、ラツは否定するのを止めた。

ティズと仲直りが出来て、ミーシアの一件が解決した夜、瞼を閉じてラツが不安に思うのは、神殿の売店に自分の席はまだあるかという事だ。

約一ヶ月間、休職していた事になってしまふのだから。

無断欠勤ではないので、大丈夫だろうが……もし席がなくなっても、イリーサの威光を頼ってしまえば済む。

そんな、よろしくない考えがラツの頭に浮かんだ。

それは冗談で捨てておくとして、例えば神殿を首にされても、本当にすぐさま仕事を探さないといけない。

なぜならティズはラツに付いて来るだろうから。

いつの間にやら、気分はスッカリ父親のラツだった。

遺跡への旅

カミツシュ地方神殿に帰ってみれば、ラツは営業課をくびになり、見聞課に異動となっていた。

もちろんティズの為である。

旅をしたい欲求が満たされれば、ティズも危険に首を突っ込もうとしないだろうし、旅の最中に真の主人を見出すかも知れないというのが、お偉方の思惑だ。

「いいよな、お前は。強力な後ろ盾があつてさ」

当たり前の事だが、ラツは営業課の人に羨ましい……というよりやっかまれた。

本来なら、営業課の者がラツと同じように仕事以外で休んだら、神殿内での席は完全になくなっていくだろうから。

しかも、お偉方が欲しているティズは、五、六才の子供の外見だが全く手が掛からない。

そして異動先の見聞課でも……。

「主人探しの件は上から聞いているが、物見遊山ではなく、仕事だという事を忘れるな。小まめに神殿に寄って、集めた内容を報告するように」

特に仕事は指定されず、ラツは報告と生存確認だけ求められ、遊び過ぎるなと釘を刺された。

それでもまあとにかく、失業は免れた。

ラツが神官であるのはそのままで。

気軽にエイラル国内を見て回り、宿泊も国内の神殿を利用出来る。お偉方に何と言われようと、期限のない休暇をもらった気分だ。しかし、いざどこでも大丈夫となると、一体どう旅すればいいのかと、ラツはティズと一緒に悩む事になった。

観光スポット巡りに大自然を満喫に……あれこれ見たいという願望はあっても、どれを一番にするかと考えてしまい、そうなる切

りがない。

そこへラツがカミツシュから出て旅に出ると聞き付けたイリーサが、ティズの次は自分の願いを叶えてもらう番だと、地図を片手に自室へと飛び込んで来た。

「……どうしたんだ、この地図？」

見るからに、かなり気合の入った年代物の地図である。

ちよこちよことメモのように何かが書かれているが、擦れていてまるで読めない。

正直、怪しさ満点である。

巫女姫であるイリーサが、いかがわしい裏街の露店を出入りしている姿は想像出来ず、ついラツは不審気に尋ねてしまった。

「アイにもりましたの」

イリーサはラツが知らない名前を出して返して来る。

「そつかそつか」

どうやらイリーサに同じ年頃の友達が出来たらしい。

しかも聞いた事がない名前だ。

カミツシュ神殿には属していないのだろうか……。

イリーサに友達が増えたのは父兄としては喜ばしい限りで、その友達がくれたという地図に、これ以上ケチを付けるのも何となく気が引ける。

なのでラツは地図自体やアイについて、問い質すのを止めた。

怪しさ満点なので贋物である可能性はもちろんあるが、見聞課の範疇でもあると、ラツはこの地図を仕事始めに決めた。

イリーサにもラツにも地図が全く読めない為、アイに現地まで案内してもらった事になったのだが……。

紹介されたアイは、イリーサとはまた違う感じの美少女だった。

一見、静寂とか涼やかという言葉が似合いそうである。

しかしイリーサと同じく、いうなれば芯の強さをシッカリ持っているらしい。

せつかくのまろやかで暖かそうな茶乳色な髪なのに、素っ気なく後ろで一つに束ね、針葉樹林の緑の眼差しでラツを真っ直ぐに見遣ると……アイはこう言った。

「想像と違う。イリーサは本当にこんなのが好きなのか？ 確かに人が良さそうではあるけどね」

こんなの、とはラツの事だ。

イリーサがアイにどんな風に自分の事を話していたかは、簡単に想像出来るが、出会い頭でこんな風にキツパリ言われてしまって、ラツはやや傷付く。

横目で見えるイリーサとティズは、フツツとした表情を浮かべている。

アイがラツを取り合うライバルにはなりそうにないと知って、安心しているに違いない。

「……立ち話も何だし、とりあえず出発しよう。道案内をよろしく、アイ」

イリーサといい、アイといい、どうもこの美少女達にちゃん付けは似つかわしくなくて、ラツはそう言った。

どうやら、ちゃん付けなしで正解だったらしい。

ラツから呼び捨てにされた事を全く気にせず、早くも歩き始めながらアイが答える。

「ガイラ河の支流の町、エミヒを地図は示している。カミツシュからはだいたい南東の方角だ」

慌てて床に置いてあった荷物を拾い、アイの後を追いつけた。

アイは歩きながら、更に地図の説明をエイラル王国の情報も付け加えて教えてくれた。

エイラル王国には二本の大きな河が流れている。

まずミーシアのある山々を源流とする、カイロス河。

その河口近く、晴れた日には遠目に海がキラキラと見える距離に、

王都が位置している。

そして、隣国との国境線の河であるガイラ河だ。

当たり前だが、ガイラ河だけでなくカイロス河も、湧水や場所場所と呼ばれ方の違う、何本もの支流が集まって大河となり、そして海へと続いている。

だが残念ながらカミツシュとエミヒを繋ぐ川は流れていないので、ラツ達は馬車と徒歩で行く事になった。

エミヒへの道中では、ミーシアの町にいたラツには蠢く煙にしか見えないような、イリーサにすれば雑魚扱いになる魔物と、時折出くわした。

「あーもー何かアイツらがいるんだけどー」

ティズが魔物の気配に敏感で、逸早く、思いつ切り嫌悪を込めて教えてくれる為、ゆっくり魔物に対する心構えも出来るから、退魔を受け持つイリーサとしては楽だった。

イリーサの退魔術から逃れた魔物は、アイが細く鋭い小刀で加勢する。

蠢く煙がスパツと分断されてしまったのを見て、気になったラツは聞いてみる。

「アイも退魔術が使えるのか？」

「私自身にはないが、この小刀に込められている」

「へえ」。退魔が可能になる武器かあ」

神霊山の頂上にあつた色々な形の術具に、武器の形はなかった。

しかし、力のない人間でも退魔が可能になる術具を作れるのかと、新たな発見をした気分だった。

あまりにもしげしげ小刀を見つめていたからだろう、アイが聞いて来る。

「ラツも持つか？」

それに答えたのはティズだった。

「ラツにはオレがいるんだぞッ。オレがいれば刀なんていらないうなッ」

「あはは」

何だかティズに押し切られ、小刀を譲り受ける話は立ち消えになっ
てしまった。

年下の少女達二人に守られている図は格好悪いが、ラツの学校で
の武術の成績を考えると、下手に武器を持つても参戦しても退魔の
足を引っ張るだけに違いがないから、その話が立ち消えたのは正解か
も知れなかった。

ともあれ魔物と遭遇しても、あつという間に片付き、安全な旅を
しているのだが、それでもティズはぶーたれる。

「なあ、ラツ。どうしてもラツがムカツク女ともう一人の旅に、
付いて行かなくちゃなんないのか？ あんづわするヤツが出て
来ない所をのんびりとき、オレと二人旅の方が絶対楽しいって」

一緒にいるのだから当たり前だが、ティズの言葉を聞きつけてイ
リーサが目くじらを立てた。

「先日、魔物がいると分かっているミシアへ行きたいと言いつ
たのは、どこのどなただったかしら。それにワタクシが一緒だっ
たから無事でしたのよ。今回ラツはエミヒに行くって仰って下さっ
たのですからねッ！」

「だームカツクッ！」

「まあまあ二人とも。旅をするにも目的地が決まらなかったところ
だし、ちやうど良かったじゃんか」

ラツは火花を散らすイリーサとティズの間に入って宥め、その様
子をアイがただじつと見ていた。

旅すから、アイは自分の一族の事を話してくれた。

アイの一族は古代遺跡を探して研究したり、オマケに発掘した品
を売ったりもしているらしい。

遺跡自体や、そこで見つかった発掘物の中には、全く風化してい

ない物がある。

形はハッキリ残っているにも関わらず使い方を始め、その製造方法、更に作る必要性が何だったのかがサッパリ見当が付かない。

つまり遺跡が作られた時代は、人々が遺跡自体を忘れてしまいうくらい大昔なのだ。

そしてそれゆえ、遺跡および発掘物は、神の創造物、神と人々が住んでいた場所とも言われ、遺跡＝聖地とされている事もある。

古代遺跡は世界各地にあるようで、発見された事柄を調べると、その文明は今よりも進んでいたと思われる。

なぜ古代文明が滅びてしまったのかは未だ分らない。

古代戦争があっただとか、大災害が頻発したとか、神の怒りに触れただとか、魔物の大群が現れただとか、ありとあらゆる説が上がっている。

もし魔物の大群説が正しいとすると、エイラジャールがその魔物達を追いやって、境界を創ったから今の世界があるわけである。

つまりエイラジャールは古代文明崩壊後に、現れた神という事だ。文明崩壊でその時に信じられていた神の名も消えているはずだから。

ともあれアイの一族が遺跡発掘をし始めたのは、それほど古くからではないらしい。

古代文明が滅びたせいで、人々は一から生活を築かなくてはならず、初めは生きていくのに手一杯だったはず。

食べ物の心配がなくなり、身の回りが落ち着き始めた時、ようやく遺跡にも目を向け始めたに違いない。

それでもアイの家や一族の倉庫には、目録を作る以前から集めた物もたくさん保管してあるらしい。

代々、遺跡の発掘及びその研究をして来た一族は、発掘物の一部に神官など力のある者にしか使えない、術具のような物があると段々分かって来た。

発掘物の研究を進めるにあたって、神殿の協力が必要だった事が

ら、アイの一族は神殿と関係があるのだそうだ。

イリーサがもらった地図の遺跡は、神官ではないが多少力を持っている者も含め、一族の誰も扉を開けられないらしい。

大雑把にしか地図に記されたメモが判読出来ない為、その嚴重さから考えるに遺跡の中には相当な物が眠っていると見ていい。

宝なのか何なのかは不明だが、アイはイリーサの神官としての強い力が、扉を開く鍵だと思っている。

もしかすると、力だけを目当てにイリーサに近づいたのではないかと、ラツは不信感を拭い切れなかった。

けれどせつかく出来た友達への不信を、イリーサの目の前で確かめたくはない。

そこで……誰よりも早く起きて、遅く寝るというアイの習慣を利用して、イリーサが熟睡している夜、ラツは尋ねた。

「疑って悪いとは思うんだけど……場所まで特定出来てるのに、どうして一族の馴染みの神官じゃなく、イリーサに地図をあげたりしたんだ？」

「イリーサは巫女姫だなんて、神殿のお飾りなんかには納まらない。神殿なんて狭い社会じゃなくて、この世界中を跳ね回るのが似合っている。そして……叶うならば、私はイリーサを一族に引き抜きたい。」

その為に遺跡に興味を持って欲しいから、手始めはイリーサの意欲を掻き立てる場所がいい。だからエミヒを選んだ」

「意欲って、……遺跡調査は危険なのか？」

つい心配になって、ラツは聞いた。

イリーサはどちらかというと、障害が大きければ大きいほど燃える性格をしているのだ。

「ミーシアでの一件は私も聞いているし、多少の事なら大丈夫だろう」

「多少」

ミーシアでは魔物自体が油断をし、イリーサがいたから事件が解

決出来たのである。

その事件を基準にされては、遺跡調査に自分が対応出来ると思えず、ラツは恐ろしくエミヒ行きが不安になった。

「ちょうど良かった。私もラツに尋ねたい事がある。どうしてイリ―サに引導を渡してやらないんだ？」

緑の瞳には、ラツに対する敵意があった。

何を言われているか分からず、ラツが首を傾げると、アイは続けて来た。

「その気もないのに、なぜキチツと振らない？ ティズの事もだ。想いには決して応じようとはせず、そのくせ優しい父兄面をして二人を繋ぎ止めて」

「……」

返す言葉が見つからず、ラツは黙り込む。

本当に二人の事を思うなら、ラツを捨てさせて上に登らせればいいのだ。

すると、まるで大人のようにアイは余裕たつぷりで笑った。

「でもいいさ、きっとイリ―サは遺跡を好きになる。そうラツ、お前より。……じゃあ、おやすみ」

「おやすみ、アイ」

それだけは咄嗟に答え返せたものの、その夜ラツはなかなか寝付けなかった。

アイの言葉がいつまでも頭の中で繰り返し回り続けているようだった。

遺跡

カミツシュよりは断然小さいが、エミヒも賑やかな町だった。

商店や民家が道を挟んでズラリと並んで、絶えず人々が行き交っている。

エミヒの神殿で荷物を降ろし、一息付いてから、四人は早速問題の遺跡へ行ってみる事にした。

実物を見て、神霊山のような畏敬もしくは、とにかくもつと派手な金キラ金を想像していた、ラツは思わず拍子抜けしていた。

ティズはアイに案内されてチラツとそれを見たきり、そっぽを向いて他に面白そうな物はないかとキョロキョロしているし、イリーサに至ってはズバツと直球で問い掛けた。

「これ？ 本当にこれですよ、アイ？」

ラツ自身もだが、イリーサもかなり半信半疑のようだ。

問題の遺跡は、エミヒの町外れの一角にあった。

ちよっぴり雨除けの屋根があつて、大人一人が立てそうな大きな深皿のような形をし、鈍く光るソレは確かに錆びてもいないし、そして埃も被っていないかった。

どうやら誰かが毎日手入れをしているらしく、お供え物もあつて、白い小さな陶器に注がれた水は澄んでいるし、お菓子まである。

どこからどう見ても、エミヒの村の鎮守様といった風だ。

しかしアイだけは落胆する事なく、ソレの周囲を一通り回ると、イリーサに言った。

「どんなのでも構わないから、力をぶつけてみてくれ、イリーサ。それも思い切り」

「え、今は止めた方が……」

日暮にはまだ早い。

それに町のはずれとはいえ人も歩いていたし、エミヒの通行人からは、子供三人（うち美少女二人）と若そうなオマケの保護者（？）

という事で関心を集めてしまっている。

だがラツの言葉も空しく、火が激しく爆ぜるような、突然の豪雨が何かを叩き付けているような、そんな穏やかではない音が周囲に響き渡った。

同時に深皿の底の部分から、湯気よりも濃い朝霧のようなものが湧き出す。

先程まであり触れられた深皿の底は、目の前から跡形なく消えてしまっていた。

「行こう」

アイだけが変わらず落ち着いた調子で、音と霧に固まっていた他の三人を促し、一番に霧の中へと入っていく。

興奮と好奇心や不安から何となく顔を見合わせ、アイの後を追ってイリーサ、ティズ、ラツの順に飛び込んだ。

瞬間、エミヒの町の音も聞こえなくなり、湯気の熱さも、朝霧の冷たさも感じなかった。

ほんの少しだけ時間差はあるが、みんなと同じ場所に飛び込んだはず……。

長い間目を閉じていた覚えはないのだが、気付けばラツの側には誰もおらず、一人だった。

周囲は闇ではないものの非常に暗く、ろくに見渡せないし、人の気配も感じられない。

心細さから、恐る恐るラツは名前を呼んでみた。

「……おい、アイ、イリーサ、ティズ」

返事はない。

だが、突然目の前にパツパツと二枚の大きな絵が浮かび上がった。しかもその大きな絵は、普通の絵とは違い本物のように動いている。

一枚は、エミヒの遺跡を見る前に、ラツが想像していたような金キラ金の遺跡の内部と思しき場所を、アイとイリーサが話し合いながら歩いている。

そしてもう一枚は、ティズは男とも女とも判別がつかない神官と退魔にあたっていた。

それぞれ真剣で、そしてとても充実しているような表情だ。

それはいつか近いうちに訪れる未来のような気がした。

ラツの中で孤独が深まった。

そして目の前の未来が訪れた時、ラツは今こうしているように一人取り残される。

ラツにだって分かっていた事だ。

いつかそうなればいいと、願っていた事でもある。

でも、いつかは、いつかでしかなかった。

営業課をクビになり、見聞課ではまだ何も成果は上げていない。

イリーサとティズがいなくなった神殿で一人になった時、自分はどうなるのだろうとラツは考えた。

今まで優遇されていた分、風当たりは強くなるに違いない。

学校から神殿に身を置き、過ごして来た。

果たして本当に神官を辞めた時、世間の中で自分は暮らしていけるのだろうか……。

ラツの思考は泥沼にはまったように、どんどん沈んでいった。

沈み込むのが止められず、ずっと心の中に存在してはいたが、眠っていた卑屈な感情が浮かび上がる。

力がないからだ、自分に。

力さえあれば、きっと誰も離れていたりしないはずなのに。

……力さえあれば。

今ならまだティズはラツを主人だとしている。

目の前の絵のような未来になる前の今なら、力を得る事が出来る。

ティズだって、ティズの力をラツが使う事を望んでいるのだ。

何を躊躇する事がある？

そんな誘惑の声が聞こえて来た。

力があれば、ラツは神殿という場所を失う事なく、神官という職にいられる。

力さえあれば、魔物と戦うのだって苦じゃないかも知れない。

ティズの力を使って魔物を退治すれば、周囲から賞賛を浴びる。

今度会えたらサンフォにも神殿に戻ってもらって、そしてイリーサとも一緒に仕事が出来れば楽しいに違いない。

色々な想像が浮かび、ラツは自然と頬を緩めた。

……だけど。

「いいわけあるか~~~~~ッッ！」

お腹に力を込めて、誘惑を切り払うべく、頭に血が上るくらい、ラツは自分に対して叫んだ。

誘惑されてしまえばいいじゃないか、わざわざ貧乏くじを引いてどうする、という心もそのまま残ってはいいたが、結局損な性分から抜け出せない。

「……ラツ、大丈夫か？」

「げ、ティズッ！ 心の中で盛大に呼んじやったのかッ？ しまつた~~~~ティズの力、使わせちゃったかああああ」

先程までは確かにいなかったティズから、唐突に隣で心配そうな声を掛けられ、ラツは自分の軽率さを呪った。

「ティズ、僕をぶん殴ってくれッッ。あゝ変なものを見たとはいえ、ティズに力を使わせるなんて最低だ。痛い目みて、ホントに喝を入れとかないとマズイ。ううう」

「オレがラツを殴れるわけないだろ？ 力なんて使ってないよ、オレの本体はラツの中にあるんだから、ただ戻って、また出て来ただけ。何だよ、変なのって？ あの女二人のせいカッ？」

「中？ 神霊山で消えたと思ってたのに、ティズの本体は僕の中にあるのか？ それに女二人???」

目の前から、動く絵も消えている。

ティズの口振りではアイとイリーサの事ではなさそうだが……。

「それよりも。……ティズ、僕はいつか自分の欲の為にティズの力を望んでしまうと思う。なのに力を込め直す事も出来ない。ティズは消えてしまいう前に僕から離れて、ちゃんと主人を探す旅をした方がいい」

「嫌だッ！」

「そんな即答しないでさ……」

「オレは力を使うならラツの為がいい」

「……うん。そう思ってくれてるのは知ってるし、本当に本当は嬉しいんだけど、でもどうしてもこのままじゃ良くないって気持ちが消えないんだ。ティズを山から下ろしてしまっただけなのに、また身勝手な考えを押し付けてしまっただけ……ごめん」

「……」

「御守りも駄目だ、ごめんなティズ」

アイの言っていた事は正しい。

だからあんなにグサツと来たのだ。

ティズの思いを受け入れない癖に、好意に甘えて振り回している。ティズが何も言ってくれないので、ラツは居た堪れない気分になった。

だがティズの為に、たぶんちゃんと引導渡すことが必要だ。

例え寂しくても、無責任だと嫌われたとしても。

ああでも、やっぱりティズに嫌われたら……寂しいを通り越して悲しい。

だけどティズの未来の為に、ちゃんと送り出せばそれでいいのだ。

ラツはティズの未来を考え、悲しいけど我慢だと、そんな思いは極力顔に出さないように頑張っていた。

……だが。

ティズはそんなラツを見上げ、いつも以上に決心が固いのを感じて、むっとしていた。

好きだから一緒にいるだけなのに、ラツには好きだけでは側にい

られないらしいと考えて。

それならばラツが折れてくれるような、もつともらしい理由を取りあえず作ってしまったえばいいと、ティズは閃いた。

「……分かった。ラツの言う通り、ちゃんと主人を探す」

ラツ攻略の為、始めティズはしよげた振りをして、次は心細げに表情を作った。

「だけどオレ、見つかるまで一人でいるなんて嫌だよ」

「神殿に言えば、いくらだって僕の代わりの同行者はいると思うけど」

「そいつ……その人達は本当に、ラツみたいに旅を付き合ってくれかな？ みんな自分こそが選ばれたって、押し付けられそうな気がする」

「……う」

そんな事はないと、ラツはキツパリ言えなかった。

ラツの心が揺れたのを見逃さず、ティズは続ける。

「そんな人と、しかも全然知らない人と、旅なんてしたくない」

「それは……そうだろうけど、でもだな。もしかしたら気が合うかもって事があるかも知れないだろ？」

「ラツが言っただし、気の合う人が居たらいいなとオレも少しはそう思っただけ、カミツシュ神殿の人達と会ったりしたけど、今のところ……」

……

気の合いそうな人が居たらいいななんて真っ赤な嘘だったが、ラツを攻略する為に更にティズは項垂れて見せた。

「オレ、ちゃんと探すから。こいつだって人を見つけたら、ちゃんとその人に噛り付くから。付き合わせて悪いけど、それまではラツと一緒にいたいよお」

外見に見合った子供らしい甘えた声で、ティズはねだった。

ティズにすれば、見つけたのも齧り付きたいのもラツなのだが。

「うーん……でも、僕はさっきも言っただけ、ティズが主人に会うまで大事にしておかないといけない力を使ってしまっても知れない」

んだ」

「ラツより体も小さいし、弱く見えるかも知れないけど、オレ、馬鹿男が神霊山の結界を解いて、出て来た魔物を退治し、ついでに押え込んで従える為に集められた力なんだよ。ちよつとぐらいじゃオレは消えない。」

「だけどヤバイと思ったら、ちゃんとムカツク女に補充してもらったっていざという時、ラツが何もオレに望んでくれなかったら、それこそオレは何も出来ずに消えちゃう。オレは自分が生き残る為に、ラツに力を使うのを望んでほしい。ムカツク女も、ラツの為にオレに力を分けてくれると思う」

「ティズの言葉を聞いて、ティズがいなくなったら寂しい悲しいと思っていたラツは完全に説得する勢いを失ってしまった。」

「ティズは神殿のお偉方が旅の道中で、イリーサを主人に選び直してくれればいいと思っっているのを知っている。」

「そんな事は絶対に嫌だったが、ラツと離れるくらいなら、ムカツク女の力だって借りてやってもいいとティズは思った。」

「……。……本当に探すんだな？ イリーサからも力をもらうんだぞ？」

「ティズがイリーサの力を借りてもいいと言い出した事に、ラツはビックリしていた。」

「ラツもお偉方の思惑を知っていたし、今のところ火種にしかかかっていないが、イリーサとティズが少しずつ仲良くなるには一緒にいるのが一番だろう。」

「今のところ二人が一緒に行動する接点は自分しかないのだからと、我ながら屁理屈だと分かっているながら、勢い失いついでにラツはティズから離れる事を断念してしまった。」

「絶対に、約束だからなッ？」

「うんっ」

「ラツはため息を付き、ティズはしてやったりな笑みを浮かべないように表情筋を総動員する。」

気がつけば、周囲は薄明るくなっていた。

「ラツ~~~~ッッ」

突然、イリーサの悲鳴のような声が聞こえる。

「どこだッ？」

思わずラツは叫んでしまったが、イリーサを探す必要な全くなかった。

今まで全く感じられなかったイリーサと、それにアイを視界に捉える。

「イリーサッ！」

手を伸ばすと同時に、ラツはイリーサにしがみ付かれた。

「イリーサも何か見たのか？」

「……昔の事を。でも今のワタクシにはラツがいますから」
ギユウツと、イリーサの手にはいつになく力が籠っている気がする。

「大丈夫。ちゃんというよ、ここに」

少しでも安心させようと、イリーサの背中を撫でながらラツは言った。

「ええ」

「僕だけじゃない。イリーサにはアイって友達も出来たじゃないか」

「アイ、は……」

そうイリーサが呟くと同時に、掛け寄っていたアイも側に来る。

ラツに顔を埋めているイリーサは、それに気付かず続けた。

「アイから色々な話を聞くのは楽しいですわ。今回は特に神殿を離れてエミヒに来られましたし。でもたぶん巫女姫と呼ばれる力がなければ、きつと誘ってはもらえなかった……」

「待って、イリーサ」

それを聞いて、アイが慌てる。

「確かに始めは、巫女姫っていうのを見てみたいという興味だけだった。でも今の私はイリーサと旅をしたい。イリーサの人を真っ直ぐ見て意見する所とかが好きだよ。」

もしイリーサに力がなくて生家にずっと住んでいたら、私はあちこち旅をしているし、誘うのは多少は遅くなったかも知れないけど、それでもいつかイリーサを旅に誘っていたと思う」

「……アイ」

「ただ立って使われているだけの飾りの巫女姫なんて、いくら力があっても見るだけで終わり。……ずっと私、どんな場所にも一緒に突っ込んでいてくれて、意見交換が出来る相棒が欲しかったから」

「……。勘違いしていてごめんなさい」

ラツから少しだけ離れ、でも片手だけは掴んだまま、イリーサはアイに言った。

そんなイリーサに少しほっとして、照れるようにアイは笑う。

アイの笑い顔を始めて見て、ラツはアイと二人で話した夜の会話も含め、イリーサに対する気持ちが本物なんだと実感していた。

「必要なのか」

「そうみたいねえ」

四人みんなで合流出来て、安堵したその時。

急に声が聞こえ、目の前に二人の女性が現れた。

ティズが言っていた女二人とは、この二人の事に違いない。

一人は真っ直ぐな赤い髪を結い上げ、灰色っぽい茶色の瞳のスラッとした体型で。

もう一人は逆にややぼつちやりとし、腰まである柔らかそうな銀色の髪と紺碧の瞳をしている。

綺麗系と可愛い系、二人とも文句なしの美人だ。

しかも成熟した大人の女性でもある。

ただ単に男の習性だけではなく、思わずラツは眼を奪われて見惚れてしまった。

ぼくっとなっているラツに気が付いた、イリーサとティズに両方向から腕を引っ張られる。

「随分とごちゃまぜな世界になったみたいじゃないか」

「本当よねえ、力ある人間とない人間が仲良く一緒にいるなんて。」

……さて、どうしましょう？」

その言葉に、ラツはミールシアでイリーサに追い抜かれた魔物の昔話を思い出した。

だが、聞き出す暇も隙も与えてもらえなかった。

「他に選択肢がないんだから、仕方ないんじゃないか？ その金色のお姫様。アンタ、アタシ達の主人になつてくれないかい？」

「なるべくワタシ達二人の力をまとめて受け入れてくれる人間がいのよ。ここを目覚めさせたのも、貴女よねえ」

目の前の女性二人から出る主人という響きから、ついラツはティズを見やった。

そのティズは吠え掛りそうな表情で、二人を睨んでいる。

もしかするとラツの所へ来る前、ティズは何か言われたのだろうか？

ティズが何を言われたかを聞きたかったが、美女二人の話はラツの思いをよそに続いていた。

「そしてアレを、いるだろ？ 魔物がさ。それを一緒に倒して欲しいんだよ」

「ワタシ達の力を取り込んで合わせられるのも、調節出来るのも人間だから」

「アタシは火を」

「ワタシは水の。今以上の力を貴女に約束するわ。いかがかしら？」
疑問はいくつもある。

まず一体ここはどういう遺跡で、そこになぜ二人が居たのか、という始めからラツには謎だ。

「お断りですわッ。ワタクシは今の力で充分ですからッ」

「そっか、残念」

「アツサリ振られちゃったわね」

イリーサの答えに、二人は顔を見合せて軽く肩を竦める。

その時、更にまた別の声が割って入った。

「いらぬ力なら俺がもらう。俺でもいいんだろ？」

イリーサは名前を呼ばなかったし、どうやって遺跡の中に来られたのか分らないが、神霊山で別れたきりのサンフォがいた。

けれど名前を呼ぶより早く、美女二人が応じる。

「もちろん大歓迎さ。アタシはフェシー」

「ワタシはリマ。貴方を主人に選ぶわ」

途端、ほんの一瞬ではあったが、サンフォの周りを火と水が取り巻いたかのように見えた。

「サンフォ……ッッ」

ラツが思わず名前を叫んだ時には消えていて、サンフォは余裕で笑っている。

サンフォの表情にラツは安堵するが、まずサンフォに、それから名前が分かった、フェシーとリマの二人にも言いたい事と聞きたい事がある。

けれど。

「さてフェシー、リマ。こいつら追い出せるか？」

「ッ！ オイコラ待……」

アイ、イリーサ、ティズ、ラツの四人はエミヒの町に強制的に戻された。

魔物と戦う事も、外傷もなく町に戻れたのは大変素敵だったが、ラツの言い掛けた文句はサンフォに届いていないに違いない。

悔しくて八つ当たり半分、もしかしたらもう一度中に入れてもらえるかも知れないという期待で、ラツは腕を振り上げて地団太を踏む。

その時、地面が小刻みに、やがて激しく揺れ出した。

終いには遺跡のある場所を中心に地面がひび割れ、ゆっくりとではあったが盛り上がり始める。

当然立っているのもおぼつかない状態だったが、とりあえず走って逃げるしかない。

近くにいた通行人も、それから家や店にいた人々も異変に気が付いて、少しでも遠くへと悲鳴を口々に叫びながら転げるように走っ

た。

そして激しい揺れが収まった時、エミヒにいた人々は祀っていた鎮守様と同じ色をした巨大な物体が、地面から浮かび上がったかと思つと、空に溶けるように消えた様を見たのだつた。

事後

鎮守様にイリーサが力をぶつけて壊し、中へと入ったのをばったり見られていた為、四人は危うくこの一件の犯人にされるところだった。

実行犯として村人に吊るし上げを喰らわずに済んだのは神殿のおかげで、表向き、異変を逸早く察知した巫女姫が調べようとしたが間に合わず、エミヒの一部が崩壊してしまった……という事になっている。

もちろん鎮守様が何だったのか等、エミヒの人々が納得したとは思えないが、とりあえず災いを持ち込んだと石だけは投げられずに済んだ。

とはいえ当たり前だが、四人はエミヒの神官から、取り調べもとい事情を詳しく話すように求められた。

鎮守様が古代文明の遺跡の入口であり、気は重かったがサンフォが来て、そしてフェシーとリマに遺跡から追い出されてしまうまで取り調べの中、遺跡に入ってそれぞれ別々になってしまった始めから話していく過程で、分かった事もあった。

遺跡の中は人の精神を探る事が出来るようで、弱みを見つけ、突く空間になっている事。

人間ではないティズは始めフェシーとリマの所にいて、その二人から、

「人間によって生まれたのを感じるが、オマエはアタシ達にとっても近いな」

「アレらへの嫌悪もしつかり持っているのなら、人間から生まれた以上は力ある主人を選ばなくっちゃ」

と、言われたのだそう。

ティズは余計な御世話だと答え返したらしいが、彼女らは人間ではなく、魔物に対して嫌悪を感じる性質のようだ。

そしてティズは最後に、サンフォが来た事を自分のせいだと言い出した。

「オレの力を馬鹿男がちょこっとだけ持ってるんだ。オレが力を使い果たすまで、たぶんずっと繋がってる」

本当は言いたくなかったのにツという苦々しい調子で、ティズは吐き捨てる。

エミヒの遺跡で手に入れた火と水の力を、サンフォは何に使うのだろう。

神霊山で言っていた事を、まだ実行する気なのだろうか？

けれどティズと繋がっている以上は、神霊山の結界を解き魔物を溢れさせるのを止める事も、文句を言う機会もまたあるはずだとラツは思った。

いや、今度こそ絶対に最後まで言ってやると密かに誓う。

それにしてもエミヒの遺跡で四人が体験した事、最後に見た空を浮かぶ巨大な物体が可能なくらい、これまで考えられていた以上に古代文明は高度に発達していたのかも知れない。

書いているとまるで夢物語のようだったが、見聞課の仕事として報告書も出した。

次の日の朝早く、報告は済んだし、村人の心像が悪い以上、いつまでもエミヒに留まっけていても良い事はなさそうだ。

イリーサとティズが起きたら、次の目的地をどこにするか早いところ決めなきゃと思いつつ、今日も一番に起きていたアイにラツは挨拶をする。

「おはよう、アイ」

「うん。おはよう」

「ちょっといいかな？」

無言だったが、駄目ではないらしい、ラツは考えていた事を話し

始めた。

「イリーサとティズの事なんだけど、アイの言葉は正しいと僕も思う。でももう少しだけ、イリーサとティズの側にいたいんだ。

きつともう少ししたら二人とも、僕なんかよりずっと素晴らしい人や物事に会えると思うから。イリーサはアイのおかげで半分見つけたようなものだけど、それでももう少し、目障りだらうけど一緒にいさせてくれ」

「……気に食わないが、もう何も言わない。ただラツが引つ張られて付いて来ているだけ、と思っているのではないのなら」

「アイはしっかりしてるな……。ありがとう」

エミヒに入る前の夜とは違い、スッキリした気分だった。

少しも経たないうちにイリーサとティズも起きて来たので、神殿の食堂へ行き、四人で朝食をとる。

食事もおべ終わり、のんびりお茶を飲んでいると、アイが提案して来た。

「良かったら、もう少し私に付き合ってくれないか？ イリーサだけじゃなく、ティズとラツも」

「いつまでにカミツシュへ戻れとは言われていませんけれど、どちらへ？」

「国境を越えて、私の一族の里へ」

「それならぜひ伺いたいですわ」

「本当はイリーサだけ連れて行こうと思っていたけど」

「すぐさま提案に乗ったイリーサにアイは嬉しそうだったが、チラツとラツを見て続ける。

「私も一通り学びはしたが、まだまだ浅い。今回の事も、もう少し詳しい先生がいる」

浅いと言っではいるが、アイは何やら思い当たる事があるような口ぶりだ。

「……僕、行きたいな」

「じゃ、オレもッ」

少しでも頭の中に溢れ返っている謎が解けるなら、チャンスを逃すべきじゃないとラツは思った。

アイの一族の村も気になるし、そしてイリーサの行く末も垣間見えるかも知れない。

「国外に出るのって初めてなんだよ、僕」

何となくラツはそわそわした。

「ガイラ河を渡るだけだ」

アイの冷静な言葉が入るが、気もそぞろになるのは止められない。

「アイは何度も行き来してるんだよね、凄いよねあ」

食堂を出て、部屋へ荷物を引き取りに行き、四人はエミヒを出発した。

ガイラ河

ガイラ河渡った国、バウタ王国とエイラル王国は仲の良い国だ。同じ国内でも場所場所によって独自性が出てくるものだが、河を挟んだだけの両側の地域は言語や習慣が似通っていた。

自然は共有財産を始め、物事に対する考え方などの共通点が多いので、互いに意思の疎通がしやすく、行き来も激しい。

たまたま河の両側に王国が成立し、両国の線引きが単に分かりやすい、ガイラ河となっただけなのだ。

エミヒを出て三日後のお昼過ぎ、ラツ達四人はバウタ王国へ渡してくれる船着き場の村タサクへ着いた。

いよいよ国境越えのはずだったのだが、どうも村の様子がおかしい。

昼間だというのに見る家全て、窓も戸も隙間なく閉じられているし、家から出てきた人達も、普段は賑わっているのだろう広い通りを、大急ぎで用事を足しては家の中へ引っ込んでしまう。

「これ絶対おかしいよ！ ラツ、そう思うだろ？」

「うん」

「タサクで問題が起こったなんて、エミヒを出るとき聞いてませんわ！ ラツもそうでしょう？」

「うん……」

変だと思いつつ、タサクの人にはとても声を掛けられるような雰囲気ではなく、そのままガイラ河へと出てみた。

ところが河岸には剣や、その代用品で先を鋭くした棒を持った人々が、厳めしい面持ちで並んでおり、ますます殺伐とした緊張が漂っていた。

近くはないが遠くでもなく見えるガイラ河の対岸、バウタ王国側クエニも同じように武装した人々が並んでいる。

ガイラ河を挟んで揉め事が起きたのだろうか、河岸を守ってい

る人に尋ねてみた。

「子供は近づくな、あっちへ行ってるッ」

更に殺気立って追い払われてしまい、とてもクエニへ渡ししてくれそうにないし、この調子では渡し船もなさそうだ。

「ラツ、クエニに行くの無理そうだよー」

「しょうがない。タサクの神殿に行ってみよう」

「神殿に行けば、何が起ってるか教えてもらえるかも知れませんわね」

「……」

本当は本日中にさくさくつとバウタ王国へ行ってしまう予定だったのに、結局四人はタサクで神殿に寄る羽目になった。

タサクの神殿でも、危うくおざなりにされ掛けたが、イリーサがカミツシュの巫女姫であると分かるや否や、タサクの神官は態度を一転した。

「ガイラ河に大人の背丈の何倍もある、人一人なら簡単に丸呑みにしてしまえそうな、大蛇が出たのです」

「ホントデスカ……？」

ラツが見た事のある蛇といえば、せいぜい腕の長さくらいのものだ。

「信じられないのも無理はありません。……が、その大蛇が水面から上体を出し、餌を見定めるかのごとく辺りを見回すのを、ちょうど通り掛った船の上から何人もが見ています」

「え、誰か、その……」

「いえ、たまたま大蛇の好みに合う人間がいなかったのでしょう。幸いにも犠牲者は出ませんでした。けれどそのまま去らず、うろつくとエイラル側とバウタ側を泳いでは、時折顔を覗かせているのです」

タサクの神官の言葉を聞いて、本当に丸呑みにされた人がいないのだと、少しはほっとする。

タサクとクエ二の河岸が臨戦態勢な状態になるはずだ。

だが、四人の目的地はアイの故郷である。

ガイラ河を越えねば、辿り着けない。

問題は蛇である。

大蛇の正体として、簡単に思い浮かべられるものをタサクの神官にラツは尋ねてみた。

「魔物なんでしょうか？」

「ぞわぞわはしなかったけどな」

「それがその……」

ボソツとティズが呟き、タサクの神官は非常に言い辛そうに続けた。

「近づくのすら恐ろしく、本当に神殿の管轄なのかどうかも定かではありませんので確認してないのです。けれど今この時、ガイラ河へ巫女姫がいらっしゃったという事に、何やら巡り合わせを感じます」

あの大蛇を何とか出来るものならして欲しいと、イリーサにタサクの神官は懇願して来る。

けれども大蛇の好みにイリーサが合ってしまった場合、イリーサは生贄に選ばれたも同然だ。

だが大蛇だつて腹が満たされれば、当分は出て来ないだろうし、再び現れる時までにはバウタ側と連携を密にするなり、他所から応援を呼んでおく事も出来る。

大蛇に捧げられる巫女姫だなんて、まるで昔話のようだ。

「お話は分かりました。ワタクシ、もう一度河へ行ってみますわ」
巫女姫とはいえ、エミヒの遺跡で摩訶不思議な体験をしたばかりの子供のイリーサに、手に余る事態の全てを押し付けようとしているエミヒの神官と、それを止めようとしない自分に腹が立ち、同時に代わりにはなれない不甲斐無さを感じて、ラツは情けない思いで

ガイラ河へ向かう。

今回はエミヒの神官が河岸まで同行してくれたので、追い払われずに済んだ。

流血沙汰がまだ出てないので、そこまで緊迫してはいないが、相変わらずの膠着状態らしく、対岸も同じ様子だ。

大蛇は今、ガイラ河の流れの中で泳いでいるのか、エイラル側にもバウタ側にもいないようだった。

「イリーサ。一緒にいるだけだけど、見ていてもいいかな？」

「私もそうさせてもらっ」

「……ケッ」

ラツとしてはせめての気持ちだったし、アイは見るだけと言いなから、小刀の柄に手を置いて大蛇を切り付ける気満々らしい。

ティズはラツが行くなると、渋々の態度だ。

「それでは参ります」

棧橋に立つと、イリーサは両手を広げて金色の光を撒き始めた。ただ綺麗は綺麗なのだが、神霊山やミーシアで見たのとは違い、何だか光が刺々しい。

「さあお出でなさい。どちらが餌なのか、思い知らせて上げますわよッ」

しかも巫女姫らしくない物騒な言葉を吐いている。

イリーサのキツパリとした声に、ラツは心強くなる。

大蛇が何であれ、イリーサが簡単に生贄にされてしまうわけがない。

イリーサの声の勢いに乗って、ただ小石を投げたのでは届かないような場所にまで、光は降り注いだ。

河の水面がゆっくりと盛り上がったかと思うと、タサクの神官が言っていた通り人一人を簡単に丸飲み出来そうな大きさの大蛇が現れた。

イリーサは大蛇を睨み付け、大蛇の方もイリーサに狙いを付けているように見える。

河岸で固唾を飲んで見守っていた人々も、今こそ雌雄を決する時とばかりに鬨の声を上げ、即刻大蛇と戦う事になると誰もが思ったのだが……。

「ごめんねごめんね。ボクね、ただね、ただ……うわぁん」

大蛇から聞こえて来たのは、その姿に似合わず幼い人間の言葉で、しかも謝ったかと思うと、声だけだったが泣き始めた。

「……ラツ」

くるつと踵を返して、イリーサがラツを見る。

「えっ、ん？ 何、イリーサ？」

「後はお任せしますわ」

「は……？」

そしてスツカリやる気の失せたイリーサはアイを引っ張って、ラツを遠巻きにするように下がってしまった。

何やらティズには悪いが、神霊山でサンフォからティズの説得を押し付けられた時を彷彿とさせられる。

確かに役に立ちたいとは思っていたが、身を呈して盾になるとか……いや想像は想像でしかなく、実際は大蛇を見て固まっていただけなのだが、もっとこう格好イイ風を想像していたのに。

ともあれ、任せられてしまったからには仕方ない。

「泣かないで泣かないで」

とりあえず、ラツは言ってみる。

けれど大蛇からの答えは同じ。

「ごめんねごめんなさいい」

「あゝいや、その……ほらっ、もう光もないしさ」

「うわぁあぁん」

しきりに謝り、盛大に泣いている大蛇を間近で見ているうちに、段々その姿に慣れ、恐怖が薄れてきて、ラツは一步前へ出た。

どう見ても大きな蛇に違いないのだが、水に濡れた鱗は銀色に光ってとても美しく、とても魔物とは思えない。

口調に威厳はないが、化け物という言葉も相応しくなく、むしろ。

「ガイラ河の主、神獣……あゝと蛇だから聖蛇？ 守護者とか精霊っぽいなあ」

「ああああああッ」

突然大蛇に大声を出され、ラツは思いっ切り飛び退った。

「うわあん、せつかく話し掛けてもらえてるのにい。ごめんねごめんね。ねえ、逃げないで。ねえ、ボクってそんなに怖いのかなあ？ ボクね、ただ挨拶したかっただけなのに、逃げられるし、その後からは何だか両側から大勢で睨まれてるし。

どうしよう、ボク。何も悪い事してないはずなのに、何でだろ？ ボクっていい方がいいのかなあ？ ……うう、うわあゝゝん」

ここで正直に怖いと答えたら、そのままゴボゴボと河の中に沈んでいってしまいそうな口調だったので、さっきよりもっと大蛇の方に近づき戻り、ラツは慌てて言う。

「待った待ったッ。何であーッて大声出したんだ？ それに挨拶って？」

「ガイラ河の子、水の精霊がボクだよ。さっき精霊って言うてくれたでしょ？ それでやっと自分は精霊だって分かって、つい声が出ちゃったんだ。

そんなボクなんだけど、生まれました、どうぞよろしくって言いたくて。……でも普通はそんな事しないのかな？ それで余計変に思われちゃったのかなあ？」

「そんな事ないぞ。挨拶だなんて、前向きでいいじゃんか」

「……そうかなあ？」

「だって生まれたばかりなんだろ？ それなのに自分からそんな風に思えるなんて、そりや凄いもんだッ！」

このデカさじゃとても生まれたばかりには見えないと内心思いつつ、ガイラ河の精霊をラツは必死で励ました。

だが、返事は冴えない。

「……じゃあやっぱりボクの形が悪いんだ」

「大丈夫だって。それも時間の問題で、みんなすぐに分かってくれ

る」

「ほんと？」

こんなに慰めたくって、つい撫で撫でしたくなるくらい、低姿勢なのだから。

本当にガイラ河の精霊へ手を伸ばそうとしたその時、唯一離れずにいてくれたティズが突然吠える。

「オイッ！ ラツはオレだけの主人なんだからな、駄目だからなッ！」

「名前、ラツっていうんだ？ どうしても駄目？ ねえラツ、駄目？」

どうやらティズが止めなければ、危うくガイラ河の精霊の主人にされていたところだったらしい。

契約を止めたティズではなく、ラツをじーっと真ん丸な目でガイラ河の精霊が見つめて来る。

さすがに見つめられ過ぎると大蛇だし、まだちょっと怖い。

「ごめん、絶対に駄目」

「駄目かあ。でも、そうだッ。ボクもラツみたいな形になればいいんだッ。そしたら怖がられはしないよねッ」

ガイラ河の精霊は一人納得し、すると大蛇は水となって崩れ、その代わり河の上にティズよりも小さい子供が立っていた。

色合いが微妙に違うが、その髪はエミヒの遺跡で会ったリマを思い浮かばせる。

リマも水の力を与えろと言って、サンフォを主人に選んだ。

水の力を持つ彼女がエミヒの遺跡から出てすぐに、ガイラ河の精霊が生まれた事は何か関係があるのだろうか？

「ねえ、どう？ これで怖くないよね？」

「もー文句なし。何なら早速挨拶といってみよう」

「うんッ。はあどうしよう、緊張するなあ」

河岸にいた人々の殺気は消えていて、口をあぐりと開けている。「まずはタサク側からでもいいかな？ クエニの方には手を振ってお

くとか……いや、お辞儀じゃ見えないと思うから、ほらほらもつと大きく〜っ」

「……うわぁん、誰も降り返してくれないよぉ」

「こっちの会話まで向こうには聞こえてないから、どういふ反応すればいいか困ってるだけだつて。あとでちゃんと行こう」

「ラツ、一緒にいつてくれるの？」

「もちろん」

そこにティズが再び割り込んで来て、ガシツとラツの手を掴んだ。
「オレ達は元々あっちに用があつたんだからな、お前の為じゃないから勘違いすんなよ」

「そつかぁ。だけどそれでもいいや。ちょっとでも長く一緒にいられるなら」

「……」

生まれたばかりなのに、この健気さ。

落ち着くまでずっと側にいてあげたいと思うけれど、ティズのよ
うにガイラ河の精霊が主人を見つけるのが遅くなってしまっただけだ。
ただどうか良い主人と巡り合えますようにと祈りながら、ラツは
空いている片方の手で小さな手を握った。

棧橋にはまずタサクの神官が近づいて来て、啞然としたままの調
子でイリーサに尋ねている。

「巫女姫、これはどういう……？」

「大蛇の正体とは、生まれたてのガイラ河の精霊」

「精霊が本当にいたのですね。昔話にしかないのかと思っており
ました。ただ……申し上げ難いのですが、本物なのでしょうか？」

「詳しい事を問われても、今のところ何とも答えられません。ただ、
見て聞いた通りそのままですわ」

そこでタサクの神官はガイラ河の精霊を見つめ、恐る恐るという
風に近づいて来る。

「ここはタサクって地名で呼ばれてる。その神官だよ。所属神殿
は違うけど、イリーサと僕の同業者だから……」ともかく安心して、

な。挨拶するんだろ？」

ガイラ河の精霊は固い動作で、深々と頭を下げた。

「はじめまして。ボク、ガイラ河の子、水の精霊ですっ」

「……。……これはご丁寧に痛み入ります。精霊、様？」

「う、う、うわあああんっ。何か固い言葉遣いされてるよお。どうしようう」

「え、あ、どうしたら……」

外見だけが小さな子供のガイラ河の精霊に、泣き出されたタサクの神官はおろおろしている。

「大丈夫大丈夫。精霊だなんてホントにみんな初めて会っただよ。そのうちみんな落ち着くから」

「……うん」

泣いてるガイラ河の精霊の頭をやさしく撫でてやると、どうやら落ち着いたらしい。

「どうする？ クエ二の方にもすぐに挨拶しとくか？ それともタサクでちよっと話をしてからにしようか？」

「まず挨拶する」

そこでタサクの神官に頼んでクエ二まで渡し船を出してもらい、また挨拶したが、やっぱりクエ二でもぎこちない同じような遣り取りが繰り返されただけだった。

まだみんな目の前の子供が、ガイラ河の精霊である事に半信半疑なのだ。

だが、大蛇から子供の姿に変わった現象を、その時河岸にいた誰もが見ている。

魔物でない人間外のモノ、そんな子供との会話なのだからぎこちないのは無理もない、と思うしかなかった。

荷物を置きつ放しだったし、またも見聞課として、ガイラ河の精霊について報告書を作らなくてはならなかったラツは、一度タサクの神殿へ戻った。

タサクの神殿で報告書を書いていると、一緒に付いて来たガイラ

河の精霊がラツに聞いて来た。

「ラツはボクが精霊とは違うんじゃないかって疑わないんだね」

「そりゃー一番多く話してるし、それに精霊って言葉に大声で反応したり、大蛇から子供の姿に変わったのを僕はすぐ目の前で見たからなく。それに……」

実は先程から、ずっと気になっていた疑問をラツはぶつける。

「あのさ、根掘り葉掘り聞いて悪いんだけど……」

「うん、なあに？」

「大人で人間の女の人の姿をした精霊もいるのかな？」

「ラツはそんな姿の方が好き？」

「いやーそりゃ好きだけど、そうじゃなくってさ。……人間の姿だったり、それ以外のだったり、声だけだったり、精霊って昔話とか伝承の中でしか今まで聞いた事なかったんだよ」

「そうなの？」

「そうなんだよ。なのに、キミは自分を精霊だというし、ついこの間エミヒで不思議体験した時に会った二人も、もしかしたら精霊だったんじゃないかなあと」

フェシーとリマの話を出すと、ティズの表情が硬くなった。

ティズにはラツが何を尋ねているのか分かったみたいだ。

もしかしたら彼女達も火と水の精霊だったのではないかと、ガイラ河の精霊を見てラツは思ったのだ。

ガイラ河の精霊とラツの話を聞いていたアイも頷く。

「私も同意見だ」

けれど残念ながら、ガイラ河の精霊は首を横に振った。

「ごめんねごめんね。ボク、まだ他の精霊に会った事がないんだ。その人に会ってみたいなあ。そしたらきつと分かるよ」

「うーん。それがすぐに消えちゃって……。こつちこそ、ごめんな。じゃあ他に精霊がいるかどうか分からないよなあ」

「あのね、きつとね。他所でもボクと同じくらい自然なんかの力を大きく貯められる精霊が、生まれてるよ」

「力を貯める、か」。あ、口を挟んじゃってごめん。それで？」

「声だけっていうのは、力のない人間には見えないくらい、あんまり力を貯め込んでなかったか、元々貯められない精霊だと思うんだけど、この辺に今は全然いない。だけどこれから、いっっぱい生まれてくる。そんな気がするなあ」

「うほ、そうなのかッ。楽しそうだな、それ。河で生まれたんだから、海にも生まれてるかな？ 源泉なんかにもしそうだなあ。……でも待てよ。あっちこっちで生まれてるって事は、あっちこっち精霊退治騒ぎが起きてたり」

「えええええ、うわあああん」

「あ、ごめんッ」

頭に浮かんだ事をそのまま口に出して、ガイラ河の精霊を泣かせてしまい、ラツは咄嗟に謝った。

でも実際あり得そうで怖い。

エイラル王国とバウタ王国内だって、神殿を通して急いで回覧を回してもらっても、行き渡るのにどれくらい掛かるか分からない。

「……でも何も知らなくなっちゃって大丈夫かな」

「ほんとにそう？」

ガイラ河の精霊を見て、ラツは思う。

「始めはビックリだけど、よく見て聞いてもらえれば、そんな倒さなきゃならない恐ろしいモノじゃないって分かるはずだし」

それでも何もしいよりはいいだろう。

「イリーサ、一応巫女姫の名前を借りてもいいかな？」

「仕方ありませんわね」

発信者をカミツシユの巫女姫にすれば、重要度も信憑性も回覧速度だって上がるだろうと、ラツはイリーサに頼んだ。

なぜか気乗りしないようだが、それでもイリーサはタサクの神官の所へ走って行ってくれた。

ガイラ河の精霊の話を聞いていると、精霊とは自然の力を貯められる存在。

極端な話、自然と人で力の大元は違うけれど、力が込められる点で精霊と術具は同じだ。

そしてティズは術具の自我、だからフェシーとリマは自分達と似ていると言ったのだろうか。

やっぱり考えれば考えるほど、彼女達も精霊のような気がする。

とすると古代文明はただ物質的に高度に発達していただけではなく、もしかしたら精霊と強く結び付き、その精霊の力を借りて魔物と戦っていた文明なのだろうか？

あくまでもラツの憶測でしかないが……。

明日こそガイラ河を渡って、アイの一族の村へ行こうと、四人は早目に就寝した。

朝、準備を済ませて四人とガイラ河の精霊はタサクの栈橋へ向かった。

栈橋ではガイラ河の精霊の一件で足止めを食らった人々が、エィラル王国とバウタ王国、それぞれの物資を船に積み込んでいる最中だった。

活気づいてる栈橋に、ラツ達四人と一緒にやって来たガイラ河の精霊を見た人々は、ギョツとした様子で固まる。

「……ボクも他の精霊と会ってみたいから、探検に行つて来るね。まいったねえ、ラツう」

そう言つて、ガイラ河の精霊は河にふわっと飛び込み、同時に元の大蛇へと姿を戻し、すいすいと泳ぎ始めた。

その大きさにも関わらず、小さな雫だけがラツに飛んで来る。

川下の方へ泳いでいるので、海にでも出る気なのだろう。

「巫女姫様、船を出しても大丈夫でしょうか？」

「大丈夫よ。安心なさい」

「……はい」

イリーサのお墨付きの一言で、ラツ達は無事にガイラ河を渡る事が出来た。

もちろんまずはアイの一族の村だけれど、そのうち海も見てみたいな」とラツは思った。

そしてふと、今のティズの外見って思いつ切り自分の影響を受けているという考えが頭に浮かぶ。

本当ならもつと精霊らしい姿だったのではないかと、ラツは心配になった。

目はやっぱり瑠璃色だったかも知れないが、もつと美しいとか愛らしいとか、そーゆー風になっていたのではないだろうか？

せめてティズの本当の生みの親であるサンフォ似だったら……。

「う~~~~ん」

思わず、唸り声が出てしまった。

「何だよ、ラツ。オレの顔をじろじろ見て、急に唸ったりしてさあ」

「いや〜何でもない」

「絶対に何でもなくないッ。すつごい気になるッ」

「あははは。いやその……ティズが僕と会わなければ、どんな風な人の姿になってたのかな〜と思ってさ」

「さー？ けどオレ、ラツと会わなきゃ、きっと人の姿になろうだなんて思わなかった。馬鹿男に無理やり従えられてたら、オレは色んな術具の力が合わさってるから、グシャグシャのもやもやのままだったんじゃないか……？」

何たつて馬鹿男と呼ぶくらいだから、サンフォの名前を出せば絶対にティズは嫌がる。

そのサンフォ似だったらと話して、自分の外見に固執されでもしたら困るので、ラツは始めに浮かんだ考えだけを明かした。

けれど残念ながらティズは興味がなさそうだ。

もしかしたら本当の主人を見つけた時、本来取っていたはずの姿を取り戻せるかも知れないし、ティズの姿が周囲の影響を受けやすい性質なら、これから顔立ちなんていくらでも変わっていくだろう。

ラツはそう思う事にする。

「ティズ。一緒に色んな場所へ行つて、色んな人に会おうなッ」

「……うん？」

外見の話から急に違う話になったので、ティズはよく分からないまま、とりあえずラツと一緒にならと頷いた。

そんなティズの頭をラツは撫でたのだった。

アイの先生

アイの一族の里へは、森の中の道なき道を辿った。

何度も通っているのだろうアイには何かしら目印があるのだろうが、ラツにはそれが何なのかサツパリ見当も付かず、一人で河まで戻ってみると言われても、確実に迷子になるだろう、そんな場所をしばらく歩き続けた。

そしてつい今しがたまで木々に遮られていた視界が、一気に開けて明るくなった。

「ようこそ、クミナへ。……厳しく排他的な里ではないが、一応私の側を歩いてほしい」

里でアイの家族には会えなかった。

両親兄弟みんな、遺跡探しや調査に出掛けているらしい。

クミナでは家族全員が家を空けるのは珍しい事ではなく、例外へ出ていなくても誰かが持ち帰った発掘物や情報を、過去の事例に照らし合わせつつ研究したり、遺跡に携わっている家が多い。

遺跡から出た発掘物や情報は里全体の共有物なのだ。

そして発掘物などの共有が嫌な場合、里を出ていく決まりになっている。

アイの一族出身以外にも、遺跡に関わる人々は国を問わず大勢いるのだそう。

「すぐに先生の所へ行くか？ それとも明日にする？」

エミヒの遺跡の事やらを里長に報告に行っていたアイが、家に帰って来て一息つく間もなく言った。

「その先生が、古代文明について色々詳しいのか？」

「私よりずっと。……答えてくれる気になれば」

「すぐにでも参りましょう」

イリーサの鶴の一声で、ティズとラツも立ち上がる。

何だかそわそわと、気が逸る思いなのはラツも同じだった。

旅に出てからどこへ行っても落ち着けないなあと思いつつ、アイの家を出て、里からも離れ、更にアイの後ろをてくてく歩いていくと大きな岩山にぶち当たった。

山といっても神霊山よりはかなり低く、そして木は一本も生えていない。

「この岩山は私の一族から聖地だと思われる。エミヒの鎮守様のように、とも言えるな。遺跡ではないと私は思っているけど。遺跡には大概、エミヒで見たような物質が使われているから。……先生、ただいま戻りました」

アイが岩山に向かって話し掛けた。

しばらく返事が返って来なかった為、もしかして心話でもしているのかと思い始めた時、明らかに渋々な男の声が全員に聞こえて来る。

「……。……おかえり、アイちゃん」

「遺跡ではないと思う理由がこれだ。声を発する遺跡の話は今のところ聞いた事がない」

「里に帰って早々ここへ来るなんて、何をそんなに知りたいのかな、子猫ちゃん……。……って。あゝあゝアイちゃんだけが一人で来てくれれば良かったのにさ。しかもアイちゃんが一緒じゃなきゃ、絶対返事もしないよゝな変なのを三人も連れて来ちゃって」

アイにはちゃん付けだし、思いつ切り邪険にされて、ばやかれてもいるが、この声の主はもしかして……。

「岩の神様ツ？」

ラツは思わず叫んだ。

しかし声は答えてくれず、変わりにアイが言う。

「神ではないと思う。……先生。私、ガイラ河で生まれたばかりの精霊に会いましたよ」

「ふゝん」

「火と水に、フェシーとリマという名前の精霊はいますか？」

「あゝいるんじゃないの」

「彼女達が目覚めた事で、他の精霊も生まれているのでしょうか？」

「そくかもねく」

矢継ぎ早に尋ねるアイに対し、声は適当に相槌を打っているのが丸分かりだった。

「先生。確証が欲しいと思うのはわがままですか？」

「おやおやく？ わたしの答えは確証になっちゃうのかく」

「先生の声を始めて聞いて、私がラツと同じように岩の神様が尋ねた時、先生は言っていましたよね。地は水を堰き止め、水は地を崩す。水は火を消し、火は水を蒸発させる。火は大気の流れを変え、風は火を消し飛ばす。風は地を風化させ、地は風を留める壁となる。雷は暗にその輝く刃を放ち、暗はその刃を包み込む。

わたしはそくゆくものなんだよ。いつかどこかで神でも魔物でも人間でもない存在と会ったら、質問においてく答えてあげるからそくだ、先生と呼んでおくれ……と」

まるで何かの呪文のような言葉をアイが話し終えると、声は感心して懐かしむような調子で言う。

「よく覚えてるな。賢いアイちゃんが大好きだな、わたし。ただ前にも言ったけど、力ある人間は大嫌い。それにアイちゃんが相棒に望んでる相手だなんて、邪魔つけだよな。……だけど質問してもいいかな、お嬢さん？」

イリーサは何も返事はしなかったが、声は勝手に聞いて来る。

「火と水の親玉精霊、フェシーとリマの力を断つたのは、何故だい？」

「これ以上、力なんていらなからですわ」

「へく、それだけ？」

「あの時はそれだけでしたけど、自我を持つ力なんて一人で充分ですから」

「うん、今精霊は必要ないよね。でもお嬢さんの力よりも強いアレが出て来たらどうする？ ま、相手は魔物と限らないけど」

「ワタクシでは無理そうなら、……逃げますわよ」

「だよね。だけど後ろに大切な人がいたら？ 逃げ場がなかったらどうする？ 生まれたばかりの精霊でもいいと、今以上の力を欲しない？」

「……」

精霊の力なんて欲しくない、けれどどんな状態になっても、今以上の力を望まないとイリーサは断言出来なかった。

例えば精霊の意思に反し、力を使う事だってあるかも知れないし、もしかしたらその精霊が消えてしまうほど大きな力が必要になる時だって来るかも知れない。

ぎゅつと眉を顰めたイリーサの様子を見て、その気持ちは読めなかったが、ラツは声を取り成すように言う。

「精霊と人間との関係をどうするかは、イリーサだけの問題じゃないですから、ここで今イリーサに迫らなくても……」

「わたし実はお前みたいなのが、もつと嫌い」。力がなくせしてボカボカ受け入れ領域がある人間がさ」

「え、僕ッ？」

突然声の矛先がラツへと向けられた。

「そ。力を持った以上、そのうち絶対に使うんだ。なのに訓練してないもんだから、力が暴走して大抵ろくな事にならなかったね。下手したらお前も世界ごと消えちゃうんじゃないかな」

「……」

消えるという言葉に具体的にはピンと来なかったが、ラツはその不安な響きにゾツとした。

「変な事言っただけ！ オレがラツを消すもんかッ！」

「いや、坊ちゃんには何も言うつもりなかったけど、やっぱり言っちゃおう。精霊は自然から力を補充出来るけど、坊ちゃんには無理な話だよ」。

何かしら力を使っちゃったら、そいつが主人な以上、誰かから力をもらうしかない。そいつだって誰かに力の補充を頼むのが、いずれ面倒になるんじゃない？ 坊ちゃんの事を鬱陶しく思うかもね」

「ラツはそんな事ない……」

「かといって主人の望みなしに力を使っても、暴走だしね。地のやつも主人を介さずに力を使って、私一人を閉じ込めるのにこんな仰々しい岩山にしてさ。ただでさえ坊ちゃんの力って、グチャグチャだし。今のままじゃ、どう転んでも暴走だし」

「……」

岩からの声は、イリーサ、ティズ、ラツを沈黙させた。

考えざる得ない事を突き付けられたからだ。

「あゝあ、結局アイちゃんに答えをあげちゃったよ。ちえ。でも言いたい事言えてスッキリした。も。寝よ。つと」

ちつともスッキリしていない苛々とした様子なのに、岩の声は四人との話の終わりを宣言した。

「先生、一番知りたかった事がもう一つあります。もう何度も聞いていますが、先生はいつここから出るんですか？ 風は地を風化させる。目覚めて随分と経つはずです。私の小刀にも退魔の力をくれた。本当はもう出られますよね」

「……アイちゃんはほんとに賢いなあ」

本当に寝てしまったとは思えないが、それっきり声はしなかった。話し掛けるのを諦めたアイはそれぞれ考え込んでいる三人に、岩山から離れようと促す。

「……何も反論しなくて、すまない。珍しく色々ばかさに話していたから、主観を入れずに聞こうとしていた」

「……いやはや、厳しい先生だった」

もうアイの先生が岩の神様ではないと分かっている。

岩、つまり地が留める壁となるのは風だ。

歩きながら、ラツはアイに答える。

「先生は風の精霊、なのか。フェシーとリマを火と水の親玉って言うってたけど、そんな口が利けるって事は、ひよつとして風の親玉？ 女王とか王って言葉の方がいいかなあ」

そうすると、サンフォは女王様二人の主人になる。

いや女王や精霊の力云々を差し引いたって、両手に美女は非常に羨ましい図なのだが、ちらりラツの脳裏に不安が浮かんだ。

サンフォは魔物を従える為の力が欲しいと言っていた。

けれどフェシーとリマは従えるのではなく、倒す為に力を与えないはずだ。

人間の主人と精霊の間に齟齬があつた場合、精霊はその人間から離れるのではないか？

神霊山でサンフォはティズを強制的に従えろとも言っていたが、それが火と水の精霊の女王二人に通用するのだろうか？

「先生も否定しなかったから、そうだろう」

「火と水は眠り、風は地に閉じ込められていた。昔、何があつたのかな？ それに先生……って僕まで性懲りもなく呼んじゃうけど、何か悪さして封じられたとは思えない。それに世界ごと消えるって言つてたなあ。意味なく人間を嫌つてるわけじゃなさそうだし」

ラツは口に出しながら、滅んだ古代文明を考えた。

きっと人間と精霊両方に一大事が起きたに違いない。

「……ラツは消えると言われた後でも、先生の事も考えてくれるんだな」

「うーん、いや。うーん、何でかなあ。心に厳しかったけど、声だけで、面と向かつて言われたわけじゃないからかな。先生に対して何も思わなかったわけじゃないんだけど、怒ったわけでもないし。

元々気になつてた事を突き付けられて、更に問題押し付けられて、知るもんかつて完全拒否したいんだけど、気になつて結局考えちゃうんだよ。……アイはえらく先生に好かれてるよな」

自分が嫌われている相手から好かれているわけだから、余計にいいなあとラツは思つたのだが、アイは照れるのではなく悔しそうな表情を浮かべる。

「受け入れ領域と先生はさっき言っていたが、私にはそれが無いらしい。けれど始めて里を出る時、外は物騒だからね」と小刀に力をもたらつたのを見て思つた。精霊の力は物に宿る事も出来るんだと。

だからこんな小刀ではなく、先生が宿れる事が出来る広い領域を持つ物を見つけない。それを目の前に突き付ければ、今度こそ先生も根負けして、あの岩山から出る気になってくれるんじゃないかと」「それってやっぱり遺跡にあるんだろか？」

アイは頷く。

「たぶん。岩山から引つ張り出せてしまえば、きっと先生は今まで閉じ籠っていたのも忘れて、風になって飛んで行く。私は先生に自由でいて欲しい。……岩山にいるのは先生の自由だから、所詮は私の自己満足でしかないのだろう。結局そこを出ると言うだけじゃなく、私が何か行動したいだけだ」

それを聞いてラツは驚いた。

「自由について……岩山から出てきた先生と、ずっと一緒にいたいとは思わないのか？ 例えば主人になるとかさ、力も手に入るわけだし」

「ラツだって、ティズに対してそうだろう」

ラツがティズに対して思っているように、アイも先生に対して、自由に生きてほしいと願っている。

「ホント、アイはしっかりしてるなあ。僕がアイくらいの時なんか、退魔術でキヤーキヤー言われたいと思ってたけど」

「そうなのか？ そんなラツって想像出来ないな」

「そうなんですよう、アイさん」

同じ願いを持つ者同士、連帯感が芽生えたような気がして、アイとラツは笑みを交わした。

「……いつの間にやら仲良くなっていますか？ ラツはワタクシが先に目を付けたんですわよ、アイ」

オイオイ、九歳の子供の科白じゃないだろそれってと、突っ込みたくなるイリーサの声が背後から忍び寄り、そしてティズも言い募る。

「ラツはオレのだって言ってたろッ」

たぶん先生に対して言われた事を、考えに耽っていたのだろうイ

リーサとティズが口々に言い出した。

「ただの自我のくせに図々しいですわねッ。誰があなたの者のですってッ！」

「少なくとも、どっかのムカツク女なんかのじゃねーよッッ」

「まあまあ二人ともッ」

そんないつも通りの応酬が始まり、それを宥めようとして……でもそれは表面上だけだった。

口喧嘩が過ぎ去ると、イリーサが言い出す。

「……ワタクシ、精霊の事を直接上に報告したいので、一度カミッシュへ戻りますわ。精霊について気持ちの整理もしたいです」

「そっか、イリーサがそうしたいなら、それが一番なんだろうな」
正直寂しかったが、ラツはそう答えるしかない。

「アイともどうするか、ちゃんと考えますわね」

「良い返事を待ってる。私がカミッシュまで送って行くから」

「うーん、じゃあどうしようかなあ。……ガイラ河を下って、海にでも出てみるか。ティズはどう思う？」

「ラツがそうしたいなら、それが一番ッ。よっしゃあッ。これでやーっと念願の二人旅だッ！」

ラツがイリーサに言った言葉を真似してから、嬉しそうにティズが答えた。

それでまたイリーサとの間に一悶着勃発する。

ラツはアイが先生の為に物を探しているように、ティズに為に一体何が出来るだろうかと考え始めたのだった。

願い

先生の所から帰って来て、明るいうちにクエニへ戻るのは難しそうだったので、その晩はアイの家に一泊させてもらう事になった。

里はまだ明るかったが、一族の人間ではないし、アイと一緒になければ好き勝手に出歩くのが憚られ、家の中に籠ってしまった。

四人とも口数が減り、静かな時が過ぎて行く。

そして夜、ティズと二人だけになってからラツは一つお願いをした。

「一回、ティズの力を見てみたいんだけどいいかな？」

「ラツが望むんならいくらでもッ」

嬉しそうにティズが近寄って来るが、主人になって力をふるう為ではない。

ちゃんと誤解のないように伝えなくてはと、口を開く。

「先生は僕がいずれティズの力を使い暴走すると言っていた。主人なしに力を使っても暴走すると」

「……うん」

途端にティズの表情が曇った。

「このままティズと一緒にいれば、力を暴走させてみんなに迷惑をかけてしまう。それぐらいなら、ティズから離れた方がいいんじゃないかって」

「……」

やっぱりティズも先生に言われていた事を考え、帰ってから無口だったらしい。

「力は訓練していないと、ろくな事にならないと先生は言った。だとすれば訓練すれば、暴走しないという事だと思っんだ」

ラツの言葉に、びっくりした様子でティズが見つめてくる。

「僕は力がなくてティズの力の見極めも出来ない。けど何かしたいと思う。ティズ、力を貸してくれないかな？」

「うん！ 何でもする！ オレはラツと離れたくない！」

どうやらティズも乗り気みたいだ。

ベットの端に並んで座って、少しでも見えるように願ってティズと手を繋ぐ。

「僕は僕の中にあるティズの力が見たい」

繰り返し繰り返して呟いて、集中出来るように目を閉じた。

視界を閉じると、始めはただの暗闇があるだけだった。

神官学校で習ったように、呼吸を整える。

極力静かに一つの願いに意識を集中させる。

全ては見えなければ、始まらない。

ラツの強い願いがティズを通して反映し、そして学生の時にはまるでなかった力を、確かにラツは自分の内側に感じた……。

目がチカチカした。

神霊山で始めて見た時のティズの姿よりもずっと強烈で、混ざり合ってうねる力。

混ざっているはずなのに一色にはならず、一瞬視界から消えたとしても別の場所でまた浮かぶ。

一つの力なのに、個々としている。

それを見て、ラツはカミツシユの神官学校や売店を思い出した。

昼食後の教室での気だるい時間、ぼんやりと先生の話を聞いている一応ノートも取っているような。

また逆に神殿の売店でとてもお客が賑わっている時間、口や体を忙しなく動かしている時のような。

自分がほとんどなくて、まるで教室や売店の一部と化してしまっているふとした瞬間。

確かに自分はちゃんと存在しているのに、自分の存在が薄まる。

急に全神経が警報を発し、意識が力に飲み込まれ掛けているのをラツは感じた。

消える、という先生の言葉が浮かび、このままではマズイと力を拒絶しかけて、踏み止まる。

この力はティズのもので、拒んでラツの意識がティズから離れるだけならいいが、もしかするとティズが存在が消えてしまうかも知れない。

逆に力が暴走して、この部屋を中心に家や村までにおよび、被害を与えてしまう可能性だってある。

……大丈夫、まだ理性が残っている。

冷静に考えられる自分がいる、とラツは懸命に自分に言い聞かせる。

確かにまるで教室や売店と一塊りになってしまったようだという感覚を覚えた事があるけれど、逆にこれまで自分の居場所なんてないという、孤独感だって多々覚えた。

きつと集中する事で一時自分という存在を意識しなくなった気分の問題だから、ティズの力が自分を飲み込もうとしているのではなく、そう勝手に自分が感じてしまっているのだと、ラツは力と自分とを客観的に見ようとする。

「……ラツッ、ラツってばッッ？」

そしてラツの様子がおかしいと感じたのだろう、ティズの声。

それが決定打になって、ラツは繋がっている手と、早鐘を打つ鼓動と恐怖でジンジン痺れたようになっていいる全身を意識した。

目を開いて、ティズの事を見る事も出来た。

その本当にちよつとした動きが出来る事に安心したものの、恐怖は消えてくれず、完全にラツは心細くなつてティズをぎゅうつと引き寄せる。

「ごめん、ティズ。しばらく……」

「そんなのいくらだっていいけどッ、ホントに大丈夫かよ、ラツッ？」

「力に飲まれ掛けてた。もう大丈夫なんだけど、そのはずなのに、まだ自分がなくなりそうで怖いんだ……ごめん」

ただ見ようとしただけで、この有様。

情けないと思ったが、どうしようもない。

とてもティズの主人には、いやどんな精霊の主人にもなれそうにないと、ラツは今まさに体感させられた。

ティズの力はラツが簡単にどうこうしていい物ではない、驕るなと突き付けられたような……。

でも万が一の万が一、ラツがティズの力を使う事になった時、ティズの力が未知のモノでなくなっていれば、焦って暴走させてしまう確率がきつと低くなるはずだ。

ティズの力を見て、とてつもない野望に感じるが、もし可能ならば先生がグチャグチャだと表した力を整頓したいとラツは思う。

大元は神霊山の結界を作る力だったとしても、数えきれないほどの術具の力の集まりなのだ。

例えば覆う様な網、重たく阻む壁、押し返す槌、落ちて来る鋭い罨、強烈な目暗まし、そんな色々なイメージが重なっているのだろう。

一つ一つ解きほぐすのは無理でも、同系の種類に分けさえ出来ればいい。

ティズの本当の主人だって、グチャグチャより整理してある方がティズの力を扱いやすいだろうし、グチャグチャが好みならまた混ぜてくれればいいだけの話だ。

それに自分の中にあるティズの力を扱うのが無理でも、力を理由にこうして心底心配してくれているティズを遠ざけたくはない。

それだけは明確で、だからこうして抱きしめてもらわれるのだと、ラツは気持ちを落ち着かせながら感じた。

呼び出し

四人は再び一緒にガイラ河まで出て、それから二方向に分かれる事になっていた。

ところがいざクエニに着いてみると、イリーサ宛にタサクの神官から伝言があり、それは神殿に寄ってほしいという内容だった。

タサクの神官が用があるのはイリーサだけだろうが、気になったラツとティズも海へ出ずに、付いて行く事にする。

「ワタクシに王都神殿へ来いと……？」

そこで告げられた神殿の名前にイリーサだけではなく、四人全員が訝しんだ。

「はい。巫女姫が御懸念された通り、我がエイラル王国を始め、近くの国交ある国々、全ての国に精霊が現れているでしょう。そんな折に巫女姫からの回覧を読み、長自らもしくはそれに連なる方々が巫女姫から直に対話をと」

「……」

直に……と言われても、回覧して、カミツシュに報告した以上の事は何もない。

イリーサだって、どうせ上に報告しなくてはならないなら、慣れた場所そして親しんでいるお偉方への方がいいから、一度カミツシュへ戻ると言ったのだろうし……。

「ラツ、ワタクシの代わりに行っていただけませんか？」

「ええええッ！……って。ごめん、思わず言っちゃったけど、そんなに嫌なのかイリーサ？」

確かにエイラル王国における神殿の超ド級お偉方を目の前にすると、ラツなら固まって頭も口も回らない気がする。

しかし、超が付いても付かなくても、お偉方の指示は断れるものではない。

それなのにラツに代わりを依頼するほど嫌がるなんて、ラツはイ

リーサが心配になる。

「王都神殿へ行くのが嫌、というわけではありませんわ。ただワタクシ……」

口籠ったイリーサが続ける前に、慌てた調子でタサクの神官が内容を付け足す。

「言い忘れておりました。神霊山の術具の自我様とラツ神官も一緒に、という話です。ご同行されてはいかがでしょう？」

「あの、ティズと僕まで召喚ですか？」

「そのように伺っておりますが」

「そうですか……」

雲行きが怪しくなってきたなあ。

精霊の話だけではなく、何か楽しくない話をされるのではないかな……そんな気がした。

「……先程のはほんのわがままですわ。ワタクシ、王都へ参ります」仕方なく、どうしようもないから諦めた、という口調でイリーサは言った。

王都神殿に行きたがらない様子を見てしまうと、どうしても気になって、ラツはタサク神殿から船着き場までの道すがら、イリーサに尋ねる。

「アイの先生に言われた事を気にしてるのか、イリーサ？ あの時も言っただけど、人間と精霊の関係を一人で考え込まなくてもいいと思うぞ」

てつきりこの事を悩んでいるのだろうと思っていたのだが、イリーサから否定が返される。

「……いいえ、違います」

「違う？」

「だってワタクシ、その自我もですけど、精霊がラツに近づいて欲しくないだけですから。精霊が生まれるのを止められないのは、分かっていますわ。でも別にこちらから望んだわけじゃありませんのに次から次へと現れて、精霊に腹が立つんですの」

「近づいて欲しくないって……う、うゝん」

どう答えればいいものやら頭を捻るラツに、イリーサが怒ったように続ける。

「……正直にお話ししますわね。ただでさえ自我や精霊がラツの側にいるのが嫌なのに、もともと困難な状態で、ワタクシと一緒に逃げ場もなければ、ラツだってその自我や近くにいた精霊の力を求めるでしょう。」

それも嫌なんです。周りの力を借りて助け合って切り抜けられないのに、ワタクシが一人で守りきってこそそのラツだと……。そう考えていました」

自我でも精霊でも、ラツの側にいつも誰かがいるなんてイリーサは嫌だった。

自分以外の力には守られて欲しくない。

自分が自由に自然の力を摂取し、発現さえ出来れば、精霊の存在など目障りなだけだ。

ラツは自分を守るのだから、力なんて持たなくていい。

そして力のないまま、ずっと力ある自分を頼みにしてくれればいいとイリーサは思ってしまった。

だから本当はラツから頼まれた時、精霊の存在をイリーサは回覧などしたくなかった。

ガイラ河の精霊のように、ラツの側にいる事を求め、更に力を与えるかも知れない精霊など、これ以上は生まれて来なくていい。

広くその存在を認知されずに恐れられて、人間に近寄らないようになればいい。

身勝手な考えだと分かっているから、イリーサの理性は当然のように自己嫌悪を抱く。

ようやくラツはイリーサが怒っているのはティズや精霊にはなく、もちろんラツにでもなく、精霊を疎む自分に対してなのだと気が付いた。

「はつきり言って大っ嫌いな存在の事を話す為に、王都まで行くの

が煩わしい」

腹が立つ、嫌だ、嫌いだ、煩わしいと散々言っけれど、イリーサはつまり……。

「イリーサって、男前だなあ」

ラツはしみじみ呟いた。

「……男前？」

「オレの獲物だ、勝手に手え出すんじゃない。てめーら、黙ってオレに付いて来いッ！って事だろ、それって。カッコイイなッ」

「……」

これまで愛らしい美少女だという外見の形容はされた事があつたが、性格が男だと言われたのはもちろん初めてである。

しかも性格が男だと言つて来たのがラツだった為、イリーサは何気にシヨックを受け、そして一気に噴火した。

「ワタクシ、男なんかではありませんわッ！」

そして勢いよく、ガイラ河を目指して一人でダカダカ歩いて行ってしまう。

「あ、イリーサッ？ あれえ？ 姉御の方が良かったかな？」

イリーサを怒らせたのに気がつくが、既に後の祭りだ。

ラツとしては褒めたつもりだったのだが、失敗したらしい。

でももし自分にイリーサのような気概があれば、ティズの力に飲み込まれそうになつたりしないだろうにと、ラツはしみじみ感じる。

「あんなムカツク女ほっとけ」

そうティズは素っ気なく。

「ラツは女心を勉強した方がいいな」

と、アイには呆れられてしまう。

「うーん、アイならどう言う……？」

「例えば。どんな力を手に入れようとも、イリーサの存在は特別だ。いつまでもどんな時でも、心から頼りにしているのはイリーサだけだ……とはどうだろう？」

「うーん。アイも男前だなあ」

悩みもせず、アイはサラツと言っちゃってくれたが、それこそよっぱど緊迫状態でもない限り、ラツにはとても言えなさそうな言葉だ。

それにしてもアイがこの調子でイリーサを口説いたなら、二人がお互いを相棒として遺跡探しに行くのは間違いない気もした。

たまにでいいから、混ぜてもらって色々な国へ行きたいなあ。

イリーサとアイの旅に付いて行くのを想像しただけで、ラツは楽しい気分になれた。

王都神殿

王都がある海岸線にはずらりと漁業と商いの家屋が並び、王城は一段高くて海からやや奥まった場所に構えられている。

王城の近くにあつても良さそうな王都神殿の方は、海からすぐの小山に建っていた。

元々小山の頂上に豊漁と航海の安全を祈る海の神の社があり、山全体に増築を重ねに重ねたのが王都神殿らしい。

王都までは陸路でも良かったが、ガイラ河を下って海へ出て、その後も海岸沿いに船で進んで行く事になった。

四人の中で精霊に関する知識を一番持っているのはアイだから、王都神殿へも付いて来て欲しいと頼み、タサクからそのまま向かう事になった。

とはいえ、タサクから王都まではかなり距離がある。

海は川のように対岸が見えず、それはもう広くて果てしなく、波に陽光が反射してキラキラと美しい。

見たいと思っていた海に来て、ラツは最大級に喜んでいたが、超お偉方と会つと決まっている王都神殿へ到着した今、完全に気分は低空飛行だ。

王都神殿前の船着き場で船から降りて、神殿に向かって小山を上る。

傾斜は急ではなく、しかもきちんと掃き清められており、苦にはならなかった。

四人は王都神殿の表ではなく、裏方へと向かい、そこでアイとイリーサ、そしてティズとラツでまず別々の場所に通された。

王都神殿で男女の区別で分けられるという話は聞いた事がないので、アイとイリーサは精霊の話を超お偉方の前でするのだろう。

まずティズとラツは部屋に通され、軽食が運ばれて来た。

軽食に手を付ける気にならず、出された飲み物だけ緊張しつつ飲

んでいると、高位らしい王都神殿のお偉方二人が部屋に現れた。

そのお偉方の一人がティズに向かって言ってくる。

「神霊山の子よ、貴方はこちらへ」

「何でだよ？」

ティズがつっけんどんに答えた。

その態度がラツには羨ましい。

「貴方は早々に真の主人を見つけなくてはならない」

どうやら王都神殿にいる有力株と、ティズの顔合わせをしたいらしい。

単刀直入でとても分かりやすいのだが、決め付けられて強制されると腹が立つものだ。

けれど本当の事なので、ラツもティズを送り出す為の言葉を添える。

「行つといで、ティズ」

「……分かった、行ってくる」

思いつ切り行きたくなさ気にじとじとティズから見られたが、ラツに嫌なら止めておけば……と言えるはずもない。

それがお偉方の前なら尚更だ。

でも内心、あのお偉方が揃えた神官じゃ、ティズは余計に選び直そうとはしないんじゃないかと、意地の悪い事を考えながら見送る。部屋にお偉方と二人残され、ラツの緊張度は一気に高まった。

「さて、ラツ神官」

その固く重たい声音で、これから始まる話が世間話や楽しいものではなく、説教が来るとラツは察して、何か悪い事をやらかしたっけかと、ますます身を委縮させる。

「ラツ神官はあの神霊山の子の仮の主人でしかない。いやそもそも主人と呼ぶ事が間違いだ。ただ神霊山で、サンフォ神官から預かっただけと言つべきか……」

「あの……」

お偉方に気になっていた事を出されて、思わずラツは口を挟んだ。

「サンフォはまだ神殿に属しているのでしょうか？」

「もちろんだ。彼は神官として、火と水の精霊の主人となった。神霊山の子の元来の主人もサンフォ神官なのだろう。もしかたサンフォ神官と会う機会に恵まれたならば、一度こちらへ戻るように諭してもらいたい」

「……」

精霊の女王二人の主人となったサンフォの事を神殿側としては留めておきたいのだろう。

まだサンフォは神霊山で言っていたように、魔物を従えてはいないから。

だが、もしサンフォが実際に魔物を従え行動を起こした時、サンフォは既に神殿から出奔した身だと答えるのが目に見えるようだ。

「ラツ神官。精霊の件でタサクへ使いを出した時、バウタ王国へ渡っていたそうだが。神霊山の子は神霊山を守り、引いては王国を守ってもらわねばならず、それゆえ他国の者を主人に選ばれては困る。極力神殿に寄り、神霊山の子と力ある神官を対面させる。それがラツ神官の仕事だ。カミツシュで何を言われたか知らないが、遊びではない」

「はい」

ラツは短く答えた。

分かりました、と頷く事は出来なかった。

本当は嫌だと言ってしまいたかった。

お偉方を前にしている緊張は消えて、ラツは内心怒っていた。

情けない事に、その怒りを表には出せなかったけれども。

ティズの外見は幼児で、ラツもついつい子供扱いしてしまうのが駄々を捏ねたりしないし、姿よりもずっと気を遣っている。

それは主にラツに対してだけに見えるが、きっと神殿とそれから王国に対しても気を遣っていて、神霊山の結界である自分を誰よりもティズは承知しているはずだ。

始めあんなに神霊山から離れるのを不安がったのだから。

だから神殿巡りをして力ある神官に会い、主人を決める範囲を、エイラル王国内に制限しなくたっていいのではないかとラツは思う。緊張が解けて、神殿の身勝手な希望に内心腹を立て始めると、他の事に対しても自分が怒っていて、そしてその怒る理由が自分の感情なのに定まらず、ラツはムカムカともどかしくなった。

とにかくお偉方の話の要点はこれで終わりだろうし、このままムカつくお偉方の顔は見えていたくない。

もちろんこれ以上説教を続けられるのは嫌だ。

「……ティズとこちらの神官との対面、まだ時間が掛かりそうだと思うので、伝承部へ行って来て構わないでしょうか？　ここでただ待つのも暇ですし、そこに神官学校の級友がいて、サンフォの件で手紙をもらいまして、仕事の合間にも直接話を聞いておきたいのですが」

サンフォが王都神殿からいなくなった時に手紙をくれた級友、メイニ。

メイニは王都とカミツシュで場所は違うが、ラツと同じ伝承部で記述課に勤めている。

同期でカミツシュから王都神殿へ行ったのは、サンフォとメイニしかない。

「サンフォ神官の件で、か……。級友相手なら、何か思い出す事もあるかも知れないな。部署の方では落ち着いて話も出来ないだろう。呼んで来るので、ここで待っていなさい」

「分かりました」

やっとお偉方が部屋を出て行って、その足音が完全に聞こえなくなっってから、ラツは思いつ切り大きなため息を吐いた。

運ばれて来たはいいが、あまり食べる気になれずに放置していた軽食にラツは手を伸ばしてみる。

だが一口食べて結局またため息が出て、浮かない気分は変わらなかった。

暇つぶしに椅子にもたれて天井を仰ぎ見たり、必要以上にきよ

きよると部屋を歩き回ったりしていると、足音が聞こえて来て、ラツは慌てて座り直す。

「ごめんな、仕事中に」

入って来たのはメイニ一人だったので、ラツはホッとした。

「何か肩こってないか？ 大変そうだなあ、職場」

神官学校の勉強において、例えばラツがコツコツで試験前には詰め込みしているならば、メイニは一度聞いた重要な事は忘れず、それを応用出来る。

まさに一を聞いて十を知り、試験などどこ吹く風だったから、きっとそれを仕事でも生かしているはず。

そんなメイニの事だから、たぶん仕事内容が大変というより、職場環境の方で緊張しているのだろう。

ラツは卒業時よりも雰囲気が出なくなったようなメイニの強張った両肩をポンポンと叩いた。

そして、

「あ、ごめんッ」

パツとラツは手を離し、謝る。

「今のはヤラシイ気持で触ったわけじゃないからッ。下心なし！
なのでッ」

途端にメイニがプツと吹き出し、笑い出す。

「分かっているって、そんな唾飛ばして捲くし立てなくても、おっかしーッ」

「アツサリ頷かれるのも男として複雑なんですが……」

「そっかそっか。でもラツだしな」

「あの……」

メイニはひとしきり笑って、そして涙ぐんだと思ったら、本格的に泣き出した。

ラツは驚くやら焦るやら、かなり迷ったのだが何と言葉を掛ければいいのかさっぱり分からず、恐る恐るメイニの頭を撫でていた。
「……。……良かった、ラツが変わってなくて」

しばらくして涙が止まり、しゃくり上げたりもしない声でメイニが言った。

「あーもう、どーせ僕だし。褒め言葉として受け取っておくよ」

そうおどけて見せれば、メイニが小さく笑う。

どうやら涙の嵐は去ったらしいと、ラツは安堵した。

「サンフォがいなくなっただって、手紙出したでしょ？ それでラツがカミツシュからすす飛んで来るかなあと思ってたのに、違ってて意外だったけど、私にとっては今の時にラツが来てくれてちょうど良かった」

「飛んでって、サンフォと僕、そんなべったりじゃなかったと思うけど」

「でもサンフォもラツにだったら、何か言ってから出て行った気がするな。……手紙にも書いたけど私さ、サンフォがいなくなっただけで、分からないんだよね。いなくなっただって、同郷のよしみで何か知らないかって聞かれて、ようやく知ったくらいで。こっち来てから、一回も会ってないし」

「カミツシュに居残ってる連中ともそんなもんだよ。王都神殿は見るからに広いし、偶然ばったりもないだろうしな。せつかく王都神殿に来たわけだし、メイニと会いたいなあとサンフォの事をダシに使っただけだから。そこは気にしないでOK」

「そう？」

「全っ然問題なし」

「言葉だけ聞いていると、これって口説かれてる？ って思っちゃいそうだけど。言ってるのがラツじゃな」

「……あの」

またメイニはアハハと笑って、そして涙の訳を教えてください。

「カミツシュでは神殿以外でも力のある人がチラホラいたでしょ。

強い力を持つ人がいれば、それって力なの？ それとも勘？ みたいなので」

「だなあ」

「でも王都は違う。神殿には力の強い神官ばかりが集められて、それもカミッシュと違って、結界のような守護の力ではなくて、破魔の攻撃的な力を持つてる。だからなのかな、カミッシュにいた時より力のない事が不安になる。」

王都神殿では力の有無と、それから強弱が全てで、力ある神官に抑え付けられて、仕えてるって感じがする。あるわけないのに、そこから中に力ある神官の目や耳があるんじゃないかって」

「……」

「でもあれだよ。王都神殿の神官が、何の権力もコネもない、私みたいな新人に力を使うなんて勿体ない事しないよね。冷静に考えたら、そのはずなんだけど」

メイニはそう付け加えたが、そんな風に感じてしまう何かがあるのだろう。

そしてラツはそんなメイニの話を聞いて、どうして自分がお偉方の話であんなに腹が立ったのか分かった。

エイラル国中の神殿を巡るようにと、お偉方に行動範囲を制限されたような気がして……というだけじゃなくて、ティズが力としてしか扱われていないからだ。

確かにアイとイリーサとティズとの四人旅は、遊び気分が多いけれど、それを指摘されたからではなく、ティズがその力以外を必要とされていない感じがして嫌だった。

神霊山の子……イリーサと違って、ティズに対する呼び方は丁寧だし、扱いも丁寧だ。

きつとイリーサのように言い合ったりしない。

それが大人の分別ある行動と言えそうなのだろう。

そして本当にティズの力が必要になった時、何の躊躇もなく使うのだろう。

例えばティズが消えてしまうくらいの力が必要でも、イリーサだったら葛藤し、悩むだろう事なく。

そんな気がして、王都神殿の力ある神官がティズを力としか見て

いないのなら、いや王都神殿に限らず、ティズをティズとして見ていないそんな相手をティズに主人として選んで欲しくない。

どうせ何も出来やしない、むしろお偉方が決めた事以外は何もしてくるなと何も期待されていないオマケだけれど、ティズを渡したくないなあとラツは思う。

湧いて出た反骨精神まではいかないが、やっぱりティズには幸せになってほしいとラツは思った。

そんな時、物凄い速さで走って来る音が聞こえて、メイニとラツは顔を見合せ、扉の方を見た。

猛然と開かれたそこに立っていたのはティズだった。

メイニの事をちら見して、思いつきりぶーたれた声でティズは言う。

「誰だよ、その女ー？」

「誰って、その女って……ティズ。失礼な言い方するなよ。こちら、神官学校の同期で、メイニさんです」

「で？ 二人だけで何の話してんだよ？」

「旧交を温めて……とはちょっと違う気もするけど、そんな感じ」

「ふーん。でもさ……」

「や、これはその。まあ確かにメイニは泣いてたけど、何も疾しい話はしてないし、僕が泣かせたわけじゃ……」

「へえ」

「ほんとに違うつて！ 何だティズ、その目は」

ティズとラツのやり取りを聞いていた、まだ涙の跡の見えるメイニが大笑いし始める。

「噂は聞いているわ。ティズ君でしょ。メイニよ、よろしくね」

「……。……よろしく」

メイニに手を出されて、しゅしゅティズが握手を返した。

「ほんつとにラツに似てるね」

「だろ？ 僕も自分の子供の頃にそっくりなんだろうなあと思うよ」

「でしようねえ」

うんうんと、メイニが納得している。

「ティズ君、いい事教えてあげようか」

「いい事？」

「あのねアヤシクなつて思う人がいたら、僕のパパに近づくなんて言つて、追つ払うといいよ」

「ちよつ、メイニ。何を吹き込んでるんだよ。年齢がいくら何でも厳しいだろ」

「大丈夫。童顔の父親で通るつて」

うふふくとメイニは悪戯っぽい笑いを浮かべる。

泣かれるより笑つてくれている方が断然嬉しいのだが、ラツは何やら複雑な心境だ。

このままメイニとティズと一緒にさせると、更にまずい事を吹き込まれそうである。

「……ところでティズはメイニの事で走つて来たのか、わざわざ？」

「えーと、うんそう……分かつてるよ、ちゃんと行くよ……戻るつてば」

そしてティズは来た時と同じように走り去つていった。

「すごい好かれてるんだ、ラツ」

「まあねー。でもこのままも困る。だけどティズが本当の主人を見つけた時には絶対相手に何かしら文句付けるぞ、僕。矛盾してるよな」

「それつて花嫁の父の心境でしょ、やつぱりお父さんだよ」

「本物のお父さんはサンフォなんだけど」

「そうなの？」

「ティズは、サンフォが生みの親だからなあ」

「……噂は本当だったのねえ」

「そついや、サンフォの事だけど、僕はサンフォと力が欲しいか云々で喧嘩になつてるんだよ。メイニは手紙で僕がすつ飛んで来ると思つてたつて言つてたけど、むしろティズと神靈山での事がなきや、こんなに奴を気にしなかつたし」

「えゝそうなんだ？　そうかな？　でももしラツが王都神殿にいたら、サンフォは出て行かなかったよ」

「それこそそうかな？　だ」

メイニは断定しているが、その意見には頷きかねる。

「メイニ、頼みがあるんだけど」

「なあに？」

「メイニの職場に僕が行ってもいいかな？　自我はティズが初めてらしいけど、術具に別の術具に残されてた力を集められるのかとか、遺跡に精霊がいた事例はあるのかとか、中央の見聞課にある資料を見せてもらえたら嬉しいんだけど」

「大忙しだね、ラツ」

「うーん。ティズの顔合わせが終わるまで暇だし、かといって王都見学って気分でもないし」

昔々に何があったのか、そしてこれからの人間と精霊の関係もあるしなあ。

きっと目覚めた精霊の王達は昔の事を知っているのだとラツは思う。

でも火と水の女王様二人はサンフォと行方不明。

風の王様は引き籠っていて、ラツには答えてくれないに違いないと苦笑いを浮かべて見せた。

日中は離れ離れたが、子供の外見のせいか夜はティズとラツで同部屋だった。

ティズの力を見るのはもうしばらくこりごりのはずだったのだが、ラツは腹を括って頼んだ。

「ティズ、もう一度見せてほしいんだけど」

「え、でも……」

ティズに思いつきり心配そうな顔をされる。

「今度は飲まれないように遠くの景色を眺めるような感覚で、頑張ってみるから。僕が変だと思ったら、また名前を呼ぶなり、叩くなりしてくれ」

言うだけは簡単だった。

結局ラツは何度も冷や汗を流す経験を実感した。

仲直り

さすがは王都神殿というべきか、見聞課にある資料は膨大だった。術具に残された力を集めるのはともかく、神官同士が力を合わせる事は今も行われており、遺跡も精霊も昔話や童話に使われている。メイニがここにあると教えてくれるので探す手間が省けているのだが、その一例全てや一話一話を読むのに一体どれくらい掛かるのか、見当もつかない。

教えてくれるメイニには悪いし、王都神殿でティズと神官との対面は一日では終わりそうになく、終わるのを待っている間、資料を漁る事が今出来る唯一の事だと分かっているのに、今一つラツは熱心に漁り捲ろうという気が起きなかった。

資料のあまりの膨大さに、面倒くさくなってきたのも確かだし、読み終えたとしても、知識にはなるが、果たして何かの役に立てるのか、という疑問までラツの中で湧いてきてしまっている。

何でもかんでも読み込もうとして、頭が疲れてしまったのかも知れないと、ラツは神殿内の庭へ散歩に出る事にした。

中にいると増改築の跡が分かるのだが、外からは一見王都神殿は一つの建物のように見える。

たぶんこれからティズとの対面を控えているか、もう済ませた神官達からだろう、時折かなり居心地の悪い視線や言葉が聞こえて来て、王都神殿内はラツにとってかなり居辛い場所になっていた。

イリーサの名前がカミツシュよりも轟いていない分、居心地の悪さは長引きそうだ。

すでにイリーサとアイは、王都から召喚を受ける前の予定通り、カミツシュへ帰ってしまっていた。

初めはエミヒで別れる予定だったし、二人が居ないのは当たり前なのに、ラツは王都神殿に何だか置き去りを食らった気分だった。

アイに問われ、ちゃんと考えてイリーサやティズの側にしようと

自分で決めたのに、今ラツの側にその二人はいない。

元タイリーサとは一日に一度会えば良いという調子だったし、ティズもカミツシュ神殿に慣れてからは少々だけとはいえ、単独行動するようになっていた。

二人の面倒を見た覚えはないし、起きている間中、くつちゃべつていたわけじゃない。

むしろ無言の方が多かった。

四六時中行動を一緒にしていたのは旅の間だけなのに、何だか寂しい。

カミツシュを出てから次から次へと移動を重ねていたが、王都神殿はすでに何日もとどまっている。

しかし日中は周囲に誰かがいるとはいえ、向けられる態度は、まったく友好的ではなく、気分的にほぼ一人で居るのと同じで、ラツは鬱々とした日々を送っていた。

もちろん過去の出来事もこれからの未来も、興味はあるし心配なのだが、ラツの心を占めているのは世界の事よりも、自分と周囲の事だった。

そんな事を考えながら、王都神殿の端にまで辿り着き、ラツは眼下に見える海を眺めながら、ぼんやりしていた。

「ラツ」

「……えっ？」

近づいて来る足音もなく、ふいに背後から声がして、ラツは驚いた。

振り向くと立っているのはティズだったのだが、名前の呼び方の響きや、発している気配も何だかサンフォだったような気がしたからだ。

ドギマギしたまま、ラツは尋ねる。

「あ、ごめん……。ティズ、対面は？ 一時休憩なのか？」

しかしそれには答えず、自分自身の額をとんとんと指したティズに問い返された。

「ラツは力の中を覗いて、どうするんだ？」

「？ 前にも話さなかったっけ？ 万が一の時に暴走しないように、ティズの力を見慣れておこうかなって。ついでに可能なら先生がぐちゃぐちゃって言う力を、少しでも整理整頓出来たらなあと思うけど」

「……これはラツの考えだからと思って、黙って言う通りにしてたみたいけど、お前力ねえし、土台無理だろ」

そんなティズらしからぬ口調で言ってくるのを聞いて、ああやっぱりとラツは思った。

「サンフォだなッ？ ティズはどうなってるんだよ？ ティズをコレとか言うなよ、生みの親のくせに」

「ラツはこのままのコレじゃ嫌なのか？」

「絶対にそんな事ない。嫌なんかじゃ……いやでも、あれ……？」
咄嗟に返して、ラツはハツとした。

なぜティズが変わらなくてはいけないんだろう。

本当のティズの主人が望み、自分から変わりたいとティズが願っているのならまだしも、そうではないのに自分が変えようとするなんて、おこがましい。

余計なお世話だ。

ティズの主人になる誰かには、ティズを自分にとって都合のいい力の引き出し口として見て欲しくないとラツは思っていた。

だから力が整理整頓されていて、扱いやすそうだというだけで、ティズを選んで欲しくない。

例えぐちゃぐちなままでも一緒にいたいなと思ってくれる誰かが、ティズの主人になってくれたらいいと思う。

「今のはティズが僕に言うのを我慢してた言葉なのか？」

「いや、単に力のない奴が無理すんなってだけ。ま、主人の心底からの願いだったら、ホントに作り変わってたかも知れないけどな。ラツのコレに対する願いはそうじゃねーだろ」

「本気で願ってたよッ。だから怖い思いまでして、何度もティズの

力を覗いたんだし。でも、うん。あーもーッ！ 腹立つけど間違ってたのは分かった」

ティズの力を覗かせてもらったわけだが、本当なら目に見えないものを、つまり心をラツは覗かせてもらったわけだ。

丸つきり余計なお世話をしていたラツなんかに。

ティズだけじゃなく、イリーサもサンフォも神殿に、誰かに必要とされている。

自分さえいなければ、ティズも本当の主人をちゃんと見つける。

ラツの存在はティズが本当の主人を見つけるための妨げにしかなくっていい。

ラツの代わりはいくらでもいる。

ティズの力だけではなく、個性とか情緒とか、心を育んでいける人はいくらでもいる。

ティズの本体がラツのどこにあるのか知らないが、きっとラツの余計な考えも伝わってしまったているのに、なぜティズはラツを好きで居続けているのだろうか？

たぶんティズと初めて会話が成立したのはラツであり、親兄弟のような状態だから、一種の刷り込みのような感じもあるに違いない。ラツもティズが好きだからこそ、ついつい余計な事を考えてしまっただけで、神殿のお偉方が望んでいるように、客観的にティズを見れるサンフォの方が主人として相応しいのではないかと思える。

サンフォが主人になればティズもラツに振り回されずに済むし、本当の主人探し対面なんて面倒なものをお偉方からも押し付けられなくなる。

「サンフォがティズの主人になれば、何の問題もないんじゃないか？」

「何で俺が。それこそコレが承知しないだろ。断りはしたけど、ほぼ体は無断借用してるわけだしな」

「無断借用！？ 早くティズに返せよッ」

「コレにかまけるぐらいなら、ちよっとは俺を気にしろよ」

「ティズって呼べよッ！ 主人にならなかつたとしても、サンフォがティズの生みの親には違いないんだから」

「はいはい、ティズね」

サンフォとティズの親子関係の修復を本気で願って力説したラツに対し、適当に頷いたサンフォはアツサリと話題を変えた。

「で？ 答えは？」

何の前置きもなしの問いに、ラツはすぐに返事が出来なかつた。なぜならサンフォを唸らせるような答えが、未だに見つかっていないからだ。

にわかには心臓はバクバク、手には冷や汗、口の中はカラカラ。屋根に出ているサンフォを見つけた過去の自分が呪わしい。

今ラツの頭の中にある答えを言つたとしても、サンフォは絶対に納得しないというのが、見え見えだつた。

言つても仕方ないなら、言わない方がマシ……そんな答えしかラツの脳みそは導き出してくれなかつた。

けれど、言わなければ状況は動かない。

サンフォがいつまでも沈黙合戦に付き合ってくれるとは、とても思えない。

もしかしたら、下手な会話をしているうちに、何か妙案を思い付く事だつて、出来るかも知れないじゃないか……そう気を取り直し、ラツは口を開いた。

「あのさ、サンフォ。答えを聞くなり、そのままじゃーなつて事にもなり兼ねないから、先に言つときたい事があるんだけど……？」

気を取り直したわりに、弱気な発言だとラツは内心自嘲する。けれど自分の出した答えでサンフォを思い止まらせる自信なんてラツには本当にこれっぽちのカケラもなかつたのだ。

「何だよ？」

サンフォはチヨイと眉を寄せ、でもまだ痺れは切れていないらしく、ラツに先を促して来る。

「あのさー、あのだなー、その……とにかく元気そうで何よりッ！

失踪したって聞いて、心配してたんだぞ。僕だけじゃなく、他の同期生も」

「……嘔吐け」

「???」

ところが、途端にサンフォからは不機嫌オーラが発せられてしまい、ラツは困惑した。

「心配してただなんて、嘘だなッ。ラツ……お前、俺の赴任先へ行って詳しく聞き込みするとか、俺の故郷に行ってみたりもしてねえじゃん。お前、カミツシュから動こうともしなかっただろッ？」

一方的に薄情者と決め付けられ、そのサンフォの視線と口調から喧嘩を売られたような気分になったラツは、負けじと言い返す。

「心配してたッ。心配してたけど、サンフォだったら大丈夫に違いないって気がしたんだよッ！」

「何、勝手に決め付けてんだよッ！ 透視能力も予知能力もないお前がッッ」

「力の有り無しは関係ないだろッ！」

「力が欲しいんだろ、ラツ？ 欲しいって言うてみるよッ。こんな力、お前にやるからさッッ」

サンフォから絡まれて、何だか話が大きく脱線しているような気がするのだが、勢い止まらずでラツは唾を飛ばす。

「あゝ欲しいよ、欲しいッ！ ティズの力を使うんじゃなく、サンフォみたいのがさッ！ それをどうやって僕にくれるんだ、サンフォッ？ 出来もしないくせに、グチャグチャ言って来んなっつーのッ！ ギャーギャー、ヒステリー起こしやがってッッ」

「何だとおッッ？」

「ウルセーって、言うてんだッッ！」

あわや本気で殴りや蹴りが出そうになって、傍から見るとティズと喧嘩をしているように見えるとラツは思い直して。

ようやく……。

「ホント。何だよ、も。メチャメチャ元気してるじゃんか、サン

フオ。あの時、屋根の上でラツパ呑みなんか出来るサンフオなら、どこに行っても大丈夫だって。神官の力なんかなくなつたって、その性格で充分世の中渡ってけるって。そのうち、何とか言って姿を見せるに違いないって……僕が思ってた通りじゃんか」

別に口論し始める気なんて、ラツにはなかったのだ。

「力なんかなくなつてもって……俺の事、マジでそう思ってたのか？」
「だってそうだろ？　いくら王都に行きたくないからっていったって、あそこまではしないだろう、普通？　変に、割り切り良過ぎ。それに、世界平和の為に自分が敵役になろうとしたり……そもそもさ、考え付かないってそんな事」

「……」

「言いたい事、言えたし……僕なりの答えだけど。実はエイラジャーが完全無欠じゃないからなんじゃないかと。お偉方には内緒な？　かなり神官失格な答えのような気がするからさ。……でも僕の頭じゃ、この答えが精一杯ってトコです」

サンフオだって誰だって、重々分かつてるんだろうけど、生まれた時から世界があつたように、エイラジャーも聖なる山の伝説もあつて、魔物も存在していた。

サンフオの疑問の正解は長達でも知らないに違いない。

それにサンフオに尋ねられるまで、ラツはそんな事、頭の隅でも首を傾げたりしなかった。

どうやらサンフオとは色々と思考回路が違うらしい。

でも自分以外の人間と、全ての面で考える事が同じなんてありえない。

この出任せのような答えを、サンフオはどんな風に感じただろうかと、ラツは彼の様子をジューツと窺った。

サンフオは口を引き結び、鼻から大きく息を吸い……また怒鳴り合い再開かなあと身構えたラツに吐き捨てて来る。

「あゝもうッ！　お前って、どうせそういう奴だよッ」

「そーゆー……？」

「他人の悩みはいつの間にやら、ただの愚痴に変えてくれるわッ。自分の存在がどうのなんて……自分の悩みは、大勢の前でアツサリ口にしゃがるッ」

「アツサリって……僕、あの時かなりヘコんでたんですけど。なのに、一蹴されてさ。それに、もう同期生全員が家族みたいなもんだっただろ？」

「家族にだって言わねえよ、そんな事。弱音曝したら、弱みを握られた感じで、自分が無防備になった気がする。情けねえカツコ悪いって、思われたくねえし。俺は、俺は……言えなかった。悩んでたのは、世界の平和の為に、魔物が必要なのかも知れないなんて事じゃない」

そつえば愚痴ったり、弱音を吐くサンフォの姿を見るのが始めてだと、ラツは思い当たった。

退魔能力が高い分、危険度数の高い場所へ行かされるに違いないサンフォ自身、不満を抱え込んでいたに違いなかったのに……。

「魔物退治を生き甲斐や快感にはしたくない。世界を救うだなんてご大層だけど、上辺だけな気がする。俺は……一体何の為に力を使う？　そもそも退魔神官になれて決め付けられて。必要とされているのは俺自身じゃなくて、力だけなんじゃないか……？」

退魔術や武術を使えるのは大変名誉な事だ。

それに正義のヒーローにもなれる……でも、そう夢見ているうちが華だった。

神官学校卒業を控え、いざ魔物との実戦を考えるようになり始めると、力のある同期生は、道を一本に絞られてしまった不満を兼ねて、不安を一気に増殖させた。

どこことなく雰囲気ギリギリして、時には何かや誰かに向かって爆発する事もあったし、反対に深く思い悩む同期生もいた。

そのまま放って置く事も多々あったが……明らかにそれが陰湿だったり、行き過ぎだという時。

ラツは退魔術を使う同期の中で、一目置かれていたサンフォと一

緒に仲裁に入ったり、溜め込んでいるものを吐き出させた。

あの時は気づかなかったが、たぶんサンフォも、出会った時のイリーサと似たような心境だったのだ。

やたらと期待されて、自負も高くなっていって、誰にも弱みを見せられない。

サンフォはイリーサよりも、神官としての勉強を積んでいる。

知識があるのはいい事なのだが、その分サンフォの方が思考も多方面に深く広がった。

そして密かに悩み続けて、誰も考えた事もないような事を考え付き、それをラツにも振って来た。

「あのさあ、サンフォ……」

何と言っていいのやら？ 力がなくても悩むし、力があっても悩む……ラツは躊躇いがちに名前を呼んだ。

けれどサンフォの話には先があつたらしい、大袈裟なぐらいのため息を突く。

「ラツ。お前、そう簡単に彼女とか作ったりするなよ」

「はあッ？ 何で？」

話の急展開に、ラツの声は少々裏返ってしまった。

「お前に彼女が出来たら、その女の事はつか中心にして、構ってくれる時間が減るのが目に見えてるから。会いたいつて時に、すぐ来てくれる居てくれるっていう、都合のいい存在でいて欲しい、ラツには。ちなみに……たぶんこう思ってるのは、俺ら同期生一同だからな」

この前メイニが「僕のパパ」と言えとティズに良からぬ事を吹き込んでいたし、今回はサンフォもか！

「あゝのゝなゝ」

ラツにすれば、まさに何だ、それはッ！ である。

もしティズの体でなければ、頭をバシッと叩いていた事だろう。そのサンフォが急に表情を引き締めた。

「ラツ」

「ん？」

「さっき声掛けた時にお前、中身が俺だってすぐに分かっただろ？」

「分かったってほど確信じゃなかったけど、あれ？　とは思った」

「……しよーがねーから連れてってやるよ」

「は？」

「どこへ？　というラツの当然の疑問に答えたのは、ティズだった。

「今すぐ神霊山へ帰りたいッ！」

ラツはティズに引っ張られる形で走り出した。

何の準備もなく、数少ない荷物を中央神殿に置き去りのままで。

飛行

走って、見覚えのある大きな深皿の中に滑り込んだ途端、ティズとラツは空を飛んでいた。

前回エミヒで鎮守様に入った時には、自分の中に確かにある、正しくない願望を突き付けられて嫌な気分になったが、今は逆でラツは空を飛んでいる事に高揚感を覚えていた。

「うつわ~~~~~~~~ッ！」

上から見ると、こうなのかッ！

王都神殿や王城、王都全体を高い所から見下ろしている。

もっと高く高く飛んで行け、そんなラツの思いが伝わっているわけではないだろうが、高度はどんどん上がり、王都の建物の形すら分からなくなっていく。

海や王都をあつという間に後にした事といい、鎮守様はラツがこれまで乗った物の何よりも早く進んでいるらしいのだが、あまりに眼下の景色が、そして全てが小さくなっていてその実感がない。

高い山に登ると寒くて息苦しく耳が痛くなるという話を聞いた事があつたが、そんな事は全くなかった。

もし普通に外を歩いていたら少し強いかなと感じそうな服をはためかせる風が、今のラツには心地好い。

視界を遮る物のない青い空に、ずっとこうしていたいと思って、そこでラツはハツと我に返る。

そういえばこの空飛ぶ旅の行き先は神霊山だというのに、その理由を聞いていなかったとティズを見た。

「大丈夫か、ティズッ？」

「……」

ラツが思わず抱き寄せずにはいられないほど、ティズの顔面は蒼白だった。

そつえばタサクから王都へ向かう船に乗っている間のティズの

顔も、今ほどではないが微妙に強張り気味だったと思い出す。

「どうやら王都神殿へ行くのを嫌がっていただけではなかったらしい。」

意外にもティズは地面に足を付けていないと不安になるたちのようだ。

「怖がつてんのはティズだけか」

詰らないと言いたげにサンフォが現れて、同時にティズとラツの周囲の空が消え、風も吹かない床と壁が出来た。

「見えてた景色だけが本物で、あとは作り物だぞ、ラツ」

「そうだったのか」

「ティズ、お前ラツに心をしっかり合わせてみる。それからラツはさっきのニヤケ面な」

「ニヤケって……」

口でそう返しつつも、高揚感の余韻がまだ残っていたから、ラツはすぐに空を思い出せた。

ティズも空にいる事を好きになってくれると嬉しいけど……せめて一人で立っていてられるくらいに……本当はやっぱり空にいる心地好さを分かってほしい気も……でもこればかりは無理強い出来るものじゃ……今日は晴れてるけど、もし雲の中に突っ込んでたらどうなったのかな？

いや、それじゃますますティズが怖がる。

……そうじゃなくて、まず今はその前にティズの気分が良くならなきゃ駄目だ！空が云々はその後にしないと！などとあれこれラツは考えてしまう。

するとラツの腕の中のティズが小さくではあったが吹き出して笑った。

「いいよ、ラツがそんなに見たいなら、床と壁をさっきみたく透明にしても」

「お？」

少し体を離して見ると、ティズはもう大丈夫という表情をしてい

て、ラツは手を繋ぐだけにする。

「ところで何で神霊山に帰りたいって言ったんだ、ティズ？」

「……神霊山が襲われてるんだ」

「襲われてるって、……サンフォ！？」

イリーサと一緒に神霊山へ登った時、幻ではあったがサンフォの作った魔物に襲われたのを思い出し、ラツは疑いの眼差しを向ける。
「俺じゃない。魔物を従えて……なんて、愚痴交じりの夢物語りは止めにして、おとなしく神殿の檻へ帰るさ。これからはラツが少しでも魔物と関わらないで済むように、退魔神官として張り切ってやるんじゃないか。どーだ嬉しいだろ、ラツ？」

「サンフォ、帰って来るのか！ やったッ！ えーと、じゃあ本物の魔物が？」

「違う。おい、馬鹿男。これが飛んでるのって、あの女二人の力を使ってるんだろ？」

「馬鹿男じゃないって、ティズ。サンフォだよ。それが、お父さん親子関係修復を目指し思わずラツが口を挟むと、ティズに何と呼ばれようが気にならないらしいサンフォから冷静な指摘を受ける。

「ティズの察し通り、フェシーとリマの力で飛んでる。ラツ、話が脱線するからお父さんは止めとけ」

「む」

「ラツには見せた方が早いかな」

サンフォが言くと、一枚の動く絵が三人の前に現れる。

「神霊山は今こうなってる。始めは元々の結界で防いでいたが、どこぞの巫女姫が手を抜いたらしいな。一日も持たずで、カミッシユ神殿の奴らが頑張ってるのが現状だ」

神霊山には雷が降り注いでいた。

一本ではなく幾筋も、そしてまるで生きているかのごとく、時に曲がりくねり跳ねまわっている。

元々の結界が壊れた後、その雷が神霊山の山頂を打ったらしく、ラツが片づけた術具は粉碎され、あちらこちら地面が抉れていた。

これ以上神霊山を壊させないように奮闘している神官達の中にはイリーサと、その側にアイもいて、同期生や、そしてお偉方及び顔見知りがちらちらと見える。

雷を落としているのは船の形をしていて、神霊山上空をせわしなく飛んでいた。

「……あれに誰かが乗ってるのか？　それであの空飛ぶ船の中にも精霊がいる？」

「オレが見てる物しか映ってないから、あの船の中がどうなってるのかは分からないけど、たぶん人と雷の精霊が乗ってる」

「かなり無駄な動き方をしてるから、俺のように使いこなせてはないな」

「何で神霊山を攻撃してるんだ？　それに使いこなせてないとなると、力を調節出来なくて、アイの先生が言ってたみたいく世界と一緒に消えるとか……何かやばくないか？」

もしその消え方が、雷の主人と精霊を中心に広範囲に広がってしまったら、とラツは最悪の想像をしてしまう。

「うん。だから早くラツと帰ってたのに、この馬鹿男が邪魔しやがって」

「カミツシュまで普通に帰ったら何日掛ると思ってんだ？　むしろこうして連れてってやってんだから、感謝しろよ」

「ラツの反応が良かったからだろ。そうじゃなかったら放ってたくせして偉そうにすんなよ。だいたいラツが望んでくれさえすれば、神霊山にはオレの抜け殻がまだ残ってるんだし、すぐに行けた」

「粉々なのがだろ。それでもお前は大丈夫だろうが、ラツは人間だからそうはいかない。二人で空間を越えるだなんて出来るかも分からない事を望ませて、着くどころかラツまで粉々にならなきゃいいけどな」

「……オレが見てなきゃ、お前なんか神霊山の異変に気付きもしなかったじゃんか」

サンフォとティズの雰囲気が一気に悪化したのを見たラツは慌て

て仲裁に割って入る。

「まあまあ、二人とも。緊急事態で険悪になるのも分かるけど、落ち着いて？　な？」

「……」

それで一旦口を噤んだサンフォが厳かに口を開いた。

「昔々。力ある者はない者を従えようとし、力ない者は武器を持つて、何とかそれに抵抗しようとしたが敵わず、力ある者の奴隷にされていった。世界は数百年を掛け、精霊の力も借り、この空飛ぶ船を始め、高度に発展していった」

ミーシアでイリーサに追い抜われた魔物と、同じような出だしでサンフォの昔話が始まった。

大小、形様々な船。

王城よりも高くそびえ、連立する建物。

そもそもラツには何に使うのか見当も付かない物達が、動く絵の中でまるで紙芝居のように次々と変わっていく。

「奴隷とされつつも力のない者達は自由を求め、隙を見ては力ある者へ抵抗を続けていた。そして力の有無や強弱によって起こる格差に対し、不満や疑問を感じる者。国内外の利害関係。

様々な理由から力ある者達の一部も、そんな力ない者達に協力した。そして主人以外でも精霊の力を込めた武器ならば、力ない者でも扱えると分かると、一気に激化した」

「アイの持つてる小刀のようなのか？」

「始めはそれくらいだっただろうが、最終的には村一つを蒸発させられるような代物だ」

「村一つ」

「そんな武器を盾に、力ない者だけの国も成立したらしい」

武器の持つ、殺傷能力の規模が違う。

先程眼下に見た景色を消してしまえる武器なんて、ラツにはやはり想像出来なかった。

「世界各地で起こる戦いで、地は焦げ、水は腐り、火は穢れ、風は

濁り、雷も乱れて、暗が淀んだ。始めに狂ったのは人間の血や死を一番多く受けていた地で、狂った地精の王は風精の王を閉じ込めた。地と風、地と水の関係上、次は我が身と思った水精の女王リマは閉じ込められる前に、火精の女王フェシーと一緒に自ら身を隠した。それでもフェシーとリマは密かに地精の王の様子を窺っていた。リマを見つけられなかった地精の王は今まで戦いから遠ざけさせ、ただひたすら守っていた主人エイラジャールに、始めて何かを願って望ませた」

「エイラジャールッ？」

「そ。エイラジャールは実は力のない、ただの人間だったんだ。だから完全無欠じゃないのが当然で、ラツの答えもあながちハズレじゃない。」

「……ともかくその時側には暗精の女王もいたが、止めなかったのか止められなかったのか、それは定かじゃないが、狂った地精の王に望みを叶えられるわけもなく、力は暴走した。」

神霊山を中心に人も、狂った精霊も、全てが飲み込まれた。もしかすると力の暴走ではなく、結果そうなる事こそが地精の王の望みだったかも知れない」

きつと風精の王であるアイの先生も、封じ込められながらそれを見ていたのだろう。

だから先生はラツに消えると言い、フェシーとリマも力ある者を主人に求めた。

「全て、は正しくないな。俺らの先祖になるわけだが……フェシーとリマ同様、戦いから身を隠し、遠い未来に狂った世界が再び蘇るまで、眠りにつく事を選んだ人々がいた。」

世界が蘇るまでどれくらいの時が流れたのか、過去の遺物は残っていても、精霊のいない世界で世代を重ねて、下手をしたら数千年は経っていきそうだな。……とまあ、ここまでがフェシーとリマから聞いた話だ」

「……」

「おい。呆けてんじゃねえぞ、ラツ。まだ続きがある」

「……おおっ？」

もつとことん聞こうじゃありませんかという感じで、ラツは先を促した。

「数千年という時を経ているにも関わらず、エイラジャールの名前が残っているのはなぜか？」

「そういわれると、そうかも？ でも遺跡や地図だって残っているくらいだし？」

「その可能性も否定出来ない。地図は記憶が完全に時間に消える前に記録した物だとして。あくまで俺の仮説だが、魔物から出た名前っていうのはどうだ？」

「へ？ 魔物？ そういえば昔話に魔物は出て来なかったな？」

「魔物は目覚めた後の世界からのモノだ。地精の王の主人なら、エイラジャールの名前は精霊の間ではかなり知られた名前だったはずだ。魔物はエイラジャールの命で暴走した地精の王に飲み込まれた精霊の成れの果てなんじゃないか」

「魔物が元精霊！？」

「ああ、自分達を飲み込ませた地精の王の主人であるエイラジャールを魔物は憎み、昔々世界を狂わした人間を食って消そうとする。自分達を襲う魔物が忌み嫌って口に出す名前だから、現時点でエイラジャールは人から神と呼ばれている。」

魔物のようになつてはならないと無意識に思うから、フェシーとリマ、風精の王、それに生まれて来る精霊も、魔物を本能的に嫌悪する。それからティズ、お前。精霊が混じってねえか？」

「オレに？ じゃあもし力を使っても、誰かに補充を頼まなくてもいいんじゃない？」

「さあ？」

「さあつてサンフォ、曖昧な。神霊山で何か感じなかったのかよ？」

「力を手当たり次第に集めたからな」

ラツはサンフォオの答えにガツクリと肩を落とす。

「おいおい……。……って、ティズも。サンフォオの話を聞いてたろ？ 力が暴走したら世界が滅ぶんだって」

「だって、オレ。ラツがいいからッ」

ティズの答えで一瞬言葉を窮したラツに、サンフォオが追い打ちを掛けるように言ってくる。

「ティズの力を使う時の基本は、さっきティズの気分が良くなったようにラツの望みにティズが心を合わせる、そんな感じだ。ティズは狂ってないし、サクツと調子が良くなった所を見ると、ちよつとくらい力を使っただって大丈夫だろ」

「なッ！ 試したのか、サンフォオッ？」

「万が一の保険だ。神霊山を攻撃してる雷の精霊は、今までの流れからすると雷精の王だろうからな。予期しない流れ弾までは防げないかもしれない。しつかり御守りの役目を果たせよ、ティズ」

「言われなくても分かってる」

サンフォオに反発する感じではなく、いつになく真剣な様子で頷いたティズを見て、ラツはそれほど危険な場所へ行くのだと今更ながら思った。

動く絵を見ただけのラツよりも、ティズの方がより鮮明に神霊山の状況を感じているのだろう。

「サンフォオも神霊山を守りに帰るのか？」

「まあな。神殿に戻るなら手柄を立てるに越した事はないし、それに手土産も多い方がいいだろ」

「雷の主人にもなるつもりなのかよ、サンフォオ？」

「それは、あわよくばだ。でも俺は中央じゃなく、カミツシュへ戻りたい。こっちの要求を通すなら、持つ力は強ければ強い方がいいからな。フェシーとリマで十分とは思うが」

これで本当に神殿の檻とやらに収まっていられるのだろうか、ラツは心配になった。

けれどサンフォオの気が変わって、今度こそ世界平和の為の敵役に

なられでもしたら困るので、懸命にも口には出さず、他の事を尋ねる。

「フェシーとリマとは上手くいつてるのか？」

「上手くいつてるから、こんな風に飛べる」

「そっかそっか。元気か？ 会いたいなあ」

「あの女二人の事なんか気にするなよ、ラツ！」

「必要ないだろ」

何気なくラツは言ったのだが、ティズからはぎゅうつと手を握られ、サンフォも実に素っ気ない。

「痛たたた、ティズ痛いつて。ケチケチするなよ、サンフォ。僕にも美女二人の眼福を分けてくれ」。別に取ったりしないし、というかフェシーとリマにしたら、僕なんて主人の選定外だしさあ」

そうこうしている間にも鎮守様は飛行を続け、カミッシユに近づいていた。

「あ……」

「おっ」

「何だ何だ？」

ティズとサンフォが同時に声を上げ、ラツがそんな二人を訝ると、動く絵に再び神霊山が映った。

アイとイリーサのすぐ横に見た事もない男が立っている。

「先生、だよな？ 風精の王」

アイが先生からもらったと言っていた小刀は折れて、地面に落ちていた。

雷光に輝く新雪の白髪、水色の瞳。

外見年齢はフェシーとリマより少々上といったところだろう。

先生が現れた事で、なぜか雷が鳴り止んでいる。

その事にイリーサを始め、周囲の神官達が先生の唐突な出現に驚愕しつつ、ホツとしていた。

非常用の術具は使っているものの、何の心構えもない状態で結界

を張り続けていたせいだろう、イリーサを始め神官達に疲労が溜まって来ているのが窺える。

アイには精霊の受け入れ領域がないので、イリーサを主人にする気なのだろうか？

動く絵の中で、先生が仕方なくな感じで何かをイリーサに言い、それに対しイリーサも思いつ切り渋い表情を浮かべていた。

神霊山の頂上にはイリーサと先生以外の声しかなく、再び雷の攻撃が始まるまで緊張感漂う静けさが支配するのではと、ラツは思っていた。

ところがカミツシユの神官達は結界を一時解き、更には水や食料を補充し始める。

「ほら、今のうちに水飲んどけ！」「のどが潤う助かった！」

「こつちに飯、回って来てないぞ！」「分かった！あと来てない奴はッ？」

そんな声まで聞こえて来そうだ。

バタバタと慌ただしい光景に、ラツは可笑しくなった。

「みんな想像以上に遅いなあ」

「山頂以外に雷が落ちてないからな、すぐ側に隠れて待機してたんだろ。雑用係の血が騒ぐか、ラツ？」

「かも」

「もうちょつとで嫌でも混ざれるから、安心しとけ」

サンフォの言葉でラツが更に笑ったその時、空飛ぶ船から大きな雷光の塊が山頂に落ちたように見えた。

太い足、分厚い胸、癖のある金の剛毛。

強力で濃い真紅の目をした雷獣の背に、誰かがしがみついている。その様子をラツが視界に収めた途端、一瞬だけ動く絵が黒一色に染まった。

「あれ……？」

「神霊山一帯が真っ暗だ。どうやら暗精の女王もお出ましらしい。これを飛ばしつつ戦うのは厳しいから、俺達も降りるぞ」

「って、わああッ！」

悲鳴のような、感嘆のような、その両方のような、とにかくラツは声を上げた。

突然見えたカミツシュの町並みと、続く山脈、神殿と神霊山。神霊山の山頂に浮かぶ空飛ぶ船。

そしてフェシーとリマに、小さな火花と水粒達が煌めき飛ぶ。

フェシーとリマの力で飛んでいるというより、空へ放り出されているようにラツは感じた。

きっと恐怖からだろう、先程のように痛くはなかったが、手を握って来るティズの力が強くなったのを感じて、ラツは同じように握り返した。

精霊の王と女王

非常にゆつくりと、少しの衝撃も受ける事なく、ふわりとラツは神霊山の山頂に降り立った。

もちろんテイズとは手を繋いだままだ。

目の前に展開する空前絶後の光景に、一言も発せられない人間にお構いなく、精霊の王達は話を始める。

「随分と派手な登場だの、火に水よ」

「綺麗だっただろ、雷精の王。久しぶりだが、人の姿になるつもりはなさそうところが相変わらずだ」

「風精の王とも、お久しぶりね。雷と風の間に割って入るのだから、これくらいはしなくっちゃね」

「どうもどうも。割って入るって物騒な。まだ何もしちやいけませんよ。あとは地だけど……どうなったの、あいつ？」

「……静かにして下さいませ」

膝下まで広がる濡れ羽色の髪、消炭の瞳で、けだるそうな暗精の女王が他の精霊王に問い掛ける。

「大勢揃って、何事ですか？ あまりに騒々しいので、悪い夢かといつい追ひ払おうとしてしまったではありませんか」

「何が、つい、じゃ。主が寝ぼけて力を使ったせいで、辺り一面、真っ暗になっとなっただけではないか。……まあいい、エイラジャールを出してもらおう。儂の姫が会いたいと望んだ」

すると金の剛毛にしがみついていた雷精の王の姫が雷精の王の背から降りて、何かを訴え出した。

その姫はカミッシュの神官達以上に濃い疲労を漂わせており、その様子に暗精の女王が眉を顰める。

「短気を起こして主人を潰してはなりませんよ、雷精の王」

「見所のある人間を儂が鍛えてやっとするのだ」

「そんな風だから、人に奉られついでに、敬遠されてしまうのでは

ありませんか？」

「儂の力に見合う人間が単におらなただけの事よ。話を逸らそうとしてもそうはいかんど。早くエイラジャールを出さんか。さもなければ出て来るまで再び儂の力を示すまで」

暗精の女王は小さく首を横に振った。

「エイラジャールは亡くなりました」

「何だと、奴め。ちよいと寝てる間に死におったのか。いつ死んだ？ 寿命か？」

雷精の王も、雷の姫も、暗精の女王の言葉に茫然としている。

エイラジャールの名前が出たのには気付いたが、それ以外雷の姫が何と言ったのかラツには分からなかった。

けれど精霊の王達の言葉は雷の姫も理解出来ているようだ。

今までどう会話しているかなどラツはまるで考えなかったが、精霊の言葉はそれぞれの人が分かる言葉で自動的に伝わって来るものらしい。

「もうとうの昔の話です。眠っていらした貴方は幸いでしたよ、雷精の王。あの狂った世界を見ずに済んだのですから。

人に狂わされた世界によって、狂ってしまった精霊達。その狂気は力の強弱に関わらず、全ての精霊を襲い、王や女王と呼ばれる私共でさえ例外ではなかった。

それをもっとも強く感じていた地精の王は、せめて王や女王と呼ばれるものだけでも救おうと、まず風精の王、貴方を閉じ込めました」

「なんだよそれ。ほとぼりが冷めるまで、どっか隠れとけ」とか言うてくれればいいものを。問答無用だったぞ、あいつ」

「許してあげて下さい、風精の王。地精の王は自身も狂いつつある恐怖と闘っていたのです。その焦りもあって、貴方がすぐに納得するとは考えられなかったのでしょうか。」

そして火精と水精の女王、貴女方は自ら最良の選択をしてくれました。お二人一緒ならば、きっと大丈夫と安心いたしましたよ」

「……アタシ達は風みたいに閉じ込められるくらいならっていうだけさ。地は完全に狂いやがったと思ってたよ」

「ええ、そうよねえ。……では地精の王の力の暴走もなかったのかしら？ 全てを飲み込んだあれは何だったの？」

「地精の王もエイラジャールの存在と私の暗の力で、何とか眠りに誘う事が叶いました。けれどくしくもその時、いえもしかすると精霊王と女王が存在を隠した故かもしれないね」

狂った精霊達は一斉に暴走し、姿形を変え、仕舞いには大きな一つの塊になった。そうして瞬く間に世界の全て、星全体を覆い尽くしたのです」

狂った地精の王がエイラジャールに望ませた結果、過去の文明が滅んだのではないと分かったものの、人の戦いのせいで精霊と世界が狂ったというのは変わらない。

最後まで地精の力を使わなかった事に、遠い存在であつたエイラジャールをラツは少し身近に感じていた。

「ですから雷の姫君、エイラジャールが世界を創ったわけではないですよ。雷精の王、貴方も彼がただの人であつたと知っているではありませんか」

「説明するなど面倒臭いわ。会えば一目瞭然、百聞一見に如かず。ついでに儂も久々に遠く遠く飛びたい気になつたもんでな」

すると再び雷の姫が必死に言い募つた。

そんな雷の姫の様子を見て、全く悪びれない雷精の王に代わって申し訳ないという表情で、暗精の女王が応じる。

「そうですね。たまにこの地へ……神霊山と呼ばれているようですが、訪れては祈る人々によると、この国でもエイラジャールは魔物から人々を守るとされているようです。しかし神霊山にはエイラジャールの亡骸はおるか、魂すら残っておりません」

それなのになぜエイラジャールが神と呼ばれるか、そして魔物と精霊の関係を先程サンフォから聞いた仮説と同じ内容で、暗精の女王は雷の姫に語つた。

自説が当たり、自慢そうにサンフォがラツを見る。

どうやら雷の姫も、なぜ神は魔物を放置しておくのかという、サンフォと同じ疑問にぶち当たり、それを尋ねにエイラジャールに会いに神霊山まで来たらしい。

そして暗精の女王の話はサンフォの仮説に付け加えがあった。

「魔へと変容してしまった精霊達を庇うようですが……。王と女王だけが一緒に眠り、自分達はエイラジャールに見殺しにされたという思い込みによる悲しみが、憎しみを濃くしてしまったのやも。

そして見殺しにされても仕方ないと思いながらも、絶望感は拭いようもなく、精霊達は一斉に魔へと変容したのやもしれません」

「……」

「エイラジャールならきつとそう願うと考えて、時折目覚めた私共は蓄えられた力でそんな彼らや覆っていた狂気の塊を消しつつ、世界の蘇りを祈っていました。もつともそれらを完全に消し去るのは叶いませんでした」

さらに何事か雷の姫が暗精の女王に言い募っているが、暗精の女王のみならず、その場にいた精霊の王、女王は首を横に振った。

「申し訳ありません、雷の姫。……今も世界の為にといいよりも人自体が幸せであるように、力ある人々も力ない人々も少しでも争いなく過ごせるよう祈っています」

地精の王と暗精の女王が世界の為に祈っている発信源だから、神霊山の周囲では魔物の出現率が低く、退魔術の効力も高いのかと、ラツは納得した。

同時にそんな王と女王を目障りに思っ、カミツシュの神官達が結界を張る前、神霊山にちよくちよく魔物が現れていたのだらう。

「いつしかこの地に魔物を弾く結界が人の手によって張られるようになり、地精の王はただ起きたくないだけかもしれませんが、その頃からずっと眠っています。近頃は夢でも見ているのか笑ったり怒ったり困ったりと表情を浮かべておりますけれど、きっとその夢が醒めるまでは起きはしないでしょう」

そうして暗精の女王の話は終わり、雷の姫は見るからに肩を落とした。

そのまま心身ともに崩れるかと思いきや、雷の姫はぼそりと傍らに向かつて何か言い、それを聞いた雷精の王が鋭く大きな牙を口から覗かせて笑う。

「そうだな、これまでもこれからも他力本願など儂も好まん。さすがは儂が見込んだ姫よな。いつの間にそんなに偉くなったと、エイラジャールの奴めを冷やかしてやるつもりが、とんだ無駄足だ。……そうと決まれば、おらおら乗れッ！」

その言葉に雷精の王もまた驚くだけではなく、エイラジャールが亡くなっていた事を惜しんでいるのだと気付かされる。

そしてどうやら雷精の王と雷の姫は自国へ帰る事にしたらしいと分かって、ラツはここに来て初めて慌てた声を上げた。

「あッ！ 待ったッ！」

呼び止められたのが分かったのだらう、雷精の王と雷の姫が振り向く。

「え、と！ これからも仲良くしようッ？」

「……おい小僧。儂の目の前でナンパか？ 行くぞ、姫ッ！」

「えッ？ これからも行き来があるかもしれないし？ せつかくこうして会えたわけだしさあ？ と思うんですけれども……」

それが果たして伝わったか、伝わっていないか、そもそも雷の姫には言葉が通じていないのだ。

雷の姫はラツに困った様子でちよこつと笑うと、慌てて雷精の王の背に登った。

そのまま雷精の王と雷の姫は空飛ぶ船の中へ消えていく。

「それでは皆様、ごきげんよう。ああ、そうでした。よろしければこれまで通りここの結界を張り直して頂けると、私共としては大変助かります」

そして暗精の女王も静かに消え、気が付けばフェシーとリマまで姿が見えなくなっている。

「じゃあ、わたしもかゝえろつと」

「帰るつて、先生ッ？」

先生はアイの一族の里クミナの岩山へ帰るつもりらしい。それを聞きつけてアイは止めようとしたが、既にいなくなってしまうていた。

せつかくこんな遠くまで来て、観光もせず、休憩すら入れずに帰って行つた、雷精の王と雷の姫……遠ざかる空飛ぶ船を見ながら、ラツは急に不安に駆られた。

つまりそんな気分ではなく、そんな時間もない。

雷精の王と雷の姫がわざわざエイラジャールと呼ばれる存在に会いに来たのは、もしかして神の救いが必要なくらいの事態が雷の姫の国で起きているのではないか。

そして慌てて帰って行つたのは、その事態が現在進行形だからではないか。

他力本願は好かないと言っていたが、もしかしたら雷精の王も助けを求めに、もしくは逆に助けましょうか？ とエイラジャールが言い出すのを期待して、飛んで来たのではないか。

生前エイラジャールは地精の王の力を使わなかったらしいが、主人には違いないし、雷の姫の国の窮状を聞けば、放つて置いたりしない性格だったような気がする。

そう考えるとラツは居ても立ってもいらなくなつて、お偉方の所へ行こうとしていたサンフォを引つ捕まえた。

「サンフォ！ 空飛ぶ船を追い掛けようッ！」

「魔物絡みの厄介事に巻き込まれるかも知れないぞ、ラツ」

サンフォの言葉に、ラツは自然と声が低くなる。

「分かつて何で？」

「言葉も分らない遠い国の話だし、雷精の王からは何も言わなかったんだ。行くだけ損だろ？」

「確かに雷精の王と空飛ぶ船がなきゃ、会うところか知る事も出来なかった人だけど、現実はその逆だったわけだし。それに面倒な事

にサンフォを突き合わせて悪いと思う、けどさ……ッ」

雷精の王が操る空飛ぶ船の跡を追えるのは火と水の精霊女王が操る鎮守様以外にはなく、それを動かせるのはサンフォしかないのだ。

「お前さ、王都神殿へ行つた時、ティズを国外へ連れて行くなつてもしかなくても言われただろ？　もしここで雷を追いついたら早速上の意向に背くんだぞ、そこんとも分かつてんのか、ラツ。俺はまだ神殿に戻ってない身だからいいけどな」

「う……。じゃあティズはお留守番……」

「やだ！　ラツが行くなら、オレも行く！」

すっかり横で話を聞いていたティズが、さも当然のようにガシッとラツの腕を掴んだ。

「うっ……」

ラツが悩んでいるこの瞬間にも、空飛ぶ船は進んで行ってしまった。

「行く！　頼む、サンフォッ！」

「やっぱりそうなるか……。ラツだからな」

サンフォがやれやれと呆れ顔をした。

「お偉方に話しても止められるだけだろうから、許可なしでとつと行くぞ。ラツ、もうちょっと俺に寄れ」

駆け寄って来るイリーサの姿に気が付いたが、何も伝えられないまま急に体が浮かび上がったかと思うと、サンフォとティズとラツは再び鎮守様の中にいた。

「追い付けるか、サンフォ？」

「それは無理だが、方向は分かる。さすがに自分の国へ帰るから、雷の船の方が迷いが無い分早い」

問い掛けたラツに、まあ大丈夫だろうという表情をサンフォが浮かべる。

「フェシーとリマの望みとも一致する。最大級に協力してくれるさ」「頼む」

その点はサンフォに一任するより他なく、ラツはティズへ視線を移した。

「ティズに混じってる精霊の力って、地精の王の力なんだろうなあ。サンフォも凄い力を吸収しちゃったもんだ」

「ラツが凄いと思うなら、凄いのかな？」

ティズに自我があるのも、そのせいかも知れないとラツは思った。夢で地精の王はティズになっているのだろうか？

暗精の女王は夢から醒めるまで、地精の王は目覚めないだろうと言っていた。

けれど地精の王が夢から覚めた時、ティズはどうなってしまっただろうかと、ラツの中で疑問が沸く。

だが精霊の王や女王達は誰もティズを地精の王とは思わなかったし、それにいくら手当たり次第といっても地精の王ほどの力ならば、さすがにサンフォが気付いたに違いない。

だからきつと地精の王の夢そのものがティズが存在ではなくて、ティズの力にほんのちよっぴり混ざった力から、地精の王はティズに重なって、それを夢として見ているだけのはずだ。

そう思い直して、ラツは更なる不安を消そうとした。

「よし！ サンフォ、台所を貸してくれ！」

「は？ ああ分かった分かった。ラツだもんな」

「どーせ僕だし。だけどメイニと同じ言い方で、非常に納得いかないんだが」

「まあ気にするな。台所はこっちだ」

案内された台所は整っていて、そして食材も調味料も数は少ないが一通りあった。

「サンフォ、ちゃんと自炊してたんだな。えらいえらい」

「……」

これっぽっちもそうは見えないが、これでも火や水の精霊女王に気を配っているというサンフォから、鎮守様についてアレコレ説明されつつ、その後も横から口を出されつつ、ラツはあり合わせ料理

を完成させる。

それからちゃんと食べていなさそうな雷の姫用にもお弁当を作っておいた。

地精の王

「案の定か……」

サンフォの眩きに、今どこを飛んでいるか見たいと出してもらった動く絵ヘラツが目をやると、小さく不自然に幾筋も落ちる雷光が見えた。

雷が落ちる方向へ近づくにつれ、雷光の周囲を黒い靄が取り囲んでいるのが分かった。

やがて靄は個々の点となり、徐々にその一つ一つが魔物だと明らかになる。

雷光は城のような大きな建物を守るように動いているが、雷精の王と雷の姫がエイラルに來ている間、城に避難しているのであろう人々を守っていただろつ結果は褪せて、ところどころ破れていた。そしてその城から少し離れた見張り塔に二つの人影がある。

「雷の姫と、雷精の王……？」

「だな」

「暑っ 苦しい」

「……それ本人に言うなよ、ティズ」

太い手足、分厚い胸の巨漢の姿をした雷精の王は髪や髭だけに止まらず、腕から胸から足から金色の剛毛をもじやもじやに生やしていた。

どうやら雷精の王は雷の姫を支えるというより、無理やり立たせる為に、獣型から人型へと姿を変えたらしい。

「傍観してる場合じゃないな。まずは結界からか……」

「つて、いきなりかサンフォーッ！」

降りるとも一言もなしに、またも空に放り出され、たまらずラツは声を上げた。

同時にティズもラツにしがみ付いて来る。

火と水による最高峰の加護があるから大丈夫だとは思っのだが、

断りなく空に放り出されたティズとラツの狼狽を他所に、無事に城の見張り塔に降り立った。

城の結界は輝く水のベールで補強され、破れから入ろうとしていた魔物が凍りついた。

更に炎が辺りに降り注ぎ、見えるものから次々に魔物を焼き消していく。

「文句ばっか言ってるねえで、お前もちょっとは働けよ、ラツ」
「ぐ」

キツチリやる事はやっているサンフォに、ラツは返す言葉がない。見張り塔に降り立ったサンフォ、ティズ、ラツ、そしてフェシーとリマに雷の姫が目を見開いていた。

どうしてここへ？ と雷の姫から息絶え絶えに問われたようだったので、サンフォに任せておけば出番はなさそうなラツは答える。

「余計なお世話と思いましたが、助太刀に来ました。主にサンフォがですけど」

「礼は言わんぞ」

「はい、勝手にやっちゃってます。サンフォが」

「……ふんっ」

唐突に雷精の王が人から獣へと戻り、それにつられる形で崩れ落ちた雷の姫が金色の剛毛に半ば横たわった。

どうやら全面的に任せてくれるらしい。

言葉とは裏腹にラツは雷精の王から信頼されているを感じた。

「巫女姫も連れてくりや良かったな」

「サンフォがイリーサのことを口に出すなんて珍しい」

「あれだよ。あれ」

「うわ……」

サンフォの視線の先を見ると、ミーシアの時のように魔物に憑かれていると思いき人々の姿が所々にあった。

「人に魔物が憑いてたのか……」

「ミーシアと一緒にだよ……」

「仕方ない。憑かれた奴が悪いって事で、全部焼くか」

「おい待て、サンフォ！」

「じゃあ、ラツ。お前、担当な」

サラツと物騒な内容を耳にしてラツは慌ててサンフォを制止したが、どうやら墓穴を掘っただけらしい。

「……やっぱ僕もやらなきゃ駄目か」

「当たり前だろ」

「大丈夫か、ティズ？」

「うん。こんな機会でもなきゃ、ラツはオレを使ってくれないだろうし、精霊の力があるなら補充も出来るから大丈夫。心配いらない」
「頼む」

王都神殿でティズの力を整理整頓したいと思った時、神霊山を守る術具の力とは、こんな感じだろうかとラツは想像した事があった。例えば覆う様な網、重たく阻む壁、押し返す槌、落ちて来る鋭い罟、強烈な目暗まし。

神官学校の講義で、術具の発現について質問したり、売店で耳にした話を、思いつきり拡大して空想したのだ。

その想像を現実のものにしないではいけないのだと、ラツはティズを見る。

「……ティズ、手を繋いでもいいかな？」

「オレ頑張るよッ」

ティズが嬉しそうに答えたのを見てから、ラツはミールシアでイリーサが見せてくれた退魔を思い出そうとした。

「イリーサって、どうやって術を使っていたっけ……」

そこでラツは止まってしまった。

イリーサはいとも簡単に人から魔物の追い出しを言葉と共にやっていたように見えたが、ラツには分からなかった。

「こんな感じだったよな」

「こうじゃなかったっけ？」

イリーサの恰好を二人で真似してみるものの、一向に退魔の力は

発動しない。

全然発動しない力に焦りを覚えると同時に、怖い未来予想を思い浮かべてしまった。

初めに退魔術を発動するなら、丁寧に確実に一つずつ、人から魔族を弾き飛ばして片づけるのを実行するのだと思う。

けれど退魔術が続けて成功したなら、ラツにも魔物の敵意が向けられるに違いない。

一つ、二つ、三つ、周囲全ての魔物に。

雷精の王の寝込みを襲うだけだったはずが、火と水精の女王まで現れた事で、魔物達は浮足立つどころか血気にはやっている印象を受ける。

自分を襲って来る魔物の数が増えるたびに、自然とそれ以上の力で対応しようと、いつの間にかラツはティズを気遣う事を止めてしまいかも知れない。

それに魔物を追い出そうとして、もしその人まで一緒に吹き飛ばしてしまつたら……そう思うと、ラツにはとても出来そうになかった。

「……サンフォ、ごめん無理」

「ここまで来といて、それかよラツ。お前、本当は力なんていらないだろ？」

「いやそんな事は……うん、そうなのか？ とにかく退魔はサンフォに任せたッ！」

「……しょーがねーなあ。……ティズ、俺に力を貸せ」

それを聞いたティズはガッツと吠える。

「はあッ？ 誰がお前なんかにッ。嫌に決まってるだろッ！」

「ラツを守る為だ」

サンフォは一体いくつの力を同時に扱えるのだろうか、ラツは関心してしまった。

だが、そう思っていられるもの束の間、ラツの躊躇に気が付いた魔物が攻め所だと突進して来る。

始めの魔物はサンフォがフェシーの力で焼き尽くしたが、その一体では終わりそうになかった。

「ラツの為にないいだろ。使わせてもらっぞ、ティズ」

ティズは頷きさえしなかったものの、神霊山を守っていた結界を小規模にしたものが、ラツとティズ、それから雷精の王と雷の姫の周囲に出来上がった。

その結界は襲って来る魔物を次から次へと退けていく。

いくつもの魔物が消えていく様を目前に見ながら、ラツはそれら全部が元々は狂っているとはいえ精霊なのだと思い、そして狂った原因が人間のせいだとの思考が走る。

更に今は自分を含む人間を守る為にこうして消されているのだと思うと、物凄く申し訳ない気になる。

そんなラツの心に、実際に目で見ている光景とは別のものが映り出した。

様々な色合いが浮かんでおり、その一つずつが消え、次第にその消えてなくなる速度が速くなっていく。

「これって……」

最後に残った一色は、瑠璃色をしている。

消えていった色が何だったのか、ラツはようやく気が付いた。

「サンフォ、駄目だッ！ ティズの力をこれ以上使うなッ」

これまで何度か覗いた時のように冷や汗も掻かず、グチャグチャでもなかったから分らなかったが、これはティズの力の色だ。

それが減っていくのを、ラツは意識せずに見ていたのだ。

しかもグチャグチャが取り払われて、ティズの瑠璃色からは別の色、というよりも光が漏れ出ている。

その光は強く輝き、今までの色とは違って儚く消えていきそうに見えない。

「まさか、地精の王……？」

ほぼ確信を持ってラツが問い掛けると、その輝きがより強くなり、ティズの瑠璃色まで光を帯び始める。

「ラツの為に力を使い果たしたいって思ってたから別にいい。これが本望だよ」

ティズはサバサバとしている。

が、納得がいかないラツは思わず膝を折って、ティズを間近で覗き込む。

「そんな事言うなッ！ 僕はそんなの嫌だぞッ！ 待って下さい、地精の王ッ！ ここで目覚めたら、ティズがッッ」

地精の王の力にティズが飲み込まれているように見えて、ラツは抗議するが、輝きの勢いは止まらなかった。

それどころかティズの中でそれは広がり、色が消えていった部分をも一気に埋め満たしていく。

減っていく色がティズの力だと早く気が付いていれば、そしてサンフォに任せていれば大丈夫だと安心しきっていた自分をラツは大馬鹿者に思う。

「ティズ~~~~ッッッ」

消えないでくれッ！ ラツはぎゅうつとティズを抱きしめる。

地精の王にティズを奪われてなるものかと、そればかり考えていたので、ラツは次に聞こえて来たティズの言葉をすぐに信じる事が出来なかった。

「..... 大丈夫だった」

「..... ティズ？」

「大丈夫、ラツ。オレのままだよ」

「ティズなのか？ ホントにッ？」

瑠璃の瞳、濃い茶色の髪、たぶんラツの小さい頃と同じ顔立ちで、声も外見も普通に聞こえたり見えたりする部分は何も変わっていない。

けれど.....

なかなか信じられないラツの心に、もう一つの声が聞こえて来る。
「大丈夫だ、消えはしない」

その声は聞き覚えのないものだったが、それが誰なのかラツはす

ぐに分かった。

「本当なんですネ、地精の王。そうなのか……。良かった……。ホントに、良かった……」

ティズが消えてしまわなくて良かったと、ラツはもう半泣き状態だ。

少し掛って完全に安心出来た時、ラツの中で疑問が沸く。

「目覚めた貴方どうなるんです？」

「どうにもならないさ。ティズ、君は私の力が欲しいだろう？」

ラツの心の中へ、次から次へと光景が流れて来た。

エイラジャールは力ある者達にその受け入れ領域の広さを目に付けられ、どれだけ詰め込めるかの実験体だった。

その実験過程で知り合った地精の王と逃亡し、神霊山で守られ、籠っていた。

実験台にされ、憎んでいいはずの人間なのに、守られて暮らしているうちに力のあるなしに関わらず、全ての人間が幸せならいいのにと祈り始めたエイラジャールを地精の王は呆れていた。

地精の王が主人にした人間を見ようと、他の王や女王を始めとした精霊達が神霊山へ訪れ、そして惹かれた精霊達はエイラジャールを愚痴の聞かせ役にするほど懐いていた。

そんな中、戦いに塗れた精霊達が狂い始めている事に、エイラジャールは気が付いた。

神霊山に訪れる精霊達の中には人間を主人に持つものもあり、エイラジャールは手紙を持たせて誰彼構わず警告を送った。

けれどそれがいけなかった。

戦いの最中、力のあるなしに限らず、地精の王の主人であるエイラジャールは味方にすれば力強いが、敵に回せば脅威となる。

そんな風にしか考えられず、どこかの陣営に取り込まれるのを恐

れて、エイラジャールは暗殺された。

主人の命令には逆らえない、けれど……という直接手に掛けた精霊の躊躇と、そして死んでも死にきれないという意味で、エイラジャールは致命傷を負いながらも瞬死せず、人間と精霊の行く末を心配し、精霊の王と女王を一度眠りに訪う事で狂った世界から隔離し、そして目覚めた後、狂った精霊達の排除を願い、世界の幸せを祈った。

その最期を地精の王と暗精の女王は看取った。

自分を殺した人間の為になぜ？ と狂いそうになるのを堪え、エイラジャールの最期の願いだったから、地精の王は暗精の女王と一緒にそれを叶え続けた。

「私が地精の王と呼ばれる存在であつたせいで、エイラジャールは殺された。もう二度と主人を持たないつもりだったし、人間に力を貸す気になどなかった。……けれど不本意ながら、いつしか私も人の為に祈っていたよ。

そしてエイラジャールに似ているラツを見捨てるのも忍びない。だからティズ、君が私の主人となれ。君がラツの願いを叶える事に私は口出ししない。ラツの思いを君が固定し、私の力で発動。現実化する。分かるな、ティズ？」

「分かった」

ティズが勢いよく頷いた。

「え？ エエツ?? もう地精の王の主人になるって決めたのか、ティズ？」

「決めた」

「……あのさ。僕、そんな出来た人間じゃないから、何があっても人間好きとか無理だと……。だから僕の想像全部が実際に叶えられたら、怖い事になっちゃうような」

「うん、大丈夫。ラツが大丈夫」

「いやだから……」

ちつとも迷っていないティズの態度がラツは羨ましい。

しかもそんなラツを言い包める様に、地精の王まで言ってくる。

「現実化するか否かは、あくまでもティズに決定権がある。それからラツの思いに、ティズが過敏に反応するのは魔物絡みに対してだけだから、安心しなさい」

「はあ、そうなんですか……うん、でもですね」

「おいラツ、俺一人に全部やらせる気かッ？」

サンフォがせっついて来て、見えていた色や光がパツと消えた。

地精の王の声もそれっきりだった。

悩んでいたラツは慌てて、今この魔物をどうするかに必死で頭を切り替える。

どうせ力を使うなら、使わなくちゃいけないなら……。

「よし、やれるだけやってみよう。サンフォ、一時結界を張るだけにしておいてくれ」

「……全く、どこまで来てもラツだな」

やれやれとサンフォに呆れられても気にしない。

「駄目なら、サンフォに任せるからさ。……ティズ、いけるかな？」

「うん。ラツの思い、ちゃんと伝える」

ティズの返事が心強かった。

声が届く範囲ではなくて、見えている場所、地面が続く限りどこまでも、自分の言葉が届くようにラツは訴える。

「エイラジャーは遙か昔に逝ってしまいました。もう十分狂い続けているんです、もうそろそろ狂う事を休んだっていいと思います」

ミーシアでほんの少しの間だけだが、魔物と話が出来た。

全部ではないだろうが魔物には知恵もある。

魔物は、狂った精霊はもう元の姿に戻れないのだろうか？

サンフォが言っていたように無理やり従えるなら、それ以上の力が必要になるのだろうか、狂った精霊自らの意思ならばまた違うは

ずだ。

地精の王は主人であるエイラジャールの願いで眠りに付いて、狂気に囚われずに済んだ。

もしかしたら眠りに付けさえすれば、狂気から醒める事も可能かも知れないとラツは願い、更に呼び掛ける。

「精霊の王や女王は一時眠りにつく事で狂気に囚われずに済みました。あなた方も一緒だと思うんです。僕に休む為の手助けをさせて下さい。どうかここへ来てくれませんか？」

ラツは自分の心をトントんと叩いた。

「眠りに付いて狂気が去ったら、再び精霊として生きてもよし、次々生まれて来る新たな精霊に力を譲ってもよし。今は人を嫌いでたまらなくても、きつと狂う前は好きでいてくれたのでしよう。僕もあなた方の狂気が静まるように祈ります」

するといくつか小さな粒が飛んで来ては、ラツの中に溶け込んだ。幸いラツは受け入れ領域が広いと、先生からのお墨付きがある。ラツと通じているティズの中の地精の王の力が、いつの日か芽吹くまで眠る種を守る土となればいい。

「……ラツ。あとは全部駄目だと思う」

「そっか……。もういいよ。ありがとう、ティズ」

そんなラツの声に応じてくれたのは、魔物の群れの中のほんの一握りに過ぎなくて、悲しくなる。

「僕は寝ていてどれくらいの時が経ったか知らんが、もうなぜどうして狂っているのかすら覚えておらんのだろっ。完全に魔と化しておるのだ、気にする事はない」

慰めてくれたのだとラツが慌てて横を見ると、雷精の王は明後日の方向を見て素知らぬふりを決め込んでいた。

「ありがとうございます」

「じゃあやるぞ、いいな？」

「サンフォも、任せてくれてありがとう」

その一握りがラツの中に溶け込んだのを見たせいで、今度こそ魔

物達は落ち着きがなくなり、自ら逃げ出す魔物もいる。

そこへ再び火と水と雷と地の退魔の力を撃ち込まれ、雷の姫の国を襲った魔物の群れは消滅したのだった。

終わり

雷の姫にお弁当だけ渡して、ラツは荷物を置き去りにした王都神殿へと帰る事にした。

まあ、途中神霊山の様子が気になったので、カミツシユの神殿に寄って起こった出来事を色々聞いた。

今は、カミツシユの神官達で荒れた山上の後片付けが行われ、そして暗精の女王の望み通り結界を神霊山に張り直し、その場にいた全員がこれまでの感謝を捧げつつ神霊山からの撤収を行っているところらしい。

「何でお前らまで一緒なんだよツ？」

「何ですってツ？」

「お前ら……複数形って事は、俺もか？ 生みの親に対してそれは酷いんじゃないか、ティズ？」

また始まったと、ラツは内心頭を抱えてガタガタ揺れる、王都行きの馬車の中で天井を仰ぎ見た。

なんでこんなに仲が悪いんだろうなあ。

いい加減勘弁してほしいのだが、日に何度も、何かあると同じような争いが起こる。

イリーサとティズの三人で旅をしてた時にも、同じような争いが起こったが、こんなに頻繁じゃなかったよなあ。

サンフォが一緒になってから、増加の一方だ。

アイがいれば争いが少なかっただろうなあと思うのだが、アイはまた岩の中に戻ってしまった先生の気が変わらないものかと、一族の里へ帰ってしまった。

けれどたぶん今回みたいな非常時でもなければ、いつの日かアイが風精の王でも受け入れ可能な物を見つけ、それをアイ自身が持つていなければ、先生は岩山から外へ出ないのではないかとラツは思う。

王都神殿へ向かう旅の初めでは、

「でも実際、二人が一緒に王都神殿まで付いて来てくれるのは助かるよ」

「えゝ、オレは嫌だぞ」

「本当なら、荷物を取りにティズと二人だけだったけど、たぶん王都神殿に行ったら、ティズの本当の主人探し面談がまた待ってるぞ」

「うゑゝ……」

「その点サンフォとイリーサがいたら、主人探しは二人に実質絞られるだろうし。スルー出来るぞ」

「うん……」

「その主人探しの名目があるから、馬車だしな」

「ごめんよ、サンフォ。鎮守様で行けば一跳びなのに、馬車の旅に付き合わせて」

「まあ一人で王都神殿に乗り込んだら、絶縁状突き付けそうだしな。気にするな」

「おゝい。精霊について聞かれたらサンフォに任せるつもりなんだよあ」

「ちゃんと猫かぶってやる。ダメだったらフェシーとリマ出せば文句ないだろ」

「よろしくゝ」

「ワタクシは、暗精の女王からのメッセージを伝えればいいんですよね？」

「うん。巫女姫であるイリーサが言った方がインパクトがある。頼んだよ」

「お任せ下さい、ラツ。カミッシュ神殿の使者ですもの。しっかり努めますわ」

「うんうん」

などと仲裁して、一時的には落ち着いていたのだが、全く継続しない。

元々ティズはイリーサがラツと話しているのを見ると、ムカつい

てしようがないらしい。

同じくイリーサも、いつも会話に割って入って来るティズを苛立たしく思っている。

神霊山の頂上で会った初対面からそうだったが、二人の仲は最悪だ。

オマケにティズはサンフォにも悪印象を持っている。

まず始めにサンフォはティズの力を魔物を従える為に作り出して利用しようとし、続けてティズを通して覗き見をし、更には一時その体に乗っ取ったからだ。

「誰がだ、馬あ鹿ッ！ 都合のいい時ばかり、父親面すんなッッ」

「そんな事を言う口は、この口かあ？」

「い、いひゃい……や、止めるよッ！」

どうやら今回はティズが二対一で不利のようだ。

このままではまた馬車の中の雰囲気が悪くなるので、ラツは必死に話題を変えようとした。

「今回の神霊山の結界はフェシーとリマの力もあって、これまでで一番の出来なんだろうな。元々サンフォは同期生きつての逸材だし」
「当然だろ」

「うんうん、凄い。そう考えるとあの時の、僕と一緒に連れていけば結界の精度が上がるっていう、イリーサの占いもハズレじゃなかったんだな。イリーサの占い通りに行ったからティズに会えて、時間は掛ったけどサンフォもこうして神殿に戻って来たし」

「ですわよね。さすがワタクシですわ」

「オレ、ラツに会えてすごく嬉しい。そこだけはムカツク女のお陰だな」

とりあえず馬車の中で、これ以上陰悪になるのは避けられたかなとラツが内心ほっとしていると、サンフォが尋ねて来る。

「なあ、ラツ。マジで神殿最強な奴って誰だと思う？」

「それはサンフォ、貴方です。……って、まだ誉められ足りないのかよ？」

「まあ、ラツに誉められるのだけは気分いいけどな……そうじゃない。正解はお前だ、ラツ」

「はぁッ？」

「どこがッ？ 全く分からん藪から棒だ。」

またサンフォが真面目な顔で妙な事を言い出したと、ラツは眉を顰めた。

それに構わずサンフォは三本の指を立てる。

「まずは俺。それから巫女姫。更にはティズ……の、三つの力をお前は手中に収めてるわけだ。よくよく考えてみれば、かなり凄い事だと思わないか？」

「手中って、どこが？」

「その証拠に俺達はお偉方の指令より、ラツの頼みを優先するぜ？」
ラツがチラツとイリーサとティズを見ると、真剣にうんうんと頷いていた。

「これはいいチャンスだ。」

「なら、せっかくそう言ってくれてるし……頼み事が一つッ！ 三人とも普段からもうちょっとなと仲良くしてくれッッ」

「……」

サンフォ、イリーサ、ティズが無言で視線を交錯させ合う。
もちろんお互いに嫌いな表情で。

三人のそんな表情を見、ラツは可笑しくなって吹き出した。
ラツにしても本気で叶うと思って言っただけじゃない。

「一応こんな希望がありますよっていう、申し出だ。」

なので、この話を打ち切る事にした。

風の独り言（前書き）

先生がうじうじ？　しています。
イメージと違ったら、すみません。

風の独り言

地の奴が主人としたエイラジャールは、精霊全ての王と女王をも受け入れられる領域を持った人間だった。

エイラジャール本人からは全く力を感じず、見るからに弱々しいというのに、思わず縋り付きたくなる。

こちらが抱きしめるのではなく、エイラジャールに抱きしめて欲しい。

側にいて、穏やかに微笑みを向けてくれるだけで、安心出来て……。

何度も家へ遊びに行つて、帰り際は離れがたくて、離れていると思ひ出す……。

行こうと思えばどこへでも行けたのに、エイラジャールの家の側をうろつくと彷徨つて、そしてまた顔を見に行く……。

地の奴がエイラジャールは自分だけの主人だと、無言の主張をしていなければ、きっと自分を受け入れてほしいと口に出していたと思う。

暗も火も水も、それから少し前から（いつも通り主人としつくりいかず）ふて寝してしまつたらしい雷も、同じ様に感じているに違いなかった。

エイラジャールがいるから、日々増していく不安をまだ押さえていられる。

もう随分前から風がおかしい。

精霊達も力の弱い者から次々に狂い出している。

それは少しも改善せず、むしろ急速に悪化していた。

エイラジャールはその原因になっている人間達を動かそうと、必死になっていた。

そしてそんなある日、突然やって来た地の奴にわたしは閉じ込められた。

地の奴にはエイラジャールがいるではないか、狂うはずがない。
それとも……まさか、そのエイラジャールがわたしを閉じ込めろ
と願ったのか？

ただ動けなくなった。

閉じ込めたきり、何もされなかった。

殺すつもりはないらしい。

閉じ込めるだけで安心するというのなら、無理に壊さずにこの地
の奴の力の中に留まってやろうと思った。

閉じ込められたお陰でかなり感じ辛くなってはいたが、それでも
外の気配は探り続ける。

そして、押し寄せてきた凄まじい狂気の波。

怒り、嘆き。

世界が消える、全て飲み込まれていく……。

それを拒絶したくて、わたしは眠った。

「あのさ〜それ、力を込めなきゃ点かないよ〜灯り」

次に目が覚めた時、上へ下へと弄り回し、スイッチをカチカチと
押している人間を見て、つい言ってしまった。

少し寝ぼけていたのかも知れない。

「……っ！ えっ、何だ今の声っ！ 岩がしゃべった！？！？ こ
れが灯り？ で、ありますか？？？ 力を込めるとはどういう事で
しょう、……神様ッ！？」

神様……に、勘違いされた。

しかも矢継ぎ早に質問されて、何だかもう口を開くのが面倒臭く
て、また寝た。

次に起きても、神様扱いは健在だった。

生まれたばかりの人間を見せられたり、人間には節目の年というものがあるらしく、その時々には挨拶に来る。

返事はしなかったが。

そんな人間の中に乳茶色髪をした小さな少女がいた。

たぶん物心付いた時からの習慣なのだろうが、毎日の日の出・日の入に、

「おはようございます、おやすみなさい、神様」

と言いにやって来る。

そうされている事に気付くまでも、きっと毎日続けていたのだろう、自然な態度。

いつまで続ける気だと困惑し、いつまでも続くはずがないと少し意地悪に思い……。

ついに神様扱いが我慢出来なくなつて、

「わたしは神様じゃないよ」

と、声を出してしまった。

「岩の神様……っ？」

「地は水を堰き止め、水は地を崩す。水は火を消し、火は水を蒸発させる。火は大気の流れを変え、風は火を消し飛ばす。風は地を風化させ、地は風を留める壁となる。雷は暗にその輝く刃を放ち、暗はその刃を包み込む。」

わたしはそ〜ゆ〜ものなんだよ〜。いつかどこかで神でも魔物でも人間でもない存在と会ったら、質問においで〜答えてあげるから。そ〜だ、先生と呼んでくれ〜」

この小さな少女が、今では遺跡と呼ばれている過去の遺物を巡って旅をしている一族だと知っていたから、わざと精霊という言葉は使わなかった。

こうして人間が生き残っている様に、わたしが気配を探れない場所には、もしかすると精霊も存在するかも知れない。

そんな存在を見つけてほしいとは頼まなかったが、どこかで期待

してしまっていたからこそ出てきた言葉だった。

とはいえ、こんな小さな少女にどこまで理解出来るかとも思っていたのだが、かなり頭の良い子でわたしの言葉を覚えてしまった。

その子は、アイと名乗った。

地の奴が何も悪意から閉じ込めたわけではないと、本当はもう分かっていた。

わたし達が現す力だけで見ると、地と風は相性が良くない。

けれど火と水の奴らのように、個人的には地の奴との関係も悪いわけではなかった。

でも、だからこそ一言。

たった一言でもほしかったと思うのは、閉じ込められた側の我儘だろうか。

だから、拗ねた。

その拗ねっぷりを誰に見てもらえるわけでもないのに、拗ねて閉じ籠ったままでいた。

きつとエイラジャールはもう死んでいる。

人間は精霊よりも早く死ぬ。

寝る前に見た人間が、次に目が覚めた時にはその孫のそのまた孫だったなんて、よくあったからだ。

アイも見る見るうちに大きくなっている。

一日一日ではそうでもないのだが、一カ月・数カ月・半年……数年単位で振り返ると、このまま成長すれば、人の姿をとった時のわたしの背も追い越すのではなからうかと思う勢いだ。

アイの事は見ていたくて、深くは眠らないようにしていたから間違いない。

「先生はいつまで岩山の中にいるのですか？ お外はきっと楽しいです。先生も私と一緒に行きましょう」

楽しい、だって？

時々外の気配を探るたびに感じる、あの嫌悪感を持つ蠢くモノ達の気配は山のように感じるのに？

そして精霊の気配は一つもないというのに。

たぶんわたしは嫌悪感を持っていてる魔物と呼ばれる存在を目にしたら、目の前から消し去ってしまいたくて力を暴走させてしまう。

きっとアイすら巻き込んで……。

だから拒否した。

「ん？ 無理。アイちゃんにはわたしを受け入れられるほどの領域がないから」

その時、だけど、と不安になった。

魔物がいる外の世界へ、過去の遺物を求めて、アイは行くのだ……と。

「アイちゃん、ナイフを一本お供えしてほしいな」

アイが帰ってから、こっそり岩山から抜け出す。

でも抜け出せる事は秘密だ。

本当は既にわたしが自由に岩山から出られるとアイが知ったら、「良かったですね。それでは先生、お元気で」とアツサリ絶縁状を叩き付けられるに違いない。

簡単なくらい想像出来て、泣けてくる。

風精の王としての力を込めようとしたら、あっという間に壊れてしまっただろうナイフ。

それを返すまですっと肌身離さずに持っていた。

アイの無事を心から願って。

そのナイフをアイが旅立つ日に渡した。

アイに渡したナイフを通して、外の気配がますます伝わって来る様になった。

アイがわたしに見せようとしている、今の世界の気配。

少し前からアイがよく会うようになった、金色の力ある少女。

ぐちゃぐちゃな存在と、エイラジャールによく似た人間。

その三人とアイが向かった過去の遺物にいた、相変わらずな火と水。

そして生まれつつある精霊達。

エイラジャールに似た人間は、かつてわたしがエイラジャールに對して抱いていた感情を沸き立たせた。

抱きしめてほしい、側にいたいと。

けれど、今も昔もそれは叶わないのだ。

だからどうしても、叶わないと分かり切ってるのに感じた事を認めたくなかった。

そのくせ無視は出来なくて、目の前に来た時には、逆に色々しやべってしまった。

アイの事は見ていたい。

やはり側にいないと駄目だというのは、雷の奴のせいでよく分かった。

奴がわたしの心を込めたナイフを折りやがった衝撃に、後先考えずアイのところまで飛んで行ってしまった。

アイから絶縁状を叩き付けられ、もう二度と声を掛けて来てくれないかも知れない。

ここ近年そう思って、誘われても岩山から出ないとアピールしてたのに……。

気まずい……。

だが、今度こそエイラジャールの時のように、ただ側をうつくだけじゃなく、帰って来たら、アイと一緒にいたいと言おう。

アイが一緒なら、きっと魔物が近づいても暴走しないで耐えられる。

またナイフに心を込めて、それでも魔物に対して力が足りなくて、風精の王としての力が必要なら、金色の力ある少女を仮宿にしてもいい。

風精の王を受け入れられるような物が本当にあるかは知らないが、アイと一緒に探していたい。

君の人生を、君の側で見たい。

そう思っんだ、わたしの小さなお姫様。

選ばれる(前書き)

ラツ死後です。

選ばれる

カミツシュ地方神殿付属神官学校の屋根の上に、先生はいた。

額に掛る髪は白、瞳は瑠璃。

髪の色もそうだが顔に刻まれた皺や皮膚の弛み、明らかに老師もしくは翁と呼んで差し支えないのだが、いかんせん先生の外見は美し過ぎた。

だから今日、担任教師が開いた扉から入って来た見知らぬ先生に、力の有無関係なく、クラスメート一同で目を見張った。

そしてきつと誰もが、この先生が地精の王だと気付いたに違いない。

カミツシュが、いやエイラル王国が誇る地精の王は、主人である聖人ラツと共に旅する先々で精霊を目覚めさせた。

そして聖人ラツ亡き今もなお、守護精霊としてカミツシュに留まっている。

五年・十年、ある時は続けて、ある時は期間を置き、不規則な間隔で人前に姿を現す。

地精の王がなぜこの教室に？ 一体どんな話を語ってくれるのか？ それは果たしてどんな声で？ 様々な疑問と期待を一身に集め、

先生は自己紹介もなく言った。

「木の精は気のせい」

……シーーン。

「馬車が泥水バシャバシャ」

誰も何も反応しなかった。

聞き間違いかと誰もが耳を疑った。

「適当に敵とうッ」

とうツと先生は手刀を振って見せる。

沈黙。

これはもしや駄洒落？ オヤジギャクというやつか？ ギャグと言えるかどうかも怪しい。

これが自国の誇る地精の王？ この外見と、これだけは期待通りだったこの美声で……。

教室の体感温度が一気に零下となり、誰もが凍り付く。

その氷に五寸釘を打つてとどめを刺すかの如く、先生は口を開く。

「思い出は重いでえ」

それだけで先生は教壇を下り、教室から去っていった。

ハツと我に返った担任教師が慌てて後を追いつける。

もしかして今のを聞かせる為だけに来た？ さっきの人が人前に出ない間ずっと考えて、やっとこ思い付いた駄洒落だったりして？

ともかく教室内には非常に微妙な空気が漂う。

そんな空気を払おうと誤魔化し笑い、ほんの短い時間に起きた事を見聞きしなかったものにしようとする無理矢理笑い、そしてそんな教室の状態が可笑しくて笑った。

なので本来なら先生という呼び方も可笑しいのだろう。

だがほんの短い時間といえども、教壇に立った事は間違いないのだ。

「先生。何を見ているのですか？」

今日の日中、教室を微妙な状態に陥らせた犯人である先生。

その先生が一体こんな所で何をしているのか？ うっかり疑問と期待を持ってしまい、そしてがっかりな目に合ったばかりなのに、窓を乗り越えて先生に近付いた。

「引っ掛かったのはお前か、ソルム」

「……ッ？」

「お前、なかなか優秀らしいな。今日、教室へ行く前に見せられた生徒資料の中にお前も入ってたぞ」

先生の声は不機嫌だった。

もしかすると一部のクラスメートからはそのツンケンな孤高さがいいと、微妙な駄洒落を言うよりも高評価が付いたかも知れない。そんな事より気になるのは引つ掛かったという、不吉な言葉だ。

「お前は年寄りの長話を聞くのが好きか？」

「いえ、あまり」

正直に答えていいのだろう、ここは。

なぜならどう返事をしようとも、流れは決まっているに違いないのだから。

そして案の定、先生は続ける。

「そうか、それは残念だ。非常に残念だが、オレには付き合ってもらう」

「は……？」

一人称、オレなのか先生？ とか現実逃避気味に思った。

「なあにそんなに長くはない。卒業から着任までの間だよ、ソルム君。大サービスで親切なオレが赴任地まで送り届けてあげよう。三件寄り道しての大回りだね」

「あの……」

「短期間とはいえオレに選ばれて、これでもう出世コース間違いない。死んだら聖人付きで呼ばれちゃうかも。やったね、ソルム君。おめでとう」

「……」

「はっはっは。嬉しくて声も出ないか、無理もない。もちろん遠慮なんていらなからな。仲良くしようじゃないか、ソルム君」

何だろう、この超ワザとらしい、完全棒読みは。

名前に君なんて付けてはいるが、先生の方が明らかに仲良くする気など更々ないのだ。

その表情と声音でよく分かった。

「ソルム。次に会う時まで、今側にいる精霊と縁切りしておけ。とりあえず、だ。後から復縁でも何でもすればいい。数日だけオレだけのものでいろ」

そんな不機嫌のままで、先生の姿はふつと消える。

そのまま校内に戻っても良かったが、せつかなので先生がいた場所に立ってみた。

旅初日前

一昔前、魔物は異世界からやって来ているのだろうと言われていた。

しかし今も神霊山で眠っているのだろう暗精の女王によって、実は遺跡や聖地を作り使っていた古代の人間が戦争を続けた結果、その時代にいた精霊が狂ったなれの果てが魔物だと教えられた。

それを知った聖人ラツは魔物の中にいる数少ない完全に魔物と化せなかったモノをその身に取り込み、再び精霊として蘇らせる事が出来たのだという。

聖人ラツ死後、現在に至るまで、同じ事が可能な神官は一人もない。

もちろん先生の力あつての、聖人ラツだったとしても……。

「……ソルム。オレとの約束を忘れたか？」

次、会った時も先生は不機嫌なままだった。

先生の視線は足元にいる半透明の小さな獣へと向いている。

約束をした覚えはないが、先生から言われている事は理解出来たので慌てて答える。

「私を命の恩人とも思っているのか、離れなくて……」

「ほう？」

一応こちらの話を聞いてくれるらしい、先生から先を促された。

「私は小さい頃から精霊がいなくても退魔術を使えたのですが、ある時倒した魔物がちょうどデンを食べるか殺すかしようとしていた所だったらしく」

「それで命の恩人か」

「デンはまだ人間の言葉が話せませんが、かれこれ十年くらい前からずっと一緒にいるので理解はしているみたいです。確かに何かが抜けたのを感じたので、ちゃんと縁は切れているのではないかと」

先生はしゃがみ込むと、間近でじっとデンを覗き込んだ。

「コイツの名前、話せないって事はお前が付けたんだろ？ 今にも消えそうな奴に何でデンなんだ？」

表情は見えないが、先生の不機嫌声が和らいているのが分かった。「だからこそ、ですよ。どっしり、ずっしり、でんつとした存在になって欲しいなと」

「主人のお前がそう思っていると、ホントにそうなるかも知れないぞコイツ。オレだってラツが……おっと、お前は年寄りの長話が嫌いだったな」

「あ、そこは聞きたいです」

たぶん教科書には載っていない、授業でも教わらない聖人ラツと先生の話が聞けるのだらう。

「そこは、か。あんまり正直過ぎると、出世コースが破約になるぞ」「大丈夫ですよ、先生。そこら辺はちゃんと使い分けていますから」「ソルム。お前、なかなかいいな。うん、コイツがお前から離れたがらないのも分かる。仕方ない、連れて行くか。……さあ、ここに入れ」

どこからともなく取り出した、卵型で艶のある瑠璃色をした拳大の石をデンに見せる。

いくらなんでも自分の体の大きさより小さい石に入るのは無理でしょうと言いつ前に、デンは迷う事無く飛び込んだ。

そしてそれを見届けた先生は立ち上がり、今度はこちらを見て告げる。

「次はお前の番だ、ソルム。オレの本体をしばらくお前に預ける」

「え……」

途端に強烈な光を感じて、体が一気に熱くなった。

心臓がこれ以上はないというほどに跳ね上がり、呼吸が苦しくなる。

「違う、ソルム。光の方じゃない。お前が見るべきは、瑠璃だ」

藁をも縊る状態で先生の言葉だけを頼り、やっとの思いでその色を見つける。

その瑠璃色がこの強烈な光を生み出しているようにも見え、瑠璃と光がまるで別物のようにも思えた。

そこで再び先生の声が聞こえる。

「そこにお前の精霊もいる。分かるな？ …… 大丈夫か？」

これを、時に数匹の異物と共に聖人ラツは受け入れていた。

そう思うと脅威だった。

もし縁を切らずにいたら、そうでなくても今にも消えそうなデンはこの強烈さに飲み込まれてしまっていたかも知れない。

それが分かっていたから、先生は予め言っていたのだろう。

自分がいる間は他の精霊はいらないという排他的な考えではなく、小さなデンを気遣っていたのだ。

選ばれた事を光栄に思え。

先生の意思に極力添え。

先生の機嫌を損なうな。

そして気に入られる。

短期間採用だけではなく、可能ならば真の主人となれ。

そしてもつともつとカミツシユの為に、王国の為に…… 今日が来るまで、神殿や、更には王国のお偉方からも散々言われた。

だけとお偉方が色々考えなくても、先生は先生なりに考えているに違いない。

お偉方が思う以上に細やかな心で。

でも先生はいつも不機嫌なままそれをしている気がした。

常に親切面をしていたら、そこに付け入られると思っている？

それとも本当に王国の守護精霊なんてしたくない？ 面倒臭い？

そもそも何で訳分からないう微妙ギャグ？ こちらが嫌なものは嫌だと言ったら、先生はそれを面白がったなあ。

相手が爺さんだろうが、王国の守護精霊様だろうが、短期間採用されたからには知りたいと思っただって可笑しくないよな？ さっきの先生が言い掛けた聖人ラツとの話も聞けていない。

「…… 大丈夫です」

決心する。

このまま納めて置く、絶対に。

何だか吐きたいのを我慢している状態の様で笑えた。

「行けそう、だな？」

「行きます」

しっかりと答えたはずだったが、先生は更に念押しして来る。

「じゃあ乗るぞ」

「はい」

凄い音を立てて、駅に機関車が入って来た。

「あ、そうだ。ソルム。お前、旅の途中でオレの呼び方をクソジジイに変えるなよ。先生じゃないと反応しないからな、本当の意味で」

「さすがにそれはない、と思いますよ？ 先生。……たぶん」

「……心配だ」

真剣に心配しているらしい先生の様子に、また笑った。

火―65形。

外装は赤橙、車内の座席は小豆色というこの機関車は精霊の力で動いている。

人間が何人も乗れる大きさの箱を載せた台座に、やはり大きな車輪が付き、線路の上を走る。

窓の付いた客車や食料などの荷物を運ぶ貨車を連結させてガタンゴトンと。

何度も乗れば、地水火風暗雷のそれぞれの精霊の好みや癖が分かると豪語する御仁もいるが、残念ながらどう違うのか全く見当もつかない。

試験車両の時は馬車の様に一両だけだったかも知れないが、こうして長く線路を繋いで走り始めた時には既に三両の連結車だった。車輪があれば、精霊への負担が少なくて済むし、そして長距離を

走った場合、線路があれば例えどんな荒野を走ったとしても迷子になる事だけはない。

今も大きな街中では一両機関車が馬車と並走している。

王国内の主要な都市と都市を結ぶ路線にだけ、連結機関車が使われた。

なぜなら連結させた機関車を走らせられるほどの力を持った精霊が少ないからだ。

そして機関車に興味を持ち、もしくはそういう人間を主人にする物好きな精霊はもっと少ない。

ただ今も世界各地で精霊はどんどん生まれ、そして育っている。

育った精霊が増えると共に、遠距離の連結機関車は増えるだろうし、機関車に限らず、古代人が残した遺跡の数々も動かせるようになり、そしてその構造が分かれば、自分達でも製造出来るのではないかと言われている。

退魔能力を持って生まれたからには、退魔神官になる。

けれど精霊が魔物を嫌悪するのは昔から変わらないが、精霊の主人が必ず退魔神官になるとは限らない。

これから精霊の数が増えるにつれて、その傾向は強まるだろう。ただ精霊の主人となると、通常よりも魔物に目を付けられやすくなる為、神殿に属さずとも魔物への対応研修を受ける事になっている。

幸いな事に、ぶつかって行っても精霊の力に轢かれるのがオチなせいか、今のところ魔物が走行中の列車に挑んで来たという話はない。

古代人が残した遺産でもっとも有名なのは空飛ぶ船だが、残念ながら火精と水精の女王の主人であった偉大なるサンフォが亡くなったと思われる時期から、その目撃情報はない。

もちろん製造・運航方法も不明だ。

ちなみに偉大なるサンフォは聖人ラツよりも、支持率が高い……特に男共層から。

顔がいい、力がある、そんな事よりも何よりも、二人の精霊女王を侍らせていたという事実が何よりも素敵な響きだからだ。

「それで先生、さっきの話なのですが……精霊の外見は主人の思い通りになるもののですか？」

「かも知れない、だ。オレの場合は見本をほぼ毎日見ていたし、ラツはその馬鹿男がオレの父親だと言ってたし余計……オレは絶対に認めないけどなっ」

「馬鹿男……？」

「お前が今さっき、考えてた男だ」

「えッ？ 偉大なるサンフォ……ッ？」

その名を口に出して呼ぶと、先生は俄かに瞳を険しくさせて思いっ切り顔を顰めた。

どうやらその名は禁句であるらしい。

「先生先生、ついでに質問」

先生は返事すらしてくれなかったが、構わずに続ける。

「人の姿をしている精霊は子供が多いですよ？ 先生がお年寄りの姿なのはなぜですか？」

「……オレがラツと一緒に歳を取ったからだ」

懐かしそうな、そしてどこか誇らしげに先生は答えた。

「それに子供ばかりでもないだろう。樹齢何百年歳の木の精霊として生まれたんだからと、生まれた時から爺さんの姿をしてる奴もいる。まさに木の精の気のせい、勘違いだな」

「……」

「ラツは笑ってくれたのになあ。少なくとも何かしらは反応してくれた」

「……。……最後の方は聞かなかった事にして、スルーします。で、いいですか？」

「ラツにもスルーされる事があった。だが毎回そうだとさすがに悲しくなるから、もう言わないでおく。……とにかくそんな変わり種の精霊もいたから、オレが歳を取るのもそれほど不思議には思わな

かつたらしい。いつの間にか徐々になつていたオレを見て、ラツは眞の主人と出会えた時に華麗に変身するはずだったのにつて、たまにばやいてたけどな」

どうやら駄洒落は元々、聖人ラツを笑わせる事を目的に言い始めたらしい。

本当に先生は聖人ラツの事が好きだったのだと、ビシバシと伝わつて来た。

先生の本体が体の中にあるからだろうか？ いやそれは関係がないだろう。

言葉の端から表情一つにしても、それ以外ではまるで違ふのだ。じゃあこちらの考えはどこまで漏れているのだらうと、少々不安になる。

良い気分はしない。

「先生。今、私が考えている事はどれくらい分かります？」

「ほぼ分からない」

「でも偉大なるサンフォの事を考えていたのを見抜いたじゃないですか？」

実に面白い事に、その名前でもた先生はしかめっ面に戻つた。

「馬鹿男とはどうしても切れない縁があつて、どうしても反応しやすくなつてゐる。が、他の事は……オレの意識はここにある。ここで考えている。本体がお前にあるうとも強い感情を抱かない限り、普段は何も感じない」

どうしても切れないつて、先生の父親だとか何とか？ と思つたが、あえて尋ね返さない事にした。

「普段は？」

「お偉方からの事前説明でどこまで聞いた？」

お偉方という呼び方も、ちつとも敬いが感じられない。

偉大なるサンフォに対してもそうだが、きっとこれまでイロイロあつたのだらう。

お偉方と何があつたか何となく想像が付くが、何だか次々尋ね出

したい気分だ。

「聖人ラツが遣り残した、事後処理とか……」

詳しくは現地で分かると、無責任にもお偉方は言っていた。

「ラツが死ぬまでに完全に精霊に戻れなかった奴らがいる。そいつらがまた魔物へと化さないように、たまにストレス発散相手になつてやるんだよ」

「今回が初めてなわけではないのですね？」

「そうだな。だから今日行く場所で、何が起きるかもだいたい分か
つてるぞ。戦いになる。その巻き添えを食わないように、お前の精
霊はオレの中に避難させた。そしてそれは今、お前の中にある。し
っかり体を張って守れよ、ソルム」

「はい？」

巻き添え？ 聞き間違えか？

「例えお前の精霊を守る為だけじゃなくても、しっかりと自分の体ぐ
らいは死守しつつ戦ってもらいたいもんだ。基本的にお前は自分の
周りに結界を貼り、で奴らと戦うイメージを思い浮かべて、それを
オレに超越す。その時に思う存分、お前の思考を奪わせてもらう事
になる」

「なるほど」

精霊の力を借りての退魔術の使い方とは違う、と思った。

消えそうなデンから力をもらうのは気が引けて訓練しかしていな
いが、精霊から力を借りて、そのまま自分で使うのが通常だ。

イメージを渡す、なんて一体どんな風になるのだろう。

「本当はもうオレが見るに、完全に精霊に戻れなかった奴らも大丈
夫だと思うんだよな。単にたまには来い、また来いって言うんで、
それじゃあ……ってだけで。だから奴らもお前を巻き添えにするほ
どは暴れないと思うから安心しとけ」

「……安心」

戦いになるかも知れないと実は半ば予想していたのだが、改めて
先生の口から聞くと気が重たくなった。

あの聖人ラツが最期まで戻せなかった精霊。

どれだけ凶悪なのか、そんなの卒業したての人間に任せるなよと、
つい言葉を濁してしまう。

すると先生がこちらをじつと見ていた。

「ソルム。お前、優秀なんだろう？」

「そうですけどね」

それを聞いて、真面目な先生の表情が一瞬で砕けた。

「ここでアツサリ頷くところが面白いな、お前は。だが、そんなに怖
いなら代役を探して……と言うのは止めておくか」

「しっかり言っているではありませんか、先生。行きますよ、私が」
乗っている機関車は特急で、客車の中は中央に一人一人が通れる通
路を挟み、左右に二列ずつの座席が並んでいる。

「一応指定席ですけど、先生なら国賓車とか御料列車とか……一両
丸々貸し切り列車に乗れたのでは？ 一両と言わず、全車両貸し切
って飲み放題に食べ放題、ついでに寝放題の豪遊。目的地までだっ
てノンストップ」

更にはお姉ちゃんとも遊び放題という言葉は、口に出す前に危う
く飲み込んだ。

「行こうとする度に、毎回その特別車両を作りたがるだろうし、仰
々しくなっていくのが目に見えてる。オレが乗る列車を運行表に割
り込み直し、もしくは普段走っている列車と置き換えだ。それなの
にこれまで土壇場になって、やっぱり行けないと言い出す奴もいて、
更にまた予定の組み直しをさせなきゃならない」

「……なるほど」

「と言いつつ、専用駅は作ってもらったけどな。オレはオレで予め
今度はいつ行くとか、決まった間隔はなくて、思い立った時にしか
行っていないし」

何からどんな風にイロイロを尋ねようか？ やっぱり偉大なるサ
ンフォとの事からかな〜と思っていると、突然、脈絡なく先生が言
った。

「ソルム、少し眠れ」

「は……？」

先生は偉大なるサンフォの事など語りたくないから、そんな風に言い出したのかと思ったのだが、どうも違うらしい。

「とりあえず、目だけでも閉じてみる。お前が憧れるあの馬鹿男も、火と水の女王の主人となった時にかなり消耗した。まあ馬鹿男の場合、当初あの二人の意に反する事を妄想してたからな。自業自得だ」
「先生、馬鹿馬鹿言い過ぎですって。それに妄想って何ですか？
気になります」

「大丈夫、不眠不休で見張ってるとお偉方には言われて来ただろうが、オレは逃げたりしない。奴らを可能な限り見届ける事はラツの望みだし、オレにも責任感ってものがある」

「先生が逃げるなんて思っていますよ、私？」

先生との会話でワクワクしているのは、どうやら自分だけの様だと少し寂しくなった。

先生にとつての自分は決して主人などではなく、お偉方が付けた見張り役でしかないのだと分かって。

どうやら自分でも意外なほど、拗ねた声で返事をしたようだ。

先生が手を伸ばして来たと思ったなら、頭を撫でられていた。

「そうだった、お前はオレが選んだったな」

その事に驚きつつ、半ば必死で言葉を並べる。

「……ですよ。付き合わされているのは私の方なので、忘れないで下さい」

「ああ、悪かった」

しかも謝られてしまった。

これはもしかや先生と生徒というより、祖父と孫だろうか？ 傍から見ると、きつとそうだろう。

「眠れ、ソルム。この揺れと音と共に」

今度は言われた通りに目を閉じてみると、自覚している以上に疲れているのだと分かった。

もうしばらくは目が開けられないと思ってしまっくらい瞼が重い。
そして途中何度か二口三口飲み食べし、生理的用を足す。
列車の響きが変わったり、上を向いて大口を開けて寝ている事に
気が付いて直したりを何度も繰り返した……という覚えはあるのだ
が、それ以外は睡魔に逆らえず、完全に眠りに落ちていた。
そんな風に先生との旅は始まった。

旅初日 後

そのまま眠り続け、先生に名前を呼ばれ、更に揺さぶられてもまだしばらくの間ぼんやりとしていた。

「ここどこだっけ？ 何をしてるんだっけ？ 状態。」

「とりあえず、歩け。一番後ろの車両の扉から降りる。その扉しか開かないし、オレ達が降りたら列車はすぐに出発してしまう。…

…結構段差があるから足元に気を付けろよ」

先生の解説に促され、一段だけ組まれた一両分の長さすらない短い石の駅に、先生と二人で立ち尽くしていた。

「まだここにいていい。ホント悪かったな、ソルム。お前が一見大丈夫に見えてたのは、どうもデンが酔い止め薬的な役割を果たしてくれてたかららしい」

「先生。デンって名前を呼んでいますね。私が寝ている間に何かありましたか？」

「何も事情を知らせず、お前から退かせたからな。謝つといた」

段々本格的に覚醒してくると、この駅と呼ばれる場所には家どころか店すらないのが分かった。

改札口もなければ、駅員もいない。

臨時と書かれた駅名表札板の文字は今にも消えそう、且つ何かの拍子に折れてしまいそうだ。

「……殺風景ですなぁ」

「列車や線路は国営、この臨時駅周辺も国有地になっていて、何も建ててはいけない事になっている。王国内でも人が住んでいない所に奴らを放したからな」

「先生」

日々便利な世の中に慣れてしまった身に、この荒野は厳しい場所であると悟り、これは気を改めねばならないなあと思う。

民家がない場所での実践訓練も受けたが、都会育ちの自分に野外

生活の経験は乏しく、極力そんな時間は少ない方がいいに決まっていた。

「おう。やるか？」

「はい」

「よし、じゃあともかく駅から離れよう。……まず駅と線路を外して、ここ一帯に広範囲の結界を貼る」

「はい」

「中心はあその奴……というか、側に誰かいるな」

「はい？」

最初は分からなかったのだが、近付くにつれて見えたのは筋骨隆々の精霊と、その精霊を真似するように横に座っている人間の少年が見えた。

ここは関係者以外立ち入り禁止の臨時駅とかいう前に、列車が通っているとはいえ、両隣の駅まで徒歩で一日半は掛るし、近くの村までだってそれなりの距離があるはずだ。

人がいること自体がおかしい。

しかも。

「……あの、先生。精霊の方から思いつ切り睨まれていますか？」

「だな。ちょく不機嫌だな。いい時に来た、さすがオレ」

先生にはあの精霊の機嫌がどうして悪いのかが分かっているようだ、一人したり顔でニヤニヤしている。

そして今それを教えてくれる気はなさそうだった。

それはズルイとゴネて見せようかと思ったのだが、先生がその先手を打つように言ってくる。

「ほら、イメージ寄越せっ」

「……」

先生の力、あの強烈な光を見た時に思った。

確かに先生の属性は地だけど、力は力であって、地という外形をとらせる必要はないと。

すると先生が感心したように笑った。

「ソルム。お前いいよ、凄くいい」

「ありがとうございます。……本当に？」

先生が嘘を付くとも思っていないし、褒められた事がやけに嬉しかったのだが、地精の王としての尊厳を傷付けていやしないだろうか、つい確認を入れてしまった。

「一緒に来たのがお前で良かった。イメージも明瞭で、やりやすい。今回のアイツは荒れるぞ。土の壁なんてあつたら、きつとかえって邪魔だったな。……あとは体当たりで行く。自分の身と、どっから沸いたか分からんアレの分の結界も忘れるなよ？」

「体当たり……って、大丈夫ですか先生？」

先生、見た目かなり弱そうな……。

あんな筋骨隆々相手じゃ、一撃で吹っ飛ばされてENDの予感。

「先生のいうアレと私が一緒にいればいいのだし、大小の結界二つと、先生の補助を同時並行くらい出来ますが……？」

「そりゃそうしてもらえればかなり楽だろうが、それこそ大丈夫か？ お前がイメージを浮かべ損ねると同時に結界も消えるんだぞ？」

心配する先生に対し、心外さをおどけ調子に返す。

「先生。ゆーしゅーな私をしつかり使ってもらわなくては困ります」「そつか？ じゃあまあ適当に頼む」

あまり当てにされていないのが丸分かりな答えだったが、気にしない。

「はい、お任せ下さい」

先生が視線を戻して、精霊へと呼び掛ける。

「よう、来たぞ」

「ああ、よく参った。……小童。邪魔だ、退け」

そんな風に呼ばれるほど子供じゃないと思うのは、彼と自分が同年代っぽいからだろうか？

精霊はすつくと立ち上がり、先生だけを見つめて一步一步足を進めて来る。

それは先生の方も同じで、もうこちらを見ようとはしなかった。

既に二人とも戦闘態勢に入っていて、きつとすぐに始まる。

とりあえず任された以上は引き受けなくてはならないと、迂回して取り残された彼の側に近寄る。

幸いだったのはその彼が空気を察しているらしく、無闇に暴れたり説明を求めて来たりしなかった事だ。

おかげで先生の動きに集中出来た。

先生の体に沿うように膜を貼る。

この膜は防御の為だけにあるものじゃない。

やはりこちらへ視線は向けて来なかったが、それを先生が愉快に感じてくれたのが分かった。

直後、まるで示し合わせたかのように先生と精霊が同時に、お互い目指して一文字に走り出す。

体当たりという言葉が出たくらいだから当たり前なのだが、先生の動きは見掛け以上に速かった。

突き出され、繰り出される拳や蹴りには壁を、そして応酬には力を上乘せして。

ぶつかるときに起こる衝撃。

瞬間的に空気が裂かれ、地面がへこむ程の凄まじい力が交わされている。

そして、これが主人を介さない精霊の力なのかと思っていた。

精霊の体は確かに先生の方を向いているのに、力だけがあらぬ方向へ飛んで行ったり、かと思うと範圍的に暴発したりと、咄嗟に防御に重点を置かねば危ない時もあった。

お互いに一体どこまで本気で、そしていつまでやるのかと、心配になる。

けれど、なぜだろう。

途中から演武でも眺めているような気分になっていた。

そんな時、精霊が口を開く。

「これこそ我が本領ッ。小童ごときめが、我が器となれるわけがないッ」

それは先生に対して言つた言葉ではなく、その事に隣に居る彼も気が付いたようだ。

負けず劣らずの声で叫び返す。

「そんなの始めっから分かつてますッ。ただ師匠のお側にいたいだけでッ」

「師匠などと呼ぶな、小童……ッ！」

「勝手に呼びます、師匠は師匠ですから……ッ！」

精霊の方は体を動かしたまま、彼の方は結界の中から、多少距離があるのでお互いに怒鳴り合っていた。

そこで先生が口を挟む。

「求められてんなら、行つてやれよ。別に主人っていう形体をとらなくてもいいだろ？　そもそも器じゃない奴が風の主人だった事もある」

「貴殿がそれを言うのか、王よ」

余計な口出しをするなど、精霊が唸り返して来た。

「オレは主人をとつかえひつかえし過ぎかもな。だが確かにラツの中で、丸々全部受け入れてもらえてた状態は心地良かっただろうと想像がつく」

「当たり前だ！」

「でも精霊はきつと人間に対して、好きな部分があつて一緒にいる。嫌いな部分があつても、何だかんだ一緒にいる。大昔には狂つて魔物になるほど、やっぱり人間が気になつて仕方ない。そんな風に出て来てんだよ。それに逆らつて不機嫌になるくらいなら、行つてこい」

「知らん、そんなものは」

「例え新しい主人を見つけたつて、ラツがどうでもいいと思うようになる事じゃない。オレなんかずつとラツ本人から真の主人を見つけて言われ続けたんだぞ、一緒にラツの中にいたんだから、何となく知つてるだろ？」

オレにとつてはそれこそラツがオレの事なんてどうでもいいと思つてんじゃないかつて、不安だつたくらいにさ。こんな所に留まっ

てるより、出掛けて行った方がラツなら絶対に喜ぶ。その時が来た
と思え」

「……ああ」

突然、力を抜いて精霊がどっかりと座り込む。

「なにゆえ我などが斯様に長く生き、彼の人の命はあれほど短かつ
たのか」

「そうだな」

先生の呟きはとても重たく聞こえた。

笑っていたって、どこかで悼む。

例え相反する表情をしていても、悼む心が消えないのを知っているのに先生は笑う。

残されるのは大抵精霊の方だ。

故人に対する思い入れが強ければ強いほど、悲しみは深い。

寿命の長さからいって大抵の精霊がいずれ味合わなければなら
ない、残されたものが抱く特有の感情。

一方人間はのっぴきならない場合は別として、精霊の命を使い切
った時、後悔はしても悲しむ事は少ないのではないか？ ふとそう
思いながら、結界を張るイメージを停止させた。

「力を発散したくなったら、これからもいくらだってオレが相手に
なつてやる。……だから行ってこいよ、な？」

そして励ますように、先生はぼんぼんと精霊のごつい手を叩く。

さつきまで先生と戦っていた精霊がこちらを、正確には彼の方へ
と顔を向けて来た。

「小童ッ！」

「はい、師匠ッ？」

その声には先程までの悲しみが微塵も感じられず、関係ないはず
なのに思わず背筋が伸びる。

「どこへ行きたい？ どこへなりとも我は供しよう」

「自分が師匠にじゃなくて、師匠が自分に付いて来るんッスか？
うわっ、どうしよう」

開き直って踏ん反り返っているかに見えるが、実は緊張でカチコチらしい精霊と、打って変ってアタフタする彼。

それでは当人同士でごゆっくり、お邪魔虫は消えますね。的な雰囲気追い出される様に、先生と二人その場を後にした。

次の列車が来るまで、臨時駅で待つことになった。

列車が止まってくれるか心配だったが、臨時駅に立っていれば周囲に視界を遮る障害物が何もない。

人間の運転手が遠目に気付いてくれるし、業務連絡でこちらが臨時駅から乗り込むかも知れないと伝わっていると、先生から聞いたそれよりも早く、同乗している精霊の方が、地精の王を感知せずにはいられないものだそうだ。

「ソルム、お前ってホント優秀だな！ 途中からお前のイメージ通りに動いてりやいいやって、どう奴を丸め込むかばかり考えてたぞオレ」

「ふふふ。実感して頂けたようで、何よりです」

実に誇らしいが、面と向かって褒められたのが照れ臭くて話題を変えることにした。

「今、こうやって活動している精霊の王は先生だけですか？」

「だろうなあ。ラツの時に一斉に目を覚まして、といっても暗はほんのちよつとだったけど。今もまだ思い出に浸ってるか、寝てるかしてるんじゃないか？」

「先生も聖人ラツのやり残しがなければ、ずっとそうしていたかった？」

「かもな」

先生は一瞬だけ、遠い目をした。

「でも願いを現実化したのはオレなわけだし、ラツのせいだとは思ってない」

肩を竦めた先生へ、その言い方だとまるでと疑問に思った事をそのまま口にする。

「あれ……先生、もしかして主人の願いを拒否出来ます？」

「出来る。オレの場合は特殊なせいもあるだろうが、本当はどの精霊でも出来ると思うんだよな、そうしないだけで」

「ちよつと待て！ 自分が精霊について一般常識と教えられた事を木端微塵にしてくれたぞ、この先生！」

「このまま聞き続けるのはちよつとまずい気もしたが、怖いもの見たさについて尋ねてしまう。」

「というと？」

「オレ自身だけでも暴走なく力を使って想像から現実化まで出来るけど、主人と一緒にの時はイメージ通りにしか力を使わない事にしてる」

ひえい。

「やっぱり聞かないほうが良かった。」

「……その事、お偉方は？」

「さてなご存知かもしれないし、ご存知じゃないかもなあ。こつちから言った事はないし、オレの特殊性は知ってるはずなのに確認された事もない。何ならお前が報告書で上げとけば？ 今日はこちらまで、神殿に一泊すつから」

「先生。何か……仕事と私、どっちを選ぶのよ？ って責められている気分です」

「ふははっ。面白い事言うな、ソルムは」

先生は笑ったが、冗談なくそう思った。

旅中日

神殿に一泊した後、一日に数本しかない列車に乗り込み、車窓から外を眺めていたら、しばらくすると平原と別れて山中へと入った。急な曲線や勾配を繰り返し、いくつものトンネルを抜けて、ずんずん進む列車の側面に枝や葉がぶつかる。

時折木々の隙間から眼下の景色を見る事が出来た時、いつの間にやらだいぶ高地へ登っているのが分かった。

麓では春の花が咲き揃いつつあったというのに、線路脇にまだ解けきれない雪が残っている。

特急は走っていないし、そもそもこんな山中じゃ平原に比べるとスピードが出せない。

昨日の特急列車とは違って、二人座席ではなく、一座席に何人でも座れるような縦長だ。

ちよつと座席が固く列車の振動が腰にくる。

路線内には小さな集落が点在しており、そこに駅もある。

都や街近郊に比べて一駅区間が非常に広く、それらはほぼ無人駅だった。

さすがに昨日の臨時駅よりも、しっかりとした作りではあったが……。

今日はその無人駅の一つで、普通に降りた。

「はい、ソルム君。イメージタイム〜ッ！」

突然先生から見世物の始まりの様に楽しそうに言われて、何事かと思う。

「は？ ……え、もしかして？」

こちらがイメージすると先生が力を使うわけだから、近くに魔物でも出現したかと緊張したがそうではないらしい。

「このまま歩いて行くと大変だぞ。オレはへばったお前を抱えて行くのはごめんだからな」

「はあ、じゃあ」

こんな使い方って有なのかと思いつつ、イメージしてみる。
まずは足に負担が掛らないようにする事が先決だろう。

大小の石や木の根がゴロゴロでこぼこしているよりも、ふわふわしている所を歩くのがいい。

ふわふわ？ 雲……何の気なしに、空を見上げる。

「先生、空も飛べます？」

「どうかな？ 力は力であり、地に拘らないと言えるお前なら可能かも知れないが、オレは飛びたくない」

先生にもちゃんと苦手なものがあるのだな、と思った。

弱味を握って嬉しくなるのは、マズイ性格だろうか？

「でも先生、屋根の上にいましたよね？」

「あそこはラツがぼくとしたい時とか、逆に色々考えたりしたい時に行ってた場所だったからな……」

懐かしそうにするかと思いきや、先生は不機嫌な表情を浮かべる。
どうやら偉大なるサンフォも関係しているらしい。

偉大なるサンフォが神官学校卒業当初、魔物を従える為に先生を作ったのだという妄想話は聞いた。

自我が芽生えたのが偶然にしろ何にしろ、もしかしたら先生は地精の王ではなく、魔物を従える魔王になっていたかも知れないのだ。
前者よりも後者の響きの方が素敵に聞こえるのはお年頃のせいか、それとも聖に対してだけではなく魔にも惹かれる人間の性か。

魔物を従え、周囲を睥睨する先生……なぜだろう？ うつとり来る。

「……ソルム……」

先生の低い声がして、ハツとする。

「あつ、すみません。……というか。いいじゃありませんか、想像くらい」

「伝わって来るんだよ、あほッ。お前のイメージを自動変換実行すればオレは意識しないで済むんだろうけど、一応今はお前の体に対

して力を使ってるからな」

途端に荷物から体が一気に重たくなり、固い地面に膝を付き掛けた。

「わわわ、先生。すみませんでしたっ。お氣遣いありがとうございます！」

「馬鹿男二号のあほって呼ぶぞ、ソルム」

「ご勘弁を」

そんな風に謝りつつも、先生との接続が切れているのをいい事に、全くその気がない先生に対してチツと思ったのは内緒だ。

機嫌を直してくれた先生に連れられて着いたのは、洞窟の入り口だった。

「……先生。出ますね、ここ」

「寄って来るんだろうな。昨日の奴の場合は視界に入った時点で即倒しに行つて、下手したら地形ごと消し去る性格なんだが。」

今日のは、こんな狭い場所に魔物を呼び込んで、最終的にはオレに倒させて、これだけ集めたの、偉いでしょって褒めて欲しい癖に自分も隠れてる。いや、見つけて欲しいのかな？ という奴なんだよなあ」

「……」

「中がどう通じてるのかは読み取りにくいが、居場所なら今日会いに来た奴も奴が集めた魔物もだいたい分かる。……君なら必ずやれる！ さあ張り切って行つてみようッ！」

非常にありがちな言い回しを口にして、先生は中へと歩を進めてしまい、それに従うしかなかった。

洞窟が崩れないように力を調整しつつ、見つけるたびに魔物を丁寧に消していった。

どんどん奥に進むのだが、洞窟はどこまで続くか分からない。

高い天井、底の見えない割れ目、開けた空間が続いたと思うと、その逆に一人がギリギリ抜けられる細い隙間が続いたりする。

荷物を入り口に置いて来て正解だった。

もう入り口の光は見えないから、灯りを消せばきつと真っ暗だ。

「あの、先生」

「おう？」

「先生に見えてるここの情報、私も見たいです」

先生はこちらのイメージを自由に転用出来るが、こちらにそれが出来ないのは不公平だと思う。

これまで聖人ラツの遣り残しに付き合った神官達はとうだったのだろう。

知らなくていい事まで聞けてしまっている自分はまだ先生に色々言えているに違いないが、言えなければ言えないほど、一方的にイメージが奪われる事に不快感を覚えたのではないだろうか？

そして不快感を抱かれた事に、先生は当然気が付く。

これまでの神官達と先生の関係は、非友好的な場合が多かったのではないだろうか。

先生が最初に言ったクソジジイ。

口に出されずとも内心では、自分の何代か前に本当にあつた話なのかもしれない。

「悪かったな、ほら」

そんな考え事を断ち切るように、先生が洞窟のイメージを寄越してくれた。

「……先生。何だか、面倒臭くなってきました」

何なんだ、この魔物の数。

しかも、何だこの洞窟の複雑怪奇さ。

それにこれまでの神官達と先生の間を考えると、……面倒だ。ん？ 気持ちは分かるが昨日も色々考えながらやってくれただろ、ソルムは。今日も任せるから、な？」

「任されるのはいいのですが……。……とりあえず邪魔者は排除で」

位置だけ見えている魔物達ではなく、入り口に置いてきた荷物と、それから精霊の方を結界で取り囲む。

精霊は暴れているらしく、小刻みに動いているが出さない。

そこで大人しくしてろ。

「こうしといて、何をするんだ？」

不思議そうな先生に、答えた。

「先生、しましょう」

「は？ おいまさか……？」

「話が早くて助かります。どうぞ御遠慮なさらずに」。たまには先生も発散しないとっ」

「いや待て、いらん気遣いしなくていい」

イメージを送信ついでに、先生の瑠璃の目をじっと見つめる。

「……決めましたから、絶対」

「……ッ」

根負けした先生が仕方なく調子で動き始めた。

「先生、もっと……っ」

拒否権を持つ先生に焦れる。

すると先生が躊躇を捨てて、なおかつ誘いを掛けて来た。

「そういうお前がそのもつとを超越せ、ソルム」

「そうこなくっちゃ……、くッ」

唐突に先生の力の中に放り込まれた錯覚に陥って、息を詰める。

先生の力を見るのはこれで二回目だ。

「ほら、ソルム。どーする？ どうしたいんだ、オレを？」

だが、これに飲まれるわけにはいかない。

昨日の精霊に先生は「力を発散しなくなったら相手になってやる」と言っていた。

ならば当の先生はどうなのだろう？ 聖人ラツと偉大なるサンフオが亡くなってから、相手の事ばかりで自らは貯め込んでいるのではないだろうか？ そう思ったのだ。

するとデンが足の裾を必死になって銜えているのが見えた。

力の波に飲み込まれない為の、碇……大丈夫だ。
いける、そう確信した。

「こうします、よッ」

力を周囲に巻き散らかす。

いや一気に放出して、大規模爆発を起こさせるのがいい。

そうして先生は魔物も洞窟も関係なく、周囲一帯を山ごと吹っ飛ばした。

「……あ、ヤベ。調子に乗り過ぎた」

「でも気持ち良かったでしょ、先生」

「う。まあそうではあるんだが」

残ったのは塵と化し損ねた岩や木の残骸、そして今日のお目当てである精霊だった。

「王様の馬鹿ああああッ！」

結界が消えるや否や、うわ〜んという泣き声を響かせつつ遠ざかって行く。

「悪かったよッ！ お〜いッッ」

先生は泣き声が去って行った方へ、叫んだ。

「馬鹿馬鹿馬鹿〜王様なんて、王様なんてッ！」

するとあれこそが童というべき精霊が遠くから隠れつつ、こちらを見て立ち止まる。

その愛らしい姿とは対照的に、大きな工具を何本も担いでいた。

洞窟は自然のものだけではなく、どうやら手も加えてあったらしい。

「……でもまた来てよッッ」

「おう、またなッ！」

「その人間は連れて来ないでッ、もう二度とだからねえええッッ」
今度こそ本当に走り去ってしまい、見えなくなってしまった。

予定よりも一本早い列車に乗り込み、その日はのびのび温泉に浸かって寢床に入った。

「先生、もう寝てます?」

「……ん?」

衝撃をかなり和らげていたとはいえ、歩いた事には変わりない。

なので目を閉じればすぐに眠れるかと思っていたが、どうも日中山を吹き飛ばした先生の力に当てられたらしい。

思うように睡眠へ切り替えられなかった。

「ラツの真の願いですけど……」

旅二日目の終わりにして、早くも敬称略で言ったが、先生から不快気な反応は返って来なかった。

それをいい事に、さっき列車の中で聞いた昔話で気になった事をそのまま続ける。

「ほら。先生が王都神殿で体に乗っ取られた時に、サンフォが言っていたじゃありませんか。先生の力を安定させるよりも、真の主人を見つける事よりも、ラツには本当の願いがあるはずだって」

「ああ。……何だと思う? 言ってみろ、ソルム」

もう先生は既に分かっているのかも知れないと思った。

でも客観的な第三者の意見を聞いてみたいと思っている風にも受け取れたので、答える。

「先生が幸せでありますように、……じゃないですか?」

「そうだな」

やはり当たりらしい。

この一言で終わるかと思われた先生の言葉には続きがあった。

「オレにとってはラツと一緒にいる自体、幸せだったけどな」

「……私も。先生といえると楽しいです」

かなり本気の本心だったので、内心また面白がられるだけだったらどうしようと、ドキドキしながら言ってみたのだが、先生の思考はスッカリ過去に飛んでいるらしい。

「そっか」

と、今度こそ短い返事のみだった。

先生は三件寄り道すると言っていたから、次の場所で終わりなのかと思うと、余計に寂しくなった。

旅最終日

今日も朝から列車の移動で始まった。

スイッチバックも体験し、昨日よりも更に高地へ登る。

今日の下車駅は路線内で、一番標高がある駅だった。

少し分け入った日陰には、多くの雪が残っている。

家々の周りや道路に積った雪が人の手によって集められ、背丈以上になっていた。

それでも確実に季節は春へと向かっているようだ。

新雪は見られなかったし、あちらこちらからぽたぽたと水滴を垂らして、いくつもの水の筋を作っている。

お陰で歩く先々も少々ぬかるんでいる場所が多かった。

始めは迷いなく進んでいた先生だったが、何度か辺りを見回して、戻って逆方向へ進んだり、そこを更に取って返したりを何度か繰り返して、そしてついに足を止めてしまった。

「……先生」

「うーん……」

「もしかしくなくても、迷子ですか？」

「みたいだな、これは」

「うわっ！ 先生でも道に迷ったりするのですねッ。地上では怖いものなしだと思ってました」

迷った事を不安に感じるよりも、意外な真実に驚く。

「いや、オレが迷子じゃなくて。今日会う奴がいなくなってる」

「……え」

「しょーがない奴だなあ」

いや先生、肩を竦めないで下さい。

いるべき場所にいるはずのものがいないなんて、どう考えたってヤバイじゃないですか。

確かに精霊の周りに、逃げ出さないように檻を設置してあるわけ

じゃない。

だが一昨日の精霊は先生が来るまでどこへも行かなかったし、昨日の精霊もあの洞窟は壊れてしまったが、またあの近辺で工事を始めるに違いない。

聖人ラツに放された場所にはどの精霊もきつと愛着があるはずで、それを捨てたという事はつまり……。

「魔物化、ですか？」

「それはない」

確かに魔物化は最悪の場合だが、その可能性はあるはずだ。

それなのにキツパリと言い切った先生が妙に引っ掛かる。

すると先生がすぐにその答えを続けた。

「もし魔物化してるなら、もっとオレの気が逸ってたはずだ」

非常に頼りになるような、ならないような言葉。

これを先生以外の他の誰かが言ったなら、十中八九信じなかったのではないかと思う。

けれども先生が言うからには仕方ない。

脳内で魔物化という文字の上に線を引いた。

それでもまだ引っ掛かりは消えない。

「この辺にはいないから、とりあえず駅まで戻るか……。」

「分かりました」

「あゝソルム？　もしかしたら人間社会に不慣れで一悶着は起こしてるかもだが、大丈夫だから。あんま気にすんな。ちょい出遅れた」

「先生、それ全然大丈夫じゃないです……」

最悪の予想は免れた様だが、まだ安心は出来なさそうだ。

先生の後ろからついて行きながら、屋根の上にいた先生が、飛び降りたのでもなく、校内へ戻ったのでもなく、突然消えたのも思いつく。

このまま一人悶々として、先生と気まづくなるよりは、ズバツと引っ掛かりを聞いた方が良く、この数日で学んだので聞く事にした。

「先生は一人だったら、自分の好きな場所へ一瞬で行く事が可能な

のですか？」

「？ 見知った場所なら、そうだな。だからって一人で迷子の奴を捕まえに行けなんて言うなよ？」

「今は言いません」

先生は聞いた事にちゃんと答えてくれる。

「そうすると遣り残しの精霊が居る場所へ、先生一人なら列車なんて使わなくてもすぐに行けちゃいますよね。万が一、魔物化していても、暴走なしで力を使える先生なら、自分だけでその始末も出来る。実際そうした事もあったのでは？」

そして嘘がない。

これは精霊としての特性の様な気がする。

「ラツが死んでしばらく荒れた時期に、実は一人で行ってた」

「一人で行動した方が圧倒的に早いのに、どうして先生は神官を連れて行くようになったのですか？」

「あれこれ想像から実行までするのって、どうも面倒臭くて駄目なんだよな、オレ。誰かと一緒ならお偉方もちょっとは安心出来るだろうしな」

「それと絶対に危なくない遣り残しだけを選んで、神官を連れて来てますよね？ 今回だけじゃなくて、毎回でしょう？」

「元々ラツの願いに反応して、自分から飛び込んで来た奴らばかりだから、今更魔物に逆戻りはしないし危なくない。それに将来有望な若人を危険に晒せないしさ」

先生の事だから、偽りない気持ちなのだろうが……。

「先生、もう少し真面目に答えると？」

「……やっぱ寂しいからなあ、一人でいるのは。それでラツみたいに笑ってくれる奴がいらないもんかなと、教室へも行ってみる」

これも本当に本当なのだろう。

でもこれだけなら、きつとこんなに引つ掛かりはしなかった。

「もっと打算的な答えではどうです？ 例えば連れて来る神官を精霊の主人にさせようとしているのではないか、というのは深読みし

過ぎでしょうか？」

「そんな事まで知りたいのか、ソルムは」

「ぜひ」

「力ある神官が主人になってくれれば、それに越した事はないよな
あ。だが残念ながら現実には難しいもんだ」

そこで一度ちらりと先生がこちらを振り向く。

話そうか話すまいか迷っている風でもあるが、結局先生は話してくれた。

「オレは行く先々で精霊から王って呼ばれるんだよ。それも王って
いう単語が名前であるみたく、普通に呼ばれる」

「地精の王だから当たり前じゃないですか？」

「別に威張った覚えはないし、その逆に敬われた事もない。でもラ
ツがいなくなつてから特に、王と呼ばれるからには何か出来ないも
んかなと考える様になった」

「自分から仕事を背負い込まなくても」

「全くだな。それでまあ……まずは主人になつたからって、精霊は
簡単に使い捨ててもいい道具じゃないって事を、出世コースへ行く
人間に気付いてほしかった」

「デンもですが、精霊なら神殿内にいますよ」

「精霊が生きている事、ちゃんと個性だつてある事を知ってもらい
と思つたんだ。例えオレに不快感を持ったとしても、三ヶ所くらい
回れば嫌でも分かるだろ？」

教室での先生で十分に個性爆発だったが、話が脱線しそうなので
口にはしなかった。

「神殿内にいる精霊達は、最終的には主人に絶対服従の奴ばかり
だから、そうじゃない変な精霊もいるってところを見せたかった。お
前はとも元々デンが消えそうな状態なせいか、精霊に無茶な要求
をするような性質じゃないらしいから、その点じゃ今回の旅は必要
なかったかもなあ」

「……。屋根の上で見抜かれなくて良かったです」

見抜かれていたら、こんな楽しい旅には出られなかった。

こんな楽しい先生にも会えなかった。

「ん」

何を悩んでるんだろう？ 話して貰えるだろうかと先生を見てみると、もう一度、先生がこちらを振り向いてくれた。

「よし、ソルムにはでっかい話もしとくかなッ！」

「お？」

何だろう？ ドキドキする。

「極端な話、大昔の文明は精霊を道具扱いし過ぎたせいで滅んだと思うんだよな。今は力ある者ない者ごちゃ混ぜだし、馬鹿男の話じゃないが人類共通の敵もいる。だから精霊を狂わせる方向へ進まなければ、大昔のような文明に追い付くと思うんだ」

「……ふむふむ？」

「もし滅びを防げるんなら、この星の寿命が来るまで人の営みは続き、もしかしたら空を越えて他の星々にまで飛び出して、更に広がって続くかも……なんてな」

「また随分と壮大ですねっ」

「まあ星に飛び出して、どーすんだ。どーなんだっていうのは別がないんだが。精霊としては人間が好きだしな。好きなものにはずっと存在して欲しいわけだ」

前を歩いているので先生の表情は見えないが、きっと照れているに違いない。

急に話題が現実へと戻った。

「さて！ 今日の奴が誰かについて行っただけなら、それでいいんだけどな」

自分にとって今、迷子の精霊なんてどうでもいい。

先生の打算的な部分に引っ掛かりを覚えていたのだが、想像以上の話を聞けて、あっという間に霧散する。

空飛ぶ船ですら夢のまた夢のご時世に、星へ行くなんて妄想過ぎだ。

それなのにその妄想を浪漫と捉えた心が勝手に高揚する。

それこそ仕事を増やす事なのに、自分も何かしたい、役立てないかという思いがどこからともなく沸いて来た。

きつと先生と一緒に向上心を忘れずにいられる。

ずっと先生の妄想に乗っかっていたい。

命尽きるまで、どうかしらでワクワクしていられるなんて最高じゃないか？

やっぱり先生とまだまだ一緒にいたいと思った。

そんな思いを膨らませて歩いている内に、今日の下車駅へと戻っていた。

「ちよつと待つてな」

「はい」

電車の事だと思っていたのだが違っていたらしい。

先生が続けて聞いて来た。

「ああ、そうだった。お前も見るか？」

「見たいです」

何の事が分からなかったが、先生の微妙な駄洒落を聞いた時ほど後悔する代物ではないだろう。

「ここがこの駅」

頭の中に極小さな長方形が出て来たと思った瞬間、一本の線が両方向へとゆっくり曲がりながら下へと伸びていく。

そしてその線に付き従うかのように、のっぺらな凹凸が展開した。集落の道や建物、並び立っている森の木々などを一切無視した、必要とあればどこまでも広げられる地図。

「線路を基点ならぬ基線として地図を広げた状態だ。川があっても線路の続く限り見えるから便利なんだよな」

「へえ」。さすが先生」

「かなり省略してるけど、奴の位置が分かればそれでいい」

一度話すのを止め、地図に集中している先生の顔が次第に陰しくなっていた。

そして先生は自分に言い聞かせるように呟く。

「ボケた奴ではあったけど、魔物にやられる程やわじゃない。絶対に何も伝わって来なかった」

「もつと遠くでは？」

「そこまで離れてはいない気がするんだよな。……それとも歳でオレの勘が鈍ってるのか」

少々先生が弱気だ。

これは頭の中の地図をばさつと見ている場合じゃないと気付いて、脳を働かせ始める。

洞窟内でああも簡単に精霊と魔物の位置を把握出来た先生が、迷子の精霊を探す為だけに広げられた地図でその存在が感知されないなど、どう考えてもおかしい。

しかも地図の作り主は地精の王なのだ。

「あ」

地精の王って事は、もしかして。

「ずっと浮かんでいるか、もしくは水の中という事は？」

「……。……ナイス、ソルム」

先生が目から鱗、という表情を浮かべる。

「ふふふ」

役に立ったみたいですよごく嬉しい。

「たぶん水の方だ。さっきの場所の雪解け水が流れ込んでるのは……」

……

「あつ、先生。待って下さいッ！」

早速地図で見当を付けたのだろう、走り出した先生を慌てて追い掛ける。

さすがに網の目の様に広がる側溝は見ずに、大人二人が悠々並んで歩ける幅があり、深さも背丈の半分ほどある用水路まで来て、その流れと同じ方向へ辿り始めた。

普段どんな状態かは知らないが水量は多く、流れも早く見える。

「さすがにここまで近ければ、水の中にいても分かるはずなんだが」

頭の中で用水路近くを拡大してある地図の水の流れは細い空白部分だった。

後少しで更に広い空白、つまり川へと合流しようという場所に近づいた時、雪の重みで折れたらしい、かなり大きく太い枝が、流れを半ば堰止めて周りに水を溢れさせているのが目に写った。

用水路から溢れた水も、これまでの方向を失わず、川の方へと流れて行っているのだが、周囲は完全に水浸しだ。

しかし先生は足元を濡らしながら豪快に突進し、大きな枝を掴み上げた。

それと同時に水から何かが飛び出して来て、先生の首に巻き付いたように見えた。

「先生ッ！」

咄嗟に声を上げたのだが、心配はいらなかったらしい。
のほほんとした嬉しそうな声が聞こえて来る。

「わーい、地の王様だーっ」

「こんなところで何してんだ、お前はっ」

それに構わず、先生はずるずると枝を引き抜いて、用水路の脇に捨てた。

「えつとね？ 水に触ってみたら、とっても冷たくてうつとりなの飛び出して来たのは本日の精霊、姿は聖画に描かれていそうな水の乙女で、そして先生の首に巻き付いたのはその白い両腕だった。

なのだが、どうも言動は幼い。

「重い、痛い。降りてくれ」

「むー。はあーい」

渋々返事をして、精霊は先生の首からぶら下がり状態を止める。

「それでね、お日様に当たるとキラキラってキレイだね。水の中に寝っ転がって、ゆらゆら揺れてね。たまにシュって滑ったり。楽しいよー、地の王様もする？」

「いや、遠慮しとく。でもお前には気持ちいいんだな？」

「うんっ」

「そのまま川に出てみたらそうだ？」

途端に精霊は体を固くした。

「行かない、ここにいます。だってあの方が選んで下さった場所だものっ」

あの方とは当然、聖人ラツの事だろう。

どうやら精霊の中では地精の王よりも、聖人ラツの方が格上らしい。

言い回しが丁寧だ。

「あそこからだいぶ流されてるぞ、お前」

「えっ、そうなの？」

今更キヨロキヨロと周囲を見渡した精霊に、先生は告げる。

「まだ用水路だったから見つけられたけど。正直、水の中だとオレは探せないから……焦った」

「ええっ。じゃあもう水には入らないもん。戻って、ずっとずっとあそこにいるっ」

「せっかく怖くも痛くもなくなっただ。今のお前はもう水の誘惑には勝てない。水を我慢したら、それこそヤバくなる。反動で川どころか海にまで流れて行ったりな」

そしてまた先生は同じ約束を今日も口にするのだ。

「オレはこれつきりさよならだ、なんて言っただけぞ？」

「……。……うん。言われてなかった」

素直に頷く精霊の頭を、よしよしと先生は撫でる。

何だか覚えのある光景だと思った。

「あんな、この川は大きな河に通じてる。そこに今でもオレを見るなり、ラツを盗ったって言うヤツがいるんだ。結局生まれた場所で主と化してて、そいつの周りにちよろちよると集まって来てる連中もいる。そういう連中と一緒にいてくれれば、オレは安心だ」

「むっ」

「もしオレが会いに行った時、たまたまお前がどこかへ遊びに行つてたとしても、近くなら呼び戻してもらえぞ。少なくとも、お互

い伝言は残せる」

「絶対、また会いに来てくれる？」

精霊は今にも泣き出しそうな表情をしている。

「おう。何ならオレとしてはヤツに会いたくないけど、そこまで送って行くぞ？」

「……地の王様と一緒に恥ずかしいから、一人で行く」

「そっか。……それがいいな」

しょんぼりして嫌だったら止めておけば……と口にしたくなる風情だったが、精霊は水へと入った。

そのまま流れて行ってしまうかと思いきや、まだ十分に判別可能な距離でひょこつと振り返ってきた。

「いつてくるねっつ」

「ああ、いつてこいッ。気を付けてなッ！」

そうして今度こそ見えなくなつた。

「……なあ、ソルム」

何だか先生の方が取り残された様な寂しそうな声音だったので、なるべく優しく返事をする。

「はい。何ですか、先生？」

「オレってさあ……、……一緒だと恥ずかしいか？」

その言葉に、悪いが遠慮なく吹き出させてもらった。

また列車に乗って二回乗り換え、王都へ着いた時にはもう空が暗くなっていた。

けれど腐つてもさすが王都と呼ぶべきか、王都内の列車はまだまだ走っており、無事に王都神殿前まで来る事が出来た。

夜になると対応する神官はいないが、王都だけに限らず神殿の門は一日中開かれている。

「お別れだな、ソルム」

そう言つて先生が握手を求めて来た。

でも聖人ラツの遣り残し精霊の一人ではないから、ここでこの手を取つてしまつたら、先生と生涯会えなくなるかも知れない。

「先生。私と魔王を目指してみませんか。王都神殿に入るより、よっぽど面白そうじゃありません?」

「……馬鹿男二号のあほ」

ちえゝ、駄目かあ。

魔王な先生、カッコイイと思うんだけどなあ。

「冗談はさておき、先生とずっと一緒にいたいと思うのですが」

「あんな、ソルム。確かにオレは一人でいるのが寂しいんだよ。でもしばらく誰かと一緒にいると、落ち着かなくなつて来るんだ。我慢出来るのは数日間だな」

案の定な答えが返つて来た。

「だからお前はオレに煙たがられるくらいの偉い奴になれよ」

更に体の中から先生が去つてしまった事に気付く。

体の接触の有無は単なる先生の気分だけで、一切関係がなかったのだ。

「先生……」

そうでなくとも全力で先生との縁が切れるのを拒否していたのに、こつも簡単に退けられたのが悔しい。

「デンも元気だな。付き合つてくれて、ありがとう」

ラツが遣り残した精霊達に出来なくて、現時点で自分に出来る事は何だろうかとフル回転で考えた。

「……先生。暇そうだし、呼んだら来てくれますよね? たまにはストレス発散も大事ですよっ」

「お前、何か……実は物騒な奴なのか? 洞窟一つで充分だろ」

「まあまあそう仰らず」

「じゃあな」

先生はひらひらと後ろ手を振つて消えた。

たぶんカミツシュへ歸つてしまったのだろう。

結局言質は取れなかったが、律儀な先生はきっと来てくれるに違いない。

同意するように、足元にいたデンがぴょんぴょん跳ねた。

読まなくて大丈夫

ラツの話を思い付いたのは、かれこれ十年以上前になります。

当時はラツがティズと会う部分までしかなくて、精霊も古代文明もなく、イリーサはずっと変わらずラツ好きですが、サンフォも拗ねていませんでした。

それがこんなに長くなったのは、当時からラツに愛着があったからだと思います。

あとがきまで書くくらいに入れ込みようです。

一般ウケしやすいように、ティズの性別を女にするか、年齢を上げちゃおっかなあと企んだりもしたのですが、結局は初期設定のまま（笑）

受け入れ領域の広さ以外の力を持たせないようにしたくて、屁理屈を捏ねてラツではなく、ティズを地精の王の主人にしたり。

でも結局、魔物を精霊に戻せる能力が付いてしまいました。

倒す力は持たせずに済んだのですが、魔物はもちろん人間も倒せないラツの代わりに、その分ティズが強くなりました。

地精の王としての力だけじゃなく、手と足も出します。

話を広げていく途中で、神官学校の屋根の上で、ラツ死後に国の守護精霊化しているティズが、誰かにラツとの思い出を語っているイメージが浮かび。

ラツの話自体も、ティズが語っている昔話として出来たら、主人を亡くした精霊の物悲しいシリラス風に……はい、無理でした。

結果、昔話の聞き役のソルムとデンが沸いて、ティズ先生と私の話になったのですが、ラツの話の補足的意味合いが強いです。

デンは三代目地精の王になるのかなあ……と思いつつ、具体的に固まらないので完結です。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6074w/>

売店員と国の結界

2011年10月9日18時22分発行